# 功名が辻（四）

司馬遼太郎



文春文庫

# 功名が辻(四)

司馬遼太郎



文春文庫

功名が辻(四)　司馬遼太郎

し 1 20

文春文庫

476 +税

9784167105204

1920193004762

関ヶ原決戦——徳川方についた伊右衛門は、この華々しい戦でも前線へ投入されたわけではない。勝ち負けさえわからぬほど遠くにあって銃声と馬蹄の轟きを聞いていた。しかし、戦後の行賞ではなんと土佐二十四万石が……。そこには長曾我部の旧臣たちの烈しい抵抗が燃えさかっていた。戦国痛快物語完結篇。　解説・永井路子

し 1 20

ISBN4-16-710520-9

C0193 ¥476E

定価(本体476円+税)

文春文庫

## 文春文庫　司馬遼太郎作品リスト



カバー・村上 豊

**著者紹介**

**司馬遼太郎**(しば・りょうたろう)

大正12(1923)年、大阪市に生れる。大阪外国語学校蒙古語科卒業。昭和35年、「梟の城」で第42回直木賞受賞。41年、「竜馬がゆく」「国盗り物語」で菊池寛賞受賞。47年、「世に棲む日日」を中心にした作家活動で吉川英治文学賞受賞。51年、日本芸術院恩賜賞受賞。56年、日本芸術院会員。57年、「ひとびとの跫音」で読売文学賞受賞。58年、「歴史小説の革新」についての功績で朝日賞受賞。59年、「街道をゆく〝南蛮のみちⅠ〟」で日本文学大賞受賞。62年、「ロシアについて」で読売文学賞受賞。63年、「韃靼疾風録」で大佛次郎賞受賞。平成3年、文化功労者。平成5年、文化勲章受章。著書に「司馬遼太郎全集」(文藝春秋)ほか多数がある。平成8(1996)年没。

文春文庫

文春文庫

# 功名が辻

(四)

司馬遼太郎

文藝春秋

功名が辻(四)

司馬遼太郎

文春文庫

文春文庫

# 功名が辻

(四)

司馬遼太郎

文藝春秋

目次

# 功名が辻 (四)

# 東　征（承前）

暁天とともに伊右衛門ははね起きた。
「具足を」
と声をかけるや、小姓たちがむらがって伊右衛門に具足を着せた。
玄関からおりると、すでに馬の口取りがひかえている。
伊右衛門は馬上の人となり、
「みごとな晴れだな」
と、天を見あげた。
地には、福岡市右衛門、深尾湯右衛門、野野村太郎右衛門九郎、安東太郎太左衛門、祖父江新右衛門あらため道印、それに死んだ五藤吉兵衛の弟内蔵助ら部将格の者がひかえている。
「軍議だ」
伊右衛門は馬上からいった。

「供の人数はわずかでよい。市右衛門、湯右衛門、宰領せよ」
「はっ」
「弁当は作ったか」
伊右衛門は、いうことがこまかい。
「すでに支度ができております」
と、深尾湯右衛門が閉口したようにいう。
「なにぶん小山の御陣までゆくのだ。帰りは遅くなるゆえ、三食ぶんは必要であるぞ」
「四食分用意しております」
「それならばよろしい」
伊右衛門は馬を歩ませた。馬上のまま山門を出、七段ばかりある石段を、たくみにおりた。なんのケレン味もない性格だが、馬術だけが自慢でときどきこういうことをやる。
街道に出ると、
「待て待て、隣り陣屋は堀尾信濃守殿じゃ。隣り同士のよしみで誘って出かけよう」
と、人数の足をとめさせ、堀尾信濃守忠氏が宿営している名主の屋敷までゆき、そこで馬をおりた。
「信濃守殿はまだ御出発ではないか」
と門の警備の士にきくと、いま朝がれいを召しておられまする、という。
「湯右衛門、門内へ使いせよ。小山までの道は遠い。信濃守殿と馬をならべて同道したいと申しあげよ」
伊右衛門がそういうと、深尾湯右衛門がはっと答えて門内へ駈け入った。
門内にはすでに供の人数の準備ができていて、主人堀尾忠氏の支度がおわるのを待っている。
湯右衛門はしかるべき堀尾家の家士をつかまえ、
「手前、主人対馬守が」
と、伊右衛門の口上をつたえた。堀尾家の家士は、
（大名の道連れとはめずらしい）
といったような妙な表情でうなずき、屋内に駈け入って忠氏に取り次いだ。
堀尾忠氏は、茶漬けを喫している。
まだはたちそこそこで、当節の武将にはめずらしく色白で、秀麗な容貌をもっていた。
「ほう、対馬守どのがさそいに？」
と、箸をとめた。
「はっ」と取次ぎの士が頭をさげた。忠氏は考えぶかそうな目で思案していたが、やがて、
「相変らずお律義なことだ。なるほどのう、隣り陣屋であるゆえ、と申されて誘いに見えられたか」
「はっ、左様で」
「いずれでお待ちなされておる」
「門前の路上でござりまする」

「それはそれは。湯茶でもご接待せい」
と、忠氏はいそいで箸をつかいはじめた。
伊右衛門は、路上にいる。
(忠氏どのは若いながらも智恵ぶかいお人だ。同道すればみちみち、よい智恵がきけるであろう)
と考えているのである。

堀尾信濃守忠氏は、十二万石の大名で、居城は遠州浜松城である。伊右衛門の掛川城とはいわば隣り同士で、その点のつきあいもふかい。
父は、堀尾吉晴。
「茂助」
という通称で有名な勇士である。ことしで五十八歳になる。
伊右衛門にとっては、むすこの忠氏よりもおやじどのの吉晴のほうが年上の同僚としてのつきあいが長かった。
堀尾家は、このおやじどの「茂助」一代できずきあげた家である。
こんな逸話がある。
織田信長の在世当時、尾張国上郡のあたりで大巻狩りがあった。
信長は、狩りのすきな男で、鹿の皮のムカバキをはき、野太刀を腰に横たえ、藺笠をかぶり、馬上ムチをあげてみずから指揮をした。



千人以上の勢子をつかい、かれらに陣貝、鉦をならさせて奥山から鳥獣を追いたてさせ、山野の要所々々で部隊を配置し、とびだしてくる獲物を打ちとらせるのである。
信長は尾根にかけあがったかとおもうと谷へ駈けおり、馬を乗り散らしつつ、
「鉄砲組はこの道で待て、弓組はあれに、おそらく鹿はあの谷を渡ってくる、猪はあの岩間を駈けぬけてくるであろう。さればこの杉をタテに狙え」
と間断なく下知し、やがて山の中腹のキコリ道まで駈けあがったとき、
「あれよ」
と前方の足軽どもがさわいだ。
むこうから小牛のような大猪が風を巻いて駈けてきたのである。
前面にいた連中は鉄砲、弓をとりなおすまもなく、槍で突き入れる者があったが無残にはねかえされた。さらに矢を射たがあたらず鉄砲も射ちかけたが、弾がそれた。
そのまま猪は突進してきてあやうく信長の馬がはねあげられようとしたとき、横あいの山腹から駈けおりてきた少年が、
「やっ」
と竹槍で突いた。竹槍は猪の横腹に突きささったが、ボキリと折れ、折れたが少年は機敏に毛をつかんで猪の上にまたがり、両者くるいまわって格闘するうち、少年、山刀をぬき、猪の脇腹に突きたてぐりぐりとえぐった。
どっと猪は横倒しにたおれたが、少年も力尽き、気絶して動かない。

「たれかある、あの子供を介抱せよ」
と信長は命じ、人に助けおこさせた。
手織りの縞木綿のアワセに友縞のタッツケをはき銅作りの山刀を差している。年のころは十四、五で、村の勢子の一人であるらしい。
そのときまだ木下藤吉郎といっていた秀吉が、
「この子供を、ぜひ、それがしの家来にしとうござる」
と信長にたのみ、ゆるされた。名は仁王丸といった。のち、茂助とあらためた。
勇敢で、才略がある。秀吉が近江長浜ではじめて大名になったとき、茂助は百十石をあたえられ、ついで三百石に加増された。秀吉が姫路へうつると千五百石、さらに三千石、とこのあたりまでは伊右衛門とあまりかわりなかった。
累進して遠州浜松十二万石を領し、いまでは豊臣家の執政官として、五大老に次ぐ三中老の一人になっている。
その子が、信濃守忠氏である。まだ正式には家督を継いでいないが、父にかわって堀尾家の人数を指揮している。
忠氏は、まだ二十三歳のわかさだが、その智謀は父にまさるといわれている若者である。
やがて堀尾忠氏が食事をおわり、鞭をもって陣屋の門から出てきた。
伊右衛門に丁寧にあいさつし、



「これはこれは、わざわざお誘いくだされ、恐縮でござる。支度につい手間がとれ、対馬守どのともあろうお人を、路傍で待たせてしまいました」
「ごあいさつ痛み入ります。当方こそ勝手にお誘い申しあげにきたわけで、ごめいわくでありましたろう」
伊右衛門は、馬に乗り、自分の人数をふりかえって、
「汝らは、あとで来よ。途中、信濃守どのとクツワをならべて駒を進め、世間ばなしなどしたい」
といった。
伊右衛門がこういったため、信濃守の人数も遠慮せざるをえなくなった。しかし道はひどくせまい。
両隊ならんで進む、というぐあいにはいかないのである。
伊右衛門はこういうことにはずいぶん気のきくほうで、
「信濃守どののお人数は、どうぞおさきに進まれたい」
といった。自然、隊列は、堀尾隊が前衛となり、山内隊が後衛となった。伊右衛門と堀尾忠氏は、その真ン中に馬首をならべて進むことになった。
「よい日和で、けっこうでござるな」
と、伊右衛門は馬にゆられてゆく。
「まったく左様で」
「お父御はお元気でありますか」

「いたって壮健でござる」
と、忠氏はまだ少年のにおいの残った頬を微笑させていった。
「むかしは」
伊右衛門はいった。
「お父御とこうして馬をならべながら物語などしたものでござる」
「父もよく左様な昔ばなしなど致しまする。太閤様の中国攻めのころ、羽黒の陣でご一緒でありましたとか」
「一ツトリデを守っておりましてな、思えばなつかしいことでござるわ」
と、伊右衛門はゆるゆると馬をうたせる。
「今に変わらず、むかしからそれがしは愚鈍でありましてな、敵状の判断などでわが頭ではわからぬことがあるとお父御のご判断をききに行ったものでありました」
「これはご謙遜」
と、若い忠氏は馬上で頭をさげる。
「いや、謙遜ではござらん。それがしは戦場でこそ人におくれをとったことはござりませぬが、どうも諸事わからぬことが出る。そのつど朋輩にきいたり、部下にきいたり、それはそれは忙しいことじゃ。武運よく城一つをもち、六万石を知行する分際にまでなりましたが、これもみなひとのおかげでござる」
「よいお気象でありますな。対馬守殿のご人徳でありましょう。ご人徳がなければ、なかなか人



というものは智恵を貸すものでござりませぬ」
「いやいや、智恵でも貸してやらねば伊右衛門は自立できまいということで、みなみな、寄ってたかってたすけてくれるのでありましょう」
「それこそえがたいご人徳でござる。やはりひとのまねのできぬことだ。されば対馬守はお一人のお智恵でなく何人もの智恵を常にあつめ、それを取捨して行動されるのでありまするな」
「根が愚鈍でありますゆえ」
と、伊右衛門は、この男ほどの古参大名でありながら若僧の信濃守に気味がわるいほどへりくだる。それがごく自然にうけとれるのは、やはり伊右衛門がもっているとくべつな人徳というものかもしれない。

「ところで」
と、伊右衛門はいった。
「きょうの小山での軍議は、どのようなことになりましょうな」
「左様。……」
堀尾忠氏は、前方の白雲を見つつ、含み笑いして馬にゆられてゆく。利口な男だけに、胸中なにか確乎たる見通しがあるのであろう。
なにしろ、伊右衛門も堀尾忠氏も、「東海筋の大名」という特異な位置にある。
かつて秀吉が、もし関東の家康が叛乱をおこした場合を想定し、箱根から西の東海道のおもな

要害、宿駅に、豊臣家でももっとも篤実な性格の、つまり馬鹿正直そうな大名を人選して置きならべたのである。
駿府城には中村一氏、掛川城には山内一豊、横須賀城には有馬豊氏、浜松城には堀尾吉晴、吉田(豊橋)城には池田輝政、岡崎城には田中吉政、尾張清洲城には福島正則、といったぐあいで、どうみても律義で一徹そうな人格の連中で、たとえ徳川氏から利をもって誘われても容易に動きそうにない。
秀吉の対徳川戦略では、家康が箱根をこえて出てきても、この東海道の律義者の城々をいちいちふみつぶしながら進まねばならぬ。そのうち上方で戦闘準備をし、どっと押し出して家康を撃破してしまう、というものであった。
東海道筋の大名群は、いわば選りぬきの律義者ぞろいだけに、家康もその律義をおそれ、事前に政治工作することをほとんどしなかった。家康は、豊臣恩顧の大名のうち有力な者にはほとんど味方にひきいれる裏工作をしてしまっているが、たとえば伊右衛門などは黙殺されている。これはそういう理由によるものであろう。
堀尾忠氏のばあいも同様だった。ふたりはその点でも立場が同じなのである。
「いったい、このさき天下の形勢はいかがなりゆくと思われます」
と、伊右衛門は案じ顔できいた。
「徳川殿の世になりましょうな」
若い忠氏がいった。さらに、



「それがしの家では父も、太閤なきあとは徳川殿を頼み参らせて家を立てよ、と申しております。それがしもそうするつもりであります」
「なるほど」
と伊右衛門があまりに感心するので、忠氏は不審におもい、
「それとも対馬守殿は、大坂の石田治部少輔に加担なされますか」
と真顔でのぞきこんだ。伊右衛門はあわてて、
「いえいえ決して、天下は天下を取る器量の人の手にのみ落ちるべきものでござる。織田信長公が本能寺で急死あそばされたあと、織田信雄(のぶかつ)どのをはじめあまたの御子がござったがその器量なく、結局は一部将にすぎなかった秀吉公が相続なされた。その先例で申せば、このたびは徳川殿の手に渡るのが順序であり、世の勢い、人の望み、天の理にもあうというものでござろう。それがしも、非力ながら徳川殿を押したてて世運をひらくつもりでござる」
「よいご分別でござる」
と、忠氏は安堵したらしい。
「しかし信濃守殿」
「はい」
「きょうの軍議でござるが」
伊右衛門は、はじめの話題にもどった。
「どのようなぐあいになるのでござろうなあ。貴殿はお若いながら智恵第一といわれたお方でご

ざるゆえ、なにかとお見とおしがあることでござろう」
「いやいや、拙者のような若輩にろくな見通しなどありませぬ」
と忠氏は謙遜したがそこは若い。先輩の伊右衛門のへりくだった態度になんとなく優越感をおぼえたのであろう、
「一つござる」
と、やや得意そうにいった。
「こういう場合、人の心というものはなかなか微妙なものでござってな」
堀尾忠氏は、いった。
「心中、徳川殿に与したいと思っても大坂の妻子が気にかかる。それに果して徳川殿がつよいか大坂がつよいか。大坂がつよい、断乎として言う者があればなるほどそのとおりじゃとも思い、いやいや徳川殿の弓矢は天下一じゃといわれればそれもそうかと思う。容易に決せぬ」
「なるほど」
年上の伊右衛門はうなずく。
「いま、人の心は野分にゆれるスキ野のようじゃ。風が西に吹けば西になびき、東に吹けば東になびく。定見というものがない」
「左様、左様」
「いつの時代、いつの場合でも、人間の十中八九は定見もなく風次第で動く、というのが正直な



ところ、浮世の姿でござるよ」
「ははあ」
伊右衛門は感心してしまった。自分の齢の半分しかないこの若僧が、百年も人の世を見てきたようなことをいうのである。
「こういうときにはみな、隣人の顔色をうかがっている。隣人が東に動けばわれも東へ、隣人が西につく気配をしめせばわれも動揺し、すべて人によって成そうとしている。ところが」
堀尾忠氏は、唇をぬぐい、
「その隣人までが、どうしてよいかわからずきょろきょろとうわ目づかいし、たがいに顔色をうかがっている。それが、いまからはじまろうとする小山軍議の正直なすがたでありましょう」
「もっとももっとも」
伊右衛門は、二、三度うなずいた。
「されば」
忠氏はいう。
「まっさきに口火を切る者が、天下を決定する者でござるよ。歴史を変える者でござる」
「ほほう」
「軍議がはじまろうとするときの諸侯一同の顔が、いま目に見えるような気がします。議場はシーンとしている。顔色をみせまいとうなだれている者、視線のやり場がなくておのれの爪の色ばかり見ている者、畳の目かずをかぞえている者、たれがどういちいち顔がみえるようでござる」

「信濃守殿は、千里眼でありますな」

「千里眼ではござらぬ。ちょっと考えれば目に見えることです」

「いや、おそれ入ったことだ」

「そこで」

忠氏はいう。

「まっさきに進み出、余人は知らずそれがしは徳川殿にお味方申しあげる、といえば軍議はわっとそこへゆく。みな、われおくれじと口々でさけび、わめき、われこそは最初から徳川殿を押したてるつもりでござったとか、拙者に先鋒をたまわりませとか、骨をくだいて働き申すとか、それはそれは、村雀が同じ声で一時に鳴きだすような騒ぎになる。人の世の機微というものはそれでござるよ」

「ははあ」

「それだけでは口火の役はつとまらぬ。物事は具体的に言わねばなりませぬ。たとえばそれがしは浜松の城主にて徳川殿が西征するばあいの通りみちになります。さればわが城を徳川殿にあずけ」

「ほう」

「城をカラにしていっさいの家来をひきいて西征軍に加わりたい、カラ城には徳川殿のお旗本衆を入れてお留守していただく、とこう言えばもはや誠意歴然、身も心もあげてお味方する、という形になりましょう。されば軍議の席にいる東海道の諸城主はわれもわれもと城を空け、もはや



それだけで徳川殿は勝ったも同然になります」

「勝ったも同然?」

伊右衛門はつぶやくように問いかえした。

「左様。東海道の諸大名が風になびくように徳川殿に城をあけわたしてしまえば、他の大名はあっと思うでござろう」

「思いましょうな」

「もはや戦わざる前に徳川殿の天下がきたようなものでござる。されば軍議の席に並居る他の大名も時勢におくれまい、負け側になりたくないとしてわれもわれもというぐあいにお味方につき、かつ士気も大いにあがろうというものでござる」

「ほほう」

そのとおりだ、と伊右衛門は思った。それにしてもこの若い堀尾家二世は、なんと鋭敏な頭脳をもっていることであろう。

「ほとほと感服つかまつりました。お話をうかがっているとわれらはとてもとても歴戦の古つわものなどと誇ってはおれませぬ。貴殿の智謀の前には赤児も同然じゃと思いました」

「いやいや」

堀尾忠氏は心地よげにかぶりをふり、

「ちょっと思いつきを申したまででござりまするよ。智謀などとほめられるようなことではあり

ませぬ」

「ご謙遜」

伊右衛門は、ゆらゆら鞍の上でゆれながらあおぐように忠氏を見た。

「信濃守殿が軍議の席でその口火を切られますならば、それがしも掛川城を空けることにしましょう」

「あっははは」

忠氏は伊右衛門のきまじめさがおかしくなってきたらしい。

「対馬守どのは年古りた侍にも似ず素直なお人柄でありまするなあ。右はちょっとした思いつきで、真にうけてもらってはかえってこちらがうろたえます」

「ご冗談でござったか」

「いやこれはどうも。対馬守どのは、おなごについてもお行儀がよろしいということでござりまするなあ」

「はあ？」

話題がいきなりかわったので、伊右衛門はついてゆけなかった。

「いや、お人柄については父からもいろいろ伺っておりました。まったくその……」

お人好しでござるな、と言いたかったらしいが、さすがに言葉をのみこんだ。

やがて小山についた。

小山は、下野国(しもつけのくに)の名駅である。



人家も多く社寺も多く、家康がその直属の大部隊を宿泊せしめるのに好適な聚落(しゅうらく)である。

伊右衛門が馬上からのぞむと、宿場のなかはむろんのこと、宿場の西の現声寺、西南の祇園社の森などにさまざまな旗・ノボリがひしめくように立っている。

しだいに近づくと、宿場の入り口に臨時の柵が打ちこまれており、そこに家康の使番疋田(ひきだ)源左衛門が立っていて、

「堀尾信濃守殿、山内対馬守殿まで申しあげます。軍議の場所は、ここから西北小山の旧城でござるゆえ、おまちがえなきように」

「お役目ご苦労」

と伊右衛門はあいさつしてから、自分の人数を指揮する深尾湯右衛門をよび、

「これよりむこうに人数をつれて参るのははばかられる。これにて待つよう」

と命じ、十人ばかりの徒士、足軽に槍一本、挟箱(はさみばこ)二つ、馬印を持たせ、せいぜい五百石程度の供まわりで伊右衛門は小山の旧城への小道をのぼりはじめた。

堀尾忠氏も、伊右衛門にならった。

伊右衛門は、赤土の坂道をのぼった。なにしろ城あとの丘だから、道はけわしい。途中松の垂れ枝などにつかまって身をせりあげねばならぬ急坂もあった。

（それにしても老いたことよ）

わかいころは幾十たびとなく城攻めに参加して、これしきの坂はあっというまに登ったものだ

が、いまはひどく息ぎれがする。

「殿、だいじょうぶでございまするか」

と、野野村太郎右衛門九郎が背後から尻押しをしながらいった。

「いかがでございます、そのあたりの草むらでひとやすみなされて弁当などお使いあそばしては」

「ふむ」

煮えきらぬ返事をした。いたわられるのは、あまり愉快なことではなかった。

(齢のことは考えぬことにしているが)

と、伊右衛門はあえぎながらおもった。

(もう、わしは五十六になる)

よく生きてきた、と思う。さほどの力量もなくさほどの才能もなく、ただ戦場で死ななんだというだけで、五十六年生きた。生きただけでなく、いまは諸侯の一人としてこの城あとを会場とする軍議に臨もうとしている。

(運のよかったことよ)

ふと、大坂にいる千代を思った。千代も数えて四十四歳になる。しかしどういう素質なのか、千代はいまでも三十そこそこにしか見えぬほどに若い。

(千代、わしは老いたわ、これしきの坂で息ぎれがする)

「殿」



と、尻押しをしている野野村太郎右衛門九郎がいった。

「諸侯はまだあつまっておられませぬ。軍議までまだ間がありましょう。このあたりの草むらにてお弁当を召されては」

「なるほど、まだ早いか」

それを自分への口実にして伊右衛門はやすむことにした。さっそく野野村太郎右衛門九郎が徒士や足軽を指揮し、休息に適当な場所を見つけに行った。

やがて、道わきから草をわけて百歩ばかり入ったあたりに小さな平地を見つけてきた。

伊右衛門が行ってみると、ちゃんと草を折り敷いてあって、かっこうなシトネをつくってくれている。

「ほう、見はらしがよいな」

すぐ眼の前が切り落されてガケになっており、眼下に思川のうねっているのがみえる。

「いかにも廃城らしく物寂びてあるな」

伊右衛門は、あたりの松林、草におおわれた城塁のあとを見まわした。この男にしてはめずらしく詩的なことをいう。

「この小山城は、源平のころ藤原秀郷の後裔で下野大掾で小山政光という者の築いたところだという。この小山氏の所領は都賀、寒川、結城の三郡にまたがり、上六十六郷、下三十六郷、あわせて一万余町に及ぶほどに広大であったという。小山氏は政光のあと十数代つづき、戦国の世になってから小田原の北条氏に降伏しその被官となってこの城をまもっていた。ところが太閤世

に出給い、小田原の北条氏を討伐なされ、ついで関八州を征服なされた。そのとき小山氏も城地を没収されてほろび、城は廃城となり、いまは草の生いるにまかされている。落城の前に城主高綱は十九歳で戦死し、その弟秀広という少年がかろうじて逃げたという。その秀広はいまいずこにあるか。人間、敗者にはなりたくないものだ」

弁当がはこばれてきた。

野陣のこととて茶はなく、野野村太郎右衛門九郎が下から谷川の水を汲んできてそれを竹筒に満たし、伊右衛門の食膳に供した。

めしを食いおわっても、伊右衛門は立たず、ぼんやりと眼下の関東平野を見はるかしている。

「殿、どうなされた。だいぶお歴々が坂をのぼってこられるようでござりまするぞ」

「そうだな」

伊右衛門はそれでも立たず、草の穂をぬいて茎を嚙んだ。ぐちゃぐちゃと嚙むうちに青い汁のにおいが口中いっぱいにひろがり、妙に少年のころを思い出させた。

(よく生きてきたものだ)

さきほどの述懐が、またくりかえされるのである。

「さ、お立ちあそばすように」

「まあよいではないか。なにしろ白沢や喜連川(きつれがわ)あたりに宿陣をもっている者もいる。かれらが参着するまでにまだ多少の時間はあろうわい」



「お腹でもおわるいのでござるか」

と、野野村太郎右衛門九郎が、のぞきこむようにいった。

「べつにわるくはない」

伊右衛門はさきほどの堀尾忠氏のやや高ぶった利口づらを思いだしている。といってべつに不快な後味はなく、むしろ、

(智恵の深い若者を見るというのは、気持のよいものだ)

と思っている。自分には智恵がない、とその点ではあきらめきっている男だけに、智恵のある者へのあこがれのようなものが伊右衛門にはあり、それがこの男の一種の美点のようなものになっていた。

(わしは古くから戦場を往来してきた。経験ではひとに譲らぬつもりだが、経験から智恵が出てくるというものではないらしい。もともと智恵とは、うまれつきのようだな)

しかし、と伊右衛門はおもった。

(わしには肚がある)

その肚もうまれつきのものではなく、場数を踏むに従って出てきたもので、いまでは事に臨んでも容易にたじろがない。たいていの変事は、その同型のものか類似のものをむかしに経験している。だから事に臨んでそれを思いだすと気が落ちつく。

また、人馴れもしている。どのような男に出会っても驚かなくなり、また天下の諸侯のすべては顔見知りであり、その手のうちも知っており、その能力もかれらの過去から推して、

(たいしたことはない)

とタカをくくるようになった。こういう落ちつきぶりは、やはり経験のふるさからきたものであろう。堀尾忠氏の智恵には頭をさげるが、かといってたじろぎはしない。自分には自分の古豪らしいよさがあるとおもっている。

(しかしおもしろい意見だ。しかしあの若者はあの意見を、満座の前でいう度胸があるだろうか)

自分ならある、と伊右衛門はおもった。織田家に仕えて以来幾十の戦場に生死を曝してきてもはや人間の世を高みから見るようになっているありがたさである。

「行くか」

腰をあげた。

熊笹をかきわけてゆくと、小虫が灰神楽をあげたように飛び立った。

「虫の多い丘だな」

伊右衛門は、坂道に出た。

「すこし元気が出た。もう尻押しはいらぬ」

と、一歩々々、体を持ちあげるようにしてのぼった。

やがて頂上の旧本丸についた。

「そのほうどもは、どこかそのあたりの松の下にでも休息していよ。軍議は半刻もかかるまい。軍議から出てきたときは、天下が変わっている。この光景、まご子の代まで伝えるようによく見



ておくがよい」

旧本丸の平坦地には、このあたりの百姓を総べている大庄屋の屋敷がある。

屋敷といってもごく小ぶりな建物で、おおぜいの人が集まるのに多少窮屈であった。そのため、きょうの軍議のために昨日あたりから近在の大工をかきあつめて急造したらしい板ぶきの建物が、屋敷の背後に建っている。

「おお、大夫どの」

と、伊右衛門は前をゆく三十七、八の男に声をかけた。福島左衛門大夫正則である。

正則は、風折烏帽子にヒタタレ、それに小具足をつけ、供には太刀持ち、挟箱持ちなど数人をつれているにすぎない。

尾張清洲二十四万石の大大名である。故秀吉のいとこにあたるという点で、またいとこである加藤清正とともに少年のころから秀吉に目をかけられ、異数の出世をとげた。秀吉からとくに羽柴の姓をゆるされ、羽柴清洲侍従などとよばれている。

実力はある。

戦場に出ては獰猛といっていいほどに勇敢な男で、清正とともに豊臣軍団の突撃隊長といってよかった。ただ智謀がある、というような男ではない。

「やあ、対州か」

と、正則はふりむいて変に気弱そうに微笑した。この男が、である。

(妙だな)

伊右衛門はおもった。よくみると、かねて大人になりきってない顔だと伊右衛門がひそかに思っていた正則の顔が、ひどく暗い。

(この男、悩んでいるのではないか)

伊右衛門は直覚した。正則と、こんど大坂で挙兵した石田三成とは世に有名なくらい不仲のあいだがらである。三成の肉に噛みついて食い殺してもよいともなれば正則はとっくにそうしたであろう。

ところが、三成はこんどの家康討伐の挙兵について「秀頼公の御命令である」としている。豊臣家の恩を思うことの異常につよいこの男は、三成への私情はともかく、この挙兵名目にこだわっているのであろう。

が、伊右衛門は後日、正則に関する重大なことを知った。

家康は、豊臣家諸将のなかで秀吉の縁故である福島正則と加藤清正の二人にもっとも大きな配慮をはらってきた。

清正については、秀吉の死の直後家康は養女をあたえたりして十分にその心を攬り、こんどの上杉征伐の出発にあたっても清正が、

——ぜひ従軍しとうござる。

とねがい出たのを、九州が不安だから、ということで領国の肥後熊本にもどしてある。だからまず大丈夫といっていい。



家康は、正則が不安であった。その直情径行な性格からしても、どういう行動をとるかわからない。

このため、昨夜、とくに正則と仲のよい黒田長政をよび、内意をきくようにいってある。もし家康につく、ということであれば、軍議の席上まっさきに正則が進み出て、

「余人は知らず、それがしは内府にお味方申しあげる」

という旨を大声で言い、そのひと言で他の豊臣家諸侯の心をひきずるように、という旨の狂言の筋まで黒田長政に教えこんである。

長政は正則を説得し、正則はその狂言の片棒をかつぐことを了承し、きょうの軍議に出てきたのである。

しかし正則の性格、豊臣家における特殊な立場からみて、わずかながらも心に割りきれぬものがあったのであろう。

だから表情に暗さがあった。

とは、伊右衛門があとで知ったことである。

「対州の陣所に、その後大坂表からなんぞ報らせが入りましたかな」

と、正則は伊右衛門にきいた。訊き方にもどこか、伊右衛門の肚の底をさぐろうとするようなにおいがある。平素の正則らしくもない目つきである。

(この男も、こういう目をするようになったか)

とおもい、伊右衛門はむしろ正則の立場を気の毒におもった。

「べつに入りませぬな」

「おぬしの北ノ方は、いにしえの清少納言にもまさるような智恵あるひとゆえ、ご安心なことであろうな」

清少納言という名前を正則はどこできき知ったのであろう。

伊右衛門はむろん知らず、巴御前や板額のような女豪傑であろうかと思い、

「なにをいわれる。それがしの奥はそのような鬼女ではない。火をみればこわがり、屋敷を軍勢にかこまれれば念仏をとなえて懸命に観念を沈めるような頼りげもないおなごでござる」

「なるほどの」

正則はなにに感心したのか、ひとりうなずき、二、三度頭をふってむこうへ行ってしまった。

そのあと、伊右衛門は来着するさまざまの大名から声をかけられたり、声をかけたりした。まず、細川忠興がある。この男の内儀は大坂で屋敷に火を放って自害していることは全軍にかくれもない事実であったため、

「大坂のこと、愁傷しごくに存ずる」

とあいさつしておいた。

「いや」

忠興はそういったきり、ひどく気の強そうな横顔をみせてむこうへ行った。この男が一も二もなく徳川方につくこともその前々からの行動からこれまた全軍周知のことである。つぎに、浅野



幸長がきた。幸長も以前から徳川党であった。ひどく緊張して伊右衛門が会釈したのも気づかず、大またで屋敷のなかへ入って行った。

（さて）

伊右衛門はちょっと空を見、ゆっくりと屋敷のなかに入った。先着の尾張黒田で三万石を食む一柳監物直盛が、

「やあ、対州」

と、自分の横の座をあけてくれた。この男の兄の直末とはずっと朋輩だった仲だし、直末が小田原の山中城攻めで戦死したとき、伊右衛門はほんの数十間と離れておらず、その最期も知っている。

だから、直盛には特別な親近感がある。

直盛は武辺者だが、こういう晴れがましい軍議の席に出ると蒼白になる人で、体が小きざみにふるえているようであった。

「対州、いったいどうなるのかな」

といったが、よく聞きとれない。前歯が欠けて声が洩れるのである。怒りっぽい男で人が面相のことをいうと、剣のツカに手をかけて討ち果たすような勢いで激怒するという。

「わからん」

伊右衛門は答えてやった。どうなるもこうなるもない。たかだか三万石程度の身上なら大勢に順応してゆくしか仕方がないではないか。

そのあと、志摩鳥羽の城主で三万石の九鬼(くき)守隆、大和御所八千石の桑山守晴などの小身者が伊右衛門のそばにすわり、前には阿波徳島十八万余石の蜂須賀至鎮(よししげ)などがすわった。

おいおい人が集まってくると、伊予で八万石を食んでいる藤堂高虎がまるで徳川家の家人(けにん)のような顔でさかんに人々のあいだを周旋しはじめた。この男は秀吉にとりたてられてきた男でありながら、早くから家康のために間諜まがいのことまでして蔭ではずいぶん活躍しているという話を、伊右衛門はきいたことがある。

やがて家康が着座した。

むろん、上段の間である。

下座にいる諸侯はいっせいに家康にむかって拝礼した。むろん主君として拝礼したのではなく、家康が内大臣という、豊臣家諸侯のなかでの最高位の官位をもつ人であったからである。

当然、家康も答礼した。このばあい相互礼で、いわばたがいにあいさつのようなものであった。

しかし家康はあいさつがおわってもなにもいわない点、まるで主人のようであった。主君というのはこういう場合、家臣に声を聞かせるものではない。意思をつたえるのは、家老級の者がやる。

この場合もそうであった。

家康のそば、つまりそのすぐ下座に、徳川家の家来である本多正信と、本多忠勝がひかえ、

「遠路ごくろうでござりました」



と、本多正信が半身を諸侯団のほうにねじむけ、塩から声でいった。正信は僧侶あがりの男で、佐渡守を称し、六十前後の老人で底意地のわるそうな眼をもち、家康のふところ刀といわれている。

「きょうおあつまりねがったのは余の儀ではござりませぬ。上様、上杉征伐に御発向の途上、はしなくも上方において石田三成が御謀叛の旗をあげ、その報らせが入り申した。このことすでにご案内のことと存ずる」

正信はごくさりげなく、上様ということばを使った。上様とは、天下の主宰者のことでその敬称は故秀吉に対してだけつかわれてきた。それをいつのまにか家康に対してつかっている。「石田三成ご謀叛」ともいった。三成の挙兵は家康に対して謀叛になるはずがないのだが、正信はしいてその用語を使った。家康がすでに「天下様」であることを、暗に宣言したようなものであった。

「ところで」

と、別な声がおこった。

伊右衛門が伸びあがって見ると、なんと正信でも本多忠勝でもなく、家康の家来でない者がいつのまにか家康の側近に侍し、家康の意思を代弁する役目をひきうけているのである。

山岡道阿弥(どうあみ)

岡江雪(こうせつ)

のふたりの僧形の武将であった。

このふたりは、秀吉の遺臣で、秀吉に愛されそのお伽衆（役職の名・お話し相手）となり、伏見城内に屋敷まで賜わっていた。

　山岡道阿弥はかつて備前守景友と称し、近江甲賀侍の棟梁である。足利幕府に仕え、ついで織田家につかえ、さらに隠居後は豊臣家につかえた。なかなかの茶人で諸侯との交渉もひろく、家康がわざわざこの者をつれてきたのは、かれの口を通して家康の意思を語らせるほうが、豊臣家の諸将に物やわらかくひびくと思ったからであろう。細心な演出であった（山岡はのち幕臣となり、この家系から幕末の名士鉄舟山岡鉄太郎が出ている）。

　岡江雪は、小田原北条家の旧臣で、北条家が秀吉に討滅せられたあと、秀吉につかえお伽衆になった。この男も茶人だから諸侯との交際がひろい。

（いい老人を人選したものだ）

と、伊右衛門は、徳川家の政治力というものに舌を巻くおもいがした。

　山岡道阿弥はいう。

「石田治部少輔がこと、かれは内府への遺恨をもって、ことさら他事に寄せて乱をおこそうとするようでござる。察するに会津の上杉景勝としめしあわせた一挙でござろう。この石田には備前中納言宇喜多秀家、安芸中納言毛利輝元などが加担するそうでござる。治部は幼君秀頼様を擁し、そのお為であるとして挙兵したゆえ、その誘いにそむきがたく思われる仁もあろう。また大坂に人質をおかるる方々は、治部に味方せんかどうか、お迷いなされておるであろう。これも余儀なきことでござる」



道阿弥は、ちょっと言葉をとぎらせ、息を入れた。

　道阿弥老人は息を大きく吸い入れてから、

「左様なむきは、これよりとくとく領国に帰り、城をかためて籠城の支度をなされようと、大坂へはせ参じて治部少輔と合流なさろうともわれは一向さしつかえなし、お邪魔だてはせぬ、との内府のおおせでござる」

（あっ）

と伊右衛門はおもった。家康が大度量を示した、というより、いわばひらきなおっての凄文句といっていい。去る者は去れ、というのは、

　——それしきのことでびくともせぬほどの勝利の自信が当方にある。

という反語なのである。

　このせりふに、諸将ことごとく戦慄した、といっていい。

　場内は、しーんと静まっている。あちこちでかたずをのみくだす音さえきこえた。いずれも千軍万馬の連中なのだが、こういう自家の興亡をこの場できめねばならぬ事態に立ちいたるとみじめなほどに緊張するものらしい。

（いまこそ、何か言わねば）

　伊右衛門はそう思った。議場で皮切りにそれも決定的な発言する者こそ議場の空気を一変させるものだ、ということを智恵者の忠氏にきいた。それを実行せねばと思ったが、そう思うだけで

体がわなわなとふるえてくる。

伊右衛門だけではない。

どうやら忠氏もどこかの席で体がふるえているらしく、いっこうに発言する様子もないのである。

そこへ、

「ご免つかまつる」

と膝をすすめた男がある。伊右衛門がおどろいたことに、福島正則であった。

「余人は知らず、拙者儀は」

と、正則は大声でいった。

「いまさら治部少（三成）めに味方する筋目はいっさいござらん。なるほど大坂に妻子はいる。あれはべつに治部少に渡した人質ではない。それゆえ、それを治部少がために串刺しされようとも、男の不名誉には相成らぬ。さればそれがしは内府にお味方つかまつり、御先手になるつもりでござる」

声は、雷鳴のように諸将の胸にひびき、われもわれもと正則とおなじことを叫び、議場は一時にさわがしくなった。

つづいて黒田長政がすすみ出、

「いま左衛門大夫（正則）が申したごとく、拙者も上方に味方する存念いっさいなし。御当家（徳川家）と興亡をともにする覚悟でござる」



とこれまた大声でさけび、議場のふいん気はこの正則、長政のふたりの発言で一つ方向に導かれた観があった。

（われ、遅れたり）

と、伊右衛門はびっしょり汗をかき、気を落した。が、同時にみずからなぐさめもした。なにしろこの一座の従軍諸将のなかで、福島正則がもっとも身上が大きい。黒田長政はこれについでいる。伊右衛門がごとき小身大名が皮切りをしたところで、諸将がわっとつき従うかどうか疑問であった。

（まあよい）

じっと眼をすえてすわっている。

（いずれ、この議場に一石投じ波紋をおこすこともあろう）

「おのおの、いかがでござる」

山岡道阿弥が中腰になり、一座を見まわして念を押した。

「ただいまの左衛門大夫どの、または甲斐守（黒田長政）どののお言葉、いかがであろう。ご同腹でござるか。それともご異存ござるまいな」

「異存ござらぬ」

伊右衛門は、諸将とともにいった。

軍議はつづく。

諸将が徳川加担に決したとみると、家康の謀将本多正信、同忠勝がすすみ出て、
「さればおのおのがたに、おたずね申す」
といった。
「軍略のことでござる。いま、東に上杉、西に石田と、前後に敵をひかえております。いずれから討つべきや、おたずね申す」
「知れたこと」
福島正則が吐きすてるようにいった。
「上方から討つのじゃ。上方は大軍なれどもまだ支度は整うておらぬ。東の上杉にはおさえの人数を残し、上方の石田を討つのが当然の軍略でござる」
諸将、これに和した。伊右衛門の声も、むろんその中にある。
家康はすでにいない。
この老人は、軍議がはじまるときにちょっと顔を出し、あいさつがおわると、
「よろしきように」
といって中座してしまったのである。
家康がいないため、両本多は、
「されば上様にうかがって参りまするゆえ、しばしお待ちを」
といってひっこんだ。
ほどなく出てきた。家康もにこにこして出てきて、



「おのおのの馳走、ありがたくお受け申す」
と、わずかに頭をさげた。馳走とは、徳川加担の一件である。
「さて先刻のことでござるが」
と、本多忠勝がいった。
「上様にうかがいましたるところ、先鋒は福島左衛門大夫（正則）どの、池田三左衛門（輝政）どの、承りまするように」
はっ、と福島、池田が拝礼し、それぞれ御礼を申しのべた。
「それで」
と、本多忠勝はつづけた。
「御両方を先鋒とし、おのおの尾張までのぼり、清洲城に入って上様の御出馬をお待ち申しあげるように」
「平八郎」
と、家康は上座から本多忠勝を制し、以下は自分が言おう、といった。
家康はいう。
「拙者は江戸にある」
「江戸には会津（上杉景勝）への手くばりをし、その上で出かける。おのおのには、井伊直政、本多忠勝を軍目付として付ける。秀忠も」
と、長男の名を言い、

「西上せしめるつもりであるが、これも景勝への手当の都合上、多少遅れる」

といったのは、諸将の向背をなお家康は疑っているからであろう。先発させて敵と遭遇させ、そのあとで自分が出むくというのである。一つには本心さだかならぬ諸将とともに軍旅をすごすのは、身の危険であるということもあった。

その家康の言葉裏の気持を諸将のほとんどは気づかなかったが、伊右衛門は苦労人だけにありありとわかった。わかったとたん、

「あいや」

とハカマをとって進み出てしまっていた。

伊右衛門は夢中だった。いつのまにか家康の前に出ていた。

そばに堀尾忠氏がいる。

伊右衛門は、はっと気づき、

(おれは言うぞ)

というように微笑し、会釈した。

忠氏も微笑し、会釈をかえした。しかし伊右衛門がなにを言いだすのかは予測しなかった。

「申しあげまする」

「おお、山内対馬守どのか」

と、家康は大きく目をひらいた。



「それがしにも」

伊右衛門はいった。

「先陣をおゆるしくださるように」

「これはこれは」

と、横あいから本多正信は苦笑まじりに手をあげた。わずか六万石の大名の動員能力は知れたものである。その程度の小勢では先陣という大役はつとまらない。

「弥八郎、待ちやれ」

と、家康が正信を通称でよんで、その口出しをたしなめた。

「対馬守どのは信長公のころから戦陣に立ち、物に老いたひとである。かくべつなご思案もあろうゆえ、しずかにお聞きせよ」

家康は正信に言いおわったあと伊右衛門のほうをむき、

「お人数をことごとく野戦にお連れなさるとすれば、あとの城はどうなさる。空き城になさるのか」

「それは」

伊右衛門は息を吸い、

「徳川殿のお旗本衆におあずけ申す。たったいまお空け申すゆえ、どなたか人をおきめくださりませぬか」

「ほう」

家康は目のさめる顔をした。古来、自分の城を他家にあずけて出陣するなどということは、あったためしがない。

「対馬守どの、もう一度おきかせくだされ」

「掛川の城、知行地いっさいをおあずけ申すということでござる。城は多年たくわえました兵糧もとぼしくはござりませぬ。これも存分におつかいくださりますように。——さらには」

と、伊右衛門は言いかさねた。

「城の内外に住んでおります家来どもの妻子のことでござる。これは三河吉田の池田輝政どのがご大身でありまするゆえ、その城下へ仮住いさせとうござる」

これには家康もおどろいた。城だけでなく侍屋敷から足軽の長屋にいたるまでことごとく空家にするというのである。要するに掛川城と六万石の領地を自分にくれるということであった。

家康は諸将の空気に不安を感じていた。福島正則の発言にひきずられて、みな「徳川殿のお味方につく」とはいったが、おそらく、多くはこの場だけのことで本心はどうかわからない。

ところがこの男は、味方につく以上徹頭徹尾味方につく、城、知行まですててはだかになる、というのである。万一味方が敗北すれば伊右衛門は城も領地もなくなる。もとの素浪人にもどるのである。賭けでいえば、もちがねのすべてを張ったわけであった。

当然、家康は利害をこえて感動した。

この伊右衛門の発言の効果はすぐあらわれ、東海道すじに城をもつ諸大名は、われもわれもと城あけ渡しを申し出、伊右衛門のひとことの発言で、家康は百万石ちかい領地と五つの城を一瞬のまにおさめることができた。



あとで家康は本多正信とふたりきりになったとき、

「合戦は勝ったも同然じゃな」

といった。

正信はさほどに伊右衛門の一言の効果を重く評価しなかったが、家康はあの一言で歴史はかわった、という意味のことを言い、

「おそらく古来、これほどの功名はないだろう」

といった。

当の伊右衛門は馬上、小山の廃城をあとにしながら、ひどく気落ちしたような顔でゆられていた。

「どうなされました」

と野野村太郎右衛門九郎がきくと、伊右衛門はくびをふって、合戦を二度ばかりやったように疲れたわ、といった。

伊右衛門の宿陣の諸川までの道は、街道というようなものではない。村道、あぜ道、雑木林の下道などをひろってゆく。

横倉というところで、橋がある。そこまできたとき、むこうたもとの雑木林のなかで休息している小部隊があった。

馬ジルシをみると、堀尾信濃守忠氏の人数である。

伊右衛門は橋を渡りおわってから、

「あ、これは」

と馬から降りた。

この男らしいいんぎんな態度で若い忠氏のそばまでゆき、

「お疲れでありましょう」

とあいさつした。堀尾忠氏もあたまをさげ、

「貴殿こそおつかれでありましたろう」といった。

軍議で自分の発案を盗用した、などという皮肉をこめて言っているけぶりはまったくなかった。

伊右衛門の同僚だったこの若者の父の堀尾茂助吉晴ならば利(き)かん気の豪傑だけに、

——伊右衛門、盗み首したな。いやさ、戦場での盗み首とおなじではないか。

と激怒したであろう。あるいは腹立ちまぎれにそれを吹聴(ふいちょう)してまわるかもしれない。

ところが、二代目からは貴族である。忠氏は大名の子として育った。それだけに創業の父のような野卑さがなく、すべてが大らかにできているのであろう。

帰路、馬をならべた。

忠氏はさわやかに笑いながら、

「きょうは貴殿には平素に似気なく、大そうな大振れ舞でありましたな」

といった。大振れ舞とは、ふたつの意味をこめている。一つは、平素の律義に似ずぬけぬけと



自分の発議を盗んだという意味。いまひとつは、平素の無口にも似ず大口をたたいた、という意味である。

「まったく」

と忠氏はさらに笑いながら、

「あまりの御様子の必死さに、それがしは言うべき言葉もなくだまっておりました」

といった。

伊右衛門、やや赤面し、口をすぼめ、

「それがしはかような智恵無しでござる」

といった。そのあと正直に、

「諸川出発のときに貴殿の御宿陣に立ちよりおさそい申したのも、聞こえた智恵者ゆえなにかよきお智恵をいただけぬものかと思ったからでありました。きょうの発議も」

とまでいったとき、伊右衛門の馬のすすみ行く手に馬糞ころがしが道を横ぎっているのをみた。小さな昆虫である。伊右衛門はそれを踏むまいとして無意識に手づなをさばきながら、

「きょうの発議も、貴殿のお口真似をそのまま口うつしにて申したまででござる。元来それがしは、善いと思えばそのまま用いるのがくせでござって」

「なるほど、なるほど」

忠氏は他意なく笑った。

この一件、後世徳川時代の史家は山内家をはばかって公式に意見をのべることをはばかったよ

うだが、六代将軍家宣(いえのぶ)の侍臣で徳川期を通じての大学者だった新井白石はその著「藩翰譜(はんかんぷ)」で、

「これを古き人の評して」

と、古人のことばにことよせてこう批評している。

「堀尾大いに笑ひしかば、山内も同じく笑ひて帰りしといふ。これを古き人の評して、我が及ばぬ所をみづから知る事まづ難し。よき人見知る事、もつとも難し。善き人の言を能く用ゐる事、次に難し。この三つを合はせしは大智の流なり。一豊は誠にただ人ならずと、いひしなり」

白石はほめているようでもあり皮肉っているようでもあり、複雑なにおいの文章をかいている。



## 大戦

諸軍は七月二十六日をもって小山(おやま)の宿陣をひきはらい、上方(かみがた)にむかって行軍を開始した。おりから雨がふり、それが来る日も来る日もやまず、道はぬかるみ、人馬は足をとられ、さんたんたる行軍になった。

その後数日晴れたが、大磯のあたりから豪雨がふり、ヒョウさえ降って馬をおどろかせた。

(はて難儀なことになったわい)

と戦さなれた伊右衛門もこれほどの難行軍を経験するのははじめてだった。

士気にかかわりはせぬか、というのが伊右衛門の心配だった。

(幸先がわるい。このたびの大戦さ、お味方の負けではないか)

という暗い予感が全軍にただよっているようでもある。

伊右衛門の心配はむりもなかった。

余談だが、「平尾氏劄記(きつき)」という当時の武士のふるい手記にも、

「このたびの合戦で徳川家はおそらく滅亡するであろうというわさがしもじものあいだでささやかれていた。自分の主人にも、どうか大坂へおつきあそばすようにとつぶやく者が多かった。下級の者の大半は大坂方の心持であった」
とある。
それにしても困難な行軍だった。諸隊がせまい東海道をひしめきあうように進んでゆくのである。
街道が人馬であふれているために宿にありつける隊はよほど運がいいといっていい。伊右衛門の隊も、ほとんど野宿で夜をあかした。その上に雨である。
箱根を越えるときも、一足二足歩いてはとまるというかっこうだった。道がぬかるんでいる上に、前がつかえているからであった。
伊右衛門は小山出発のときから野野村太郎右衛門九郎をよび、
「ミノを集められるだけ集めよ。いかにコウジキ(高値)を言いかけられようともかまわずにあつめよ」
と命じてその手くばりはさせてあったが、それでも人数の半分もあつまらなかった。そのためミノが行きわたらぬ者には油紙を着せた。
「体をぬらすな」
と、毎日のように伊右衛門はやかましくいった。
「合戦の前に疲れるのは愚ぞ」



ともいい、
「風邪(かぜ)をひくな、腹を冷やすな」
ともいった。雨とぬかるみと野宿と街道の混雑のために将士が無用につかれるのをおそれた。疲れれば士気が落ちる。士気がおちれば悲観的なうわさを信じるようになる。それをふせぐには、体を雨でぬらさぬことが第一だということを、この歴戦の男はよく知っていた。
大井川では河原で野宿をした。
その翌日、いよいよ居城の掛川城下に入ると、伊右衛門は、
「城にも屋敷にも入るな」
と命じ、全軍を城下の寺、町屋などに宿泊させた。将士のあいだには目の前に自分の屋敷を見ていながら足を踏み入れられぬことに不満をもつ者もあったが、
「わしにはすでに城も屋敷もない。それをあらたにもつには、このたびの合戦で死にものぐるいではたらくよりない」
といった。
一時間ばかり遅れて、この掛川城をうけとる松平康重の部隊が到着した。
伊右衛門は城を渡すための事務的な人数をのこしたまま、戦場へむかって出発した。
もはや、城がない。
この男はこの男なりに、この決戦に生涯の大ばくちをうったことになる。

行軍の途次、

――味方の鳥居元忠がこもる伏見城が落ちた。

という確報が入った。くわしいことはわからなかったが、このために士卒が動揺した。

伏見城は、秀吉が天下の金と人力を傾けて造営した名城である。それが信じられないほどのもろさで西軍の攻撃の前に落ちた。

「おどろくことはない」

と、伊右衛門は側近にいった。落ちるのが当然の城である、といった。

「城兵は六十二歳の鳥居彦右衛門（元忠）どのをかしらに四、五百人である。西軍数万の大軍にかなおうはずがない。あれはもともと、開戦ともなれば落ちる、という捨て城であった」

ともいった。

尾張に入ると、伏見落城の一件についてくわしいことがわかってきた。

敵は四万である。七月十九日から包囲にかかり、ざっと十日間昼夜をわかたず攻めたてた。三十日の夜になって松ノ丸が燃えはじめた。松ノ丸にこもっていた甲賀者五十人が敵に内通し、火をはなったのである。

松ノ丸がまっさきに落ち、つづいて名護屋丸の守将松平近正は石垣をのりこえて乱入する敵と槍でわたりあって討死し、三ノ丸の松平家忠は八十五人の守兵とともに討死し、さらに西ノ丸も陥落。

大鼓丸は、守将佐野綱正みずから鉄砲をとって射撃したが、その銃尾が破裂して死に、主将鳥



居元忠もほどなく城内で討死した。

火は四方から燃えあがったが、さすがに天下の巨城だけに焼け落ちるのに十二時間もかかった、という話も伝わってきた。

（惜しいことだ）と伊右衛門は、伏見ですごした歳月をあれこれと思い出した。

伊右衛門は二千五百の士卒をひきいて尾張清洲の城下に入った。

ここは東軍の福島正則二十四万石の居城で、家康はこの清洲城を攻撃準備地に指定し、東軍諸将はことごとくこれに集まるように命じていた。

兵は城下の町屋に宿泊させ、伊右衛門は城内に入り、あてがわれた一郭を臨時の陣屋とした。

諸将はぞくぞくとあつまってきた。

八月十日にはほとんどの部隊が清洲にあつまった。

が、徳川軍の主力だけは来ない。

家康も来ないのである。家康は小山を出発するとき、諸将に、

「八月十四日までに清洲城にご参集ありたい。当方は準備できしだい江戸を発つ」

と公式に言いわたした。

その家康がまだ江戸にあり、腰をあげる気配さえなかった。

清洲に集結した諸将からは毎日のように江戸へ使者が走ってさいそくするのだが、家康は動こうともしない。

そのうち、西軍の総指揮者石田三成は、自家の兵六千七百をひきいて尾張のとなり美濃の垂井（たるい）

にあらわれ、清洲の諸将をおどろかせた。

　三成はそのまま大垣城に入り、ここを前線指揮所とした。

　清洲の諸将は、

「それでも内府は来ぬのか」

と、ふんがいするよりもむしろ不安になってきた。士卒たちのあいだには、

「あるいは徳川殿は逃げを打たれたのではないか」

といううわさまで流れるしまつだった。

　伊右衛門らは何度も軍議をかさねた。が、総大将が居なくては軍議らしい軍議もできず、いつも結論として、

「いま一度江戸へ催促の使いを出そう」

ということだけであった。

　千代は、この戦乱のなかで、なお大坂にいた。

　東軍諸将の妻子のうち、領地が西国にある者は船の便があるため、ほとんど大坂から脱出し、海路をもって国もとに逃げかえっていた。加藤清正の妻、黒田長政の妻などはそうであった。しかし千代のばあいは逃げだすにしても行く場所がなかった。

　いよいよ西軍の伏見城攻撃がはじまったときも、

「あぶない」



と留守居役の市川山城はいった。

「このまま大坂にわたらせられてはなりませぬ。危のうござりまする」

「でも、どこへゆくのです」

　千代は、あきらめたような微笑をもらした。

「そうでしょう？　どこもゆくところがないではありませぬか」

「それについてはもう何度か申しあげました。奈良にそれがしの知るべの家がござる。それへでも」

「むだなことです」

　千代はいった。いったん世が乱れると人の心などはさだめがたい。よるべをたよっていっても、相手が変心せぬということは保証できぬことだ。密告されて突き出されるなどはいやだ、と、千代はいうのである。

「わたくしは、見栄坊ですもの」

　と、千代はいった。

「たとえ敵の手にかかるにしても、この屋敷でかかりたいと思います。そのほうがずっと姿がよいではありませぬか」

「うわさでは」

　と、市川山城がいった。

「家康殿のお側室がたは、大和路のいずれかにお忍びとのことでござりまするな」

このうわさは、乱後、事実だということがわかった。家康は、英勝院、養寿院、阿茶局（あちゃのつぼね）という三人の側室を大坂城西ノ丸に住まわせていたが、江戸へ去るとき、旗本の佐野肥後守綱正をよび、

――わしが江戸へ帰れば、そのすきにおそらく石田三成が大坂で旗をあげるだろう。そのときには英勝院ら三人を守護して落ちるように。

と言いのこした。

いよいよ三成が挙兵したとき、佐野肥後守は右の三人を保護して大坂から落ち、大和の旧知の家をたよってそこで潜伏した。

市川山城にすれば、家康の側室でさえ大坂から脱出している、千代ひとりがなにもここで居すわらなくてもよい、というのである。

「いいのです」

千代はかぶりをふった。

「ひとはひと、わたくしはわたくし」

市川山城は閉口し、そのあと同役の安東左兵衛をつかまえて、

「北ノ方さまは、存外、頑固にわたらせられる。どうにも大坂を動こうとなされぬ」

とこぼした。

「当然だろう」

安東左兵衛がいった。

「なりふりかまわず大坂を脱け出されようという方なら、われらも仕え甲斐がない。ああいう方だからこそ、われらも奉公の仕映（しば）えがあるというものだ」

「おぬしは脱出に反対か」

「反対だ」

安東左兵衛はうなずき、人間、見栄こそ大事である、もしここへ石田の軍勢がきて火をはなち矢を射込むとすればそれこそもっけのさいわい、よく切りふせぎ、火中で自害し、名を千年のちにとどめてやる、といった。

その左兵衛は、足がわるい。

戦場には行けないから、せめてそういう機会でもないかと待っているのだ。

千代はあとでその左兵衛のことばをきいて、ころげまわって笑った。

「わたくしも左兵衛とおなじです。足は丈夫ですけど、女ですから」

このころになると、大坂にいる東軍諸侯の留守家族の珍談、奇談が千代の耳にくわしく入るようになった。

遠州横須賀三万石を領している有馬豊氏の妻は、松平康直の妹で、この年の五月武蔵深谷から輿入れしてきたばかりであり、としははたちであった。

深谷殿、という。家康にはメイにあたっている。

それだけに大坂方ではこの深谷殿をしつこく人質にしようとした。

有馬家では、深谷殿のために、吉田掃部（かもん）、梶原清大夫、坪地和泉、古川新八、内藤半右衛門の

五人の上士を大坂屋敷にとどめていたが、かれらはなんとしても奥方を無事に落そうとし、智恵をしぼった。

ひとりが、

「かようなことになると、われら武士の智恵ではどうにもならぬ。まず三大夫に相談すればどうであろう」

三大夫とは、姓を辻といい、淡路の岩屋の回船業者で、年来有馬家に出入りしている。さっそく三大夫がよばれ、秘事をうちあけられたところ、

「たやすいことでござりまする」

といった。

「それがしさっそく淡路へ帰り、小船を一ソウ作りまする」

「その小船とは？」

「目なし船（船腹に窓のない船）でございます。その船底を二重にして上に水を入れ、魚をうんと積みましょう。それには魚屋のたすけが要ります。お屋敷のお出入りの魚屋にて心利いたる者がおりませぬか」

「おる。甚大夫がよかろう」

ということで甚大夫がよばれ、その秘事をうちあけられた。

「よろしうございます。手前どもの魚ぶねということにいたしましょう」

ということになり、準備をすすめることになった。



家臣たちはこの計画を深谷殿に打ちあけると、意外にもこの若い奥方は駄々をこねた。

「魚ぶねの底にもぐるなどはいやじゃ」

といった。

「いや、それもほんのしばらくのご辛抱でござりまする」

「大坂から熊野灘をまわって遠州横須賀まで帰るのであろうが」

「左様でござりまする」

「途中、シケもあろう、港で風待ちすることもあろう。その風待ちのあいだに探索されればいかがする」

「しかし」

「わたくしはいやです」

と、あとはなんとなだめようとも深谷殿はかぶりをふるばかりで動かない。

ついに計画はとりやめになり、有馬家では大坂屋敷の門をとざし、城方から人数が来ようと使者が来ようと、ついに明けもせねば応接もせずにこんにちまできている。

千代はこのはなしをきき、深谷殿の覚悟をたたえる歌一首をよみ、それを矢に結びつけ、市川山城をよんで、

「有馬家まで三丁はありましょうな。この矢文を弓で射とおせますか」

といった。市川山城は、されば手前、夜陰ひそかに路上を走り有馬家の塀ぎわまで接近して射込んで参りましょう、といった。

千代は、

（すこし危険だが、そうさせよう）

とおもった。この矢文は千代のささやかな作戦だった。たがいに連繋をとりあっていざというときに共に火中に入って自刃する覚悟をたしかめあっておけば、自然そのことが城方にきこえ、容易に手をくだすまいと思ったのである。

そんなことがあって数日たったある朝、ひょっこり六平太が訪ねてきた。

ちかごろは、六平太は城下の伏見町筋でささやかな唐物問屋をいとなみ、商家の旦那といったかっこうになっている。

「もうすっかり板につきましたね」

と、千代は感心してしまった。ちょっとした表情や身ごなしのはしばしにいたるまで、りっぱなあきんどなのである。

「板についたどころではございませぬ。もうこのさき、忍び奉公をやめてかんばんどおりの伏見屋治兵衛というあきんどですごしてゆきたい、と存じております。これも、としでございますかな」

「もう、忍びはいやですか」

「左様」

六平太は、にがっぽく笑って、



「われら忍びと申せば世の舞台裏を読みとるのがいわば稼業でございましたが、世の中もこうややこしくなりますと、なまなかな読みでは追っつかなくなりましてな」

「なにか、あったのですか」

「左様」

六平太は、口をつぐんだ。

もともとこの男は毛利家から扶持をもらい京大坂の情勢を広島へおくるのがおもなしごとだった。千代のもとに出入りして彼女から読みとった情報もずいぶんと広島へ送ったはずであった。

かれは、北政所系の武将が家康につくということを去年ごろから見ぬき、もし乱がおこれば家康が勝つという想定のもとにさまざまな情報を送った。

むろん広島の毛利家が六平太の情報だけで方針をきめているわけではない。大坂の毛利屋敷からの情報もあれば、安国寺恵瓊からの情報もある。この恵瓊という男は僧服の大名で豊臣家の家政や諸侯の動向に通じているうえに、もともと安芸安国寺の住職で、かつては毛利家のいわば頼まれ外交官として活躍したことがある。そんな立場や因縁のために、毛利家では安国寺恵瓊の情報をひどく重んじた。恵瓊は西軍つまり奉行方の男である。自然、毛利家では、

「西軍が勝つ」

とみた。東軍が勝つ、とみる六平太の情報は無視され、毛利輝元は一万六千の大軍をひきいて広島を発ち、七月十七日に大坂に入りただちに大坂城西ノ丸に入り、西軍の盟主の位置についた。

（おもしろくない）

と六平太がおもったのはむりもなかった。
ところが、年若で凡庸な輝元の後見役として分家の出雲富田（とだ）十一万石の領主吉川（きっかわ）広家が兵三千をひきいて大坂に入るや、家康に対して内応を策しはじめた、と六平太はいうのである。
これには千代もおどろき、
「大坂方の盟主であるはずの毛利家みずからが、徳川殿に内応されるというのですか」
まさか、とおもった。総大将みずから敵に内応するというはなしを、古今きいたことがない。
「まだたしかな話ではございませぬ。毛利本家そのものが内応する意思がなくとも、分家の吉川広家さまがそのように策動なさるとなれば、結果は毛利家のすべてが寝返るのとおなじことになりましょう」
「信じられませぬ」
「左様、世の表裏を見てきたそれがしでもこれだけは信じられませなんだ。さればこれ以上、このような稼業をつづけておれば身をあやまるもとと思い、御用を辞してあきんどになりかわったわけでございます」
「…………」
千代は、世の相の奇怪さにため息が出る思いであった。
屋敷に人の出入りがない。門扉をとざしたまま、籠城同然にこもっている状態だったから、天下がどう動いているのか、



合戦がどこにあるのか、どちらが勝ったのか、負けたのか、千代にはまったくわからなかった。
(不安なものだ)
と、千代はあきれる思いで自分をながめた。気の弱い小動物のようなおびえが、身のうちでふるえている。
「ちょうど、あれですね」
と、市川山城にいった。
「闇夜に嵐にあっているようですね。船の胴の間に押しこめられて、そのうえ柱にでもしばられているような感じです。船がきしんだり、ゆれたり、嵐の音や波の音だけはきこえたりするけれど、船がどこにむかっているのか、風がどの方向から吹いているのか、船は沈むのか沈まないのか、さっぱりわかりません」
「それがしも」
と、この弓の達者な老武士はいった。
「ずいぶん数多くの危難に遭って参りましたが、このように、自分の運命（さだめ）を判断する材料がなにもないということほど、不安なものはござりませぬな」
「山城はうまいことをいう」
千代は笑って、
「いったいどうなのでしょう、合戦がはじまっているのですか」
「わかりませぬ」

市川山城も思案首を投げるばかりだった。

慶長五年七月十九日から十三日間にわたって戦われた伏見城攻防戦についてもそうであった。なにがどこで行なわれているのか、はっきりしたことはわからなかった。

十八日の早暁に大坂の街路におびただしい軍勢が動き、それがどうやら北にむかっている様子なのを、屋根にのぼってみていた家臣のひとりが報じた。

「きっと伏見にむかうのでしょう」

と、千代はあてずっぽうをいった。なぜなら大坂から西軍が押し出すばあい、最初の敵は九里はなれた伏見城であるはずだった。

その日からかぞえて十三日目の七月三十日の深夜、千代はふと屋敷のうちのさわぎに目をさまし、侍女をやってしらべさせた。

すぐ侍女がかけもどってきて、

「東北の空が真っ赤でございます」

といった。千代は、

(さては伏見の落城か)

とおもい、すぐに庭へ出、ハシゴをもってこさせて一あしかけた。侍女たちがおどろき、奥方さま、あぶのうございます、と袖にとりすがって制止したが、千代は、

「若いときから、高いところにのぼるのが大好きです」

と笑い声をのこしてするするとのぼり、さらに大屋根を這い、器用に立ちあがった。



なるほど、東北の空が真っ赤に焼けている。

(陥ちた。——)

と、千代はおもった。家康の部将鳥居元忠が小勢でまもっているということはきいていたが、元忠は有名な硬骨老人だったためおそらく落城とともに討死し、あの火のなかで屍を焼かれていることであろう。

下から侍女たちが、

「奥方さまぁーっ」

と声をそろえて呼ばわっている。あぶないから早くおりてこいというのであろう。

千代はおかしくなり、

「だいじょうぶですとも。なんなら、ここでさかだちをして見せて進ぜましょうか」

といった。

侍女たちも武士どもも、あっと声をのんだのは、千代の声がおわるかおわらぬうちに、千代はくるりと回転し、両足をそろえて天にはねあげ、みごとにしゃちほこ立ちをしてみせたのである。

伏見の落城から十日ばかりたったあさ、唐物商伏見屋治兵衛になっている六平太がやってきた。

「六平太どの、よいところへきました。伏見のことはどのようになっています」

と千代がいうと、東軍の負けでしたな、と六平太は無表情にいった。

「大坂の町衆は大へんなよろこびようでございますよ」

なるほど大坂の町衆は地もとびいきでつい奉行方の応援をするのは人情であろう。徳川殿は滅亡じゃと狂喜しているという。もともとこの土地には家康という名はなじみがうすいのである。

「町衆が？」

千代はおもしろそうにいった。

「しかし六平太どの。伏見が落ちるのはもともと差し引き勘定のなかに入っていて、はじめから天引きされていたことでありますから大勢にはひびきませぬ」

「左様、大勢にはひびきませぬが、町衆というものはいくさのわからぬものでござりますからな。しかし」

といって、六平太は千代に感心した。町衆の話題を出すとちゃんと譬(たと)えばなしまで勘定事の用語を千代はつかっているのである。

「伏見の落城は、どの郭(くるわ)から崩れました」

と、千代はきいた。ながいあいだ伏見に住まっていたため、あの城が千代にはひどくなつかしい。

「松ノ丸でござる」

と六平太はいやな顔をした。

この松ノ丸の守将は近江甲賀の地侍の一巨頭ではやくから家康につかえて一万石を給せられ近江野洲(やす)郡に城をつくり、表むきは、

「鷹野しらべ」



という仕事を命ぜられていた。鷹野（鷹狩り）のすきな家康のために、近江の山野をしらべて野鳥の多い場所をみつけておくのである。が、その程度のしごとに一万石は要らざることで、内実は、近江に散在している石田三成をはじめその与党の諸侯の動きや実情をさぐるためであった。

六平太が近江甲賀出身であるように、この土地の者は探偵の術に長じている。

その深尾清十郎が、伏見籠城とともに松ノ丸をあずかったのである。深尾は入城とともに自分の兵力の不足をおぎなうため故郷の甲賀郷の郷士団に援助をたのみ、たちまち五十余人の加勢をえた。武士五十余人だからその家来の足軽以下をふくめると百人以上の甲賀者が参加したことになる。

これが、寝返ったのである。

「甲賀者のわるいくせでござるな」

と、六平太は苦笑した。ふつうの武士のように男を立ててとおすとか、忠義をつらぬくとかという観念にとぼしかった。

はじめ、西軍の将長束正家がおなじ甲賀者をつかい、松ノ丸へ密書を射込み、

「城に火を放って寝返りをせよ。さもなくば甲賀においてあるそこもとらの妻子をみなごろしにする。もし寝返りするならば重く賞しよう」

と申し送った。甲賀郷士のうち山口宗助、堀十内という者がおどろき、密書をなかまにみせ、ひそかに内応することに決し、七月三十日の深夜に放火したのだという。松ノ丸が燃えあがるとともに、

「裏切り者が出た」

という声が籠城軍の持場々々につたわり城内は大混乱し、この火災と混乱につけ入って西軍が乱戦ののち城内に乗りこみ、ついに落城するはめになった。

「六平太どののなかまですね」

と千代はいい、おかしそうに笑った。考えてみるとこの六平太という甲賀者も、どちらについているのかわからないところがあった。もっとも千代はそれはそれなりに、六平太という男をおもしろがっていままでつきあってきたのだが。

伏見が落ちても、伊右衛門ら、下野の小山から軍を返してやってきた東軍諸将は、なお清洲城に滞陣している。

家康が、江戸を発とうとしないのである。

「古来、大将のおらぬ合戦などきいたことがない」

と、諸将筆頭格の福島正則などは毎日陣中で酒をのんで不平をならべている。

清洲というのは、いまの名古屋市の北方にあたる。そのさらに北に美濃ざかいの木曾川がながれ、この川のむこう美濃一帯はほとんど西軍の陣地といっていい。

西軍の織田秀信の岐阜城、同石川貞清の犬山城、同杉浦重勝と毛利掃部がまもる竹ケ鼻城、そしてそれらをむすぶ大本営として三成の旗のひるがえっている大垣城がある。

「内府（家康）は」



と福島正則は、家康がさしむけている徳川家の軍監の本多忠勝、井伊直政に毎日のようにかみついた。

「われわれに阿呆見物のように口をあけて敵の布陣を毎日見物していよと申されるおつもりか」

さらに福島正則は、泥酔のあげく、本多、井伊の両人をつかまえ、碁の譬えばなしを出して、

「内府は、われらを、つまり劫を立て替えにされるおつもりか」

とまで極言した。この場合、福島ら豊臣家の諸将を西軍の餌食になさるおつもりか、というほどの意味である。

伊右衛門はこういう論議にはいっさい加わらず、軍議のときはいつも後ろの柱にもたれてねむるがごとく沈思するがごとく、ひとこともしゃべらなかった。べつに強いてそうしているのではなく、いわばこれは性分だった。

しかし、

（なぜ、家康殿は江戸を発たれぬのか）

という疑問はある。いや、むしろあせりといっていい。ひょっとすると家康の口車に乗って自分ら豊臣家諸将はだまされたのではないか。

（なにしろあの仁の人柄は慎重できこえている。おそらくわれわれの本心を疑い、江戸で様子をみているのではないか）

ともおもったりした。

八月十九日になった。

そのとき江戸から、
「江戸内大臣の御使者である」
という無名の旗本が陣中にあらわれた。村越茂助といった。
(村越茂助?)
と、諸将はふしぎにおもった。きけばせいぜい五、六百石程度の武士だという。
家康の正使として西上するにはすくなくとも万石以上の大名格の者であるべきだが、なぜこれほどの小身者をよこしたのであろう。
「村越茂助?　きいたこともないな」
と、福島正則などは露骨にいった。
しかも評判をきくと、この村越茂助は戦場ではなかなかの勇者だそうだが、融通のきかない頑固者で、とても千里の使者などがつとまる男ではない。
さらに、口べたときているのである。文字もろくに読めず、三河碧海郡(おおみのこおり)三木村の早口な土語をしゃべり、他国者にはちょっと通じにくいという人物であった。
(かわった使者がきたものだ)
と伊右衛門もあきれる思いだったが、それら豊臣家諸将よりもこの使者の来着にあわてたのは、家康から派遣されている軍監の本多忠勝、井伊直政のふたりだった。ふたりはむろんおなじ家中だから村越茂助の人柄を知っている。
軍議にさきだって村越を別室によび、豊臣家諸将の複雑な人心と動静を説明し、



「おぬしの朴強(ぼっきょう)はわかっているが、露骨に直言してうかつなことをいうと、かれらは敵にまわるかもしれぬぞ。いったい上様からどういうお言葉をいただいてきたのだ」
「それは軍議の席上で申しまする」
と、この男は、評判どおりの頑固者で味方にも使命のむきをしゃべろうとしない。

本多、井伊の両軍監は、なおもこの村越茂助にしつこくたずねた。
「な、上様がどのように申されたか、たのむから教えてくれ。実をいうと、いま清洲城に集結している豊臣家の諸将のあいだには妙な流言さえながれている」
「ははあ」
村越は、興のない顔をした。うまれつき、そのような政治むきの感覚があたまから欠如している男なのである。
「ははあ、ではない。茂助、がんこもいいかげんにしろ、お家の存亡の大事だぞ。いまはその瀬戸ぎわだ」
と、短気者の本多平八郎忠勝が声をころしてどなった。忠勝は家康譜代の旗本で官位は従五位中務大輔(なかつかさのたゆう)、上総の大多喜で十万石を食(は)んでいる。おなじ旗本でも五百石の茂助とはくらべものにならない。
「ならば申します」
と、茂助はかなしそうにいった。

要するに家康が江戸から動かないのは、諸将への疑念であった。福島正則ら豊臣家の諸将がいったんは「お味方申しあげる」と確約したものの、あるいは石田方に寝がえるのではないか、ということだった。
「シカとそう申されました」
「ふむ」
二人の軍監はうなずき、
「それで？」
「はい、それで、上様おおせられるには自分が出てゆく、ゆかぬの問題ではない。まず清洲に集結している諸将は川をわたって石田方と一戦せよ、それにて諸将の誠意がわかる、まず行動で示してもらうことだ、とそのように伝えよ、ということでございます」
と村越茂助がいったから、本多、井伊の両軍監は肝がひえるほどおどろいた。
「そ、それはいかん、茂助、そのようなことをあの連中の前で正直に伝えたら大変なことになるぞ。みな激怒して大さわぎになり、いっせいに川むこうの石田方に走るかもしれぬわ」
「ははあ」
と、茂助はけろりとしていた。
「左様なものでござりまするかな。それがしはただ上様より面々へ左様つたえよと申されたばかりで、それをそのままお伝え申すほかはござらぬ」
「待て待て」



と、両人はいった。
さらにしつこく茂助を説き、とうとう家康の言葉を曲げさせることになっとくさせた。
やがて村越茂助は諸将の前に出た。
「それがし、徳川家にて使番をつとめまする村越茂助と申す者、ただいまより役儀により言葉をあらためまする」
といってからふと、
（上様というのは智恵者にまします。その智恵者が申されること、おそらくまちがいはあるまい。いかに本多、井伊がお家で名だたる侍大将とはいえ、智恵は上様のほうが上じゃ。これはあの御両所に申しわけないが、やはりすっきりと御口上を申しのべるに越したことはあるまい）
と思いなおし、ずけりと家康の口上を口うつしに言った。
（あっ）
と、青くなったのは本多、井伊の両人であった。
（茂助、ぬかしたり。——）
手に汗をにぎるうち、一座のなかから福島正則が進み出、
「内府の申されること、もっともだ」
と意外なことをいった。案に相違して怒るどころか、
「気づかなんだ。動かぬわれわれがわるい。いでや今夜にも一戦してわが武勇を敵味方にみせてくれるわ」

この一言が、一座の空気をまとめた。家康は正則の性格を知りぬいていて、こういえばこう反応する、と見込んでいたのであろう。

いよいよ清洲の諸将は、作戦行動を開始することになり、最後の軍議をおこなった。

目の前の木曾川は水多く流れが早く、容易にわたれない。

「浅瀬は二つある」

と、清洲城主である福島正則がいった。

「上流の河田（こうだ）、下流の尾越がそれでござる。自然、総軍を二手に割らねばなるまい」

一同、賛同した。

ただ、上流の河田の渡河点は、めざす岐阜城へ近い。福島正則は、

「わしは先鋒ゆえ、この河田渡河点をとる」

と言い張ってきかず、おなじく先鋒を命ぜられている池田輝政とのあいだにあらそいがおこった。

が、本多、井伊の両軍監が割って入り、

「福島殿は当国のご領主じゃ、自然地理にもあかるく、船の便もある。ここは池田殿にゆずられよ」

となだめたため正則は服した。そのあと、部署がきまった。

尾越渡河軍



福島正則、細川忠興、加藤嘉明、黒田長政、藤堂高虎、京極高知（たかとも）、田中吉政、生駒一正（いこまかずまさ）、寺沢広高、蜂須賀豊雄、井伊直政、本多忠勝、

総数一万六千人。

河田渡河軍

池田輝政、浅野幸長、堀尾忠氏、有馬豊氏、一柳直盛、戸川達安、山内一豊、

総数一万八千人。

伊右衛門は、河田渡河のいわば近道のコースをとることになった。

ときに、八月二十二日の未明であった。諸将は無灯火で行進し、やがて川岸についた。

ここで川をわたる必要上、全軍が松明をつけたために、闇夜の河畔はたちまち数千の火でかざられた。

その火の群れが対岸の敵陣から望見できたため、ごうごうと銃撃してきた。

（おそいな）

と、中軍にいる伊右衛門はおもった。遠道をとった尾越渡河軍がまだ渡河点に到着していないらしく、合図のノロシがあがらないのである。

「尾越渡河軍がノロシをあげると同時に両軍ともどもに押しわたる」

ということが、軍議できめられている。先着したからといってすぐに押し渡るわけにはいかなかった。

が、先鋒大将の池田輝政は、気がはやっている。待てぬ、と思った。

「すでに対岸の敵は銃撃を開始したのだ。渡河すべきである」
と、自分の隊をいっせいに川に入れた。
諸隊、順次に渡ってゆく。
伊右衛門は水中に馬を入れ、
「カブトを浅く伏せよ。伏せすぎて天辺を撃ちぬかれるな。騎馬の者は川カミを渡れ、徒歩の者は川シモをゆけ」
などと絶えまなく下知した。
対岸の銃火はますますはげしくなり、伊右衛門の前後左右で、
ぴしっ、
ぴしっ、
と弾が落ち、そのつどするどくしぶきがあがり、たちまち撃ちぬかれて死ぬ者、負傷する者が続出し、その損害は対岸に近づくにつれて多くなった。
伊右衛門の前方を、かれの隊旗がゆく。
かれの将旗は、
「無」
一字をくろぐろと染めあげたもので、この戦闘で最初につかったものであった。
「ひるむな、ひるむとかえって撃たれるぞ」
と、かれはなによりも部下の損害を気づかった。



木曾川の流れのなかほどで夜がしらみ、伊右衛門は松明を河中に捨てしめ、一気に押し渡った。
対岸の野では、すでに先鋒の池田輝政と敵とがはげしく銃戦している。
それを見て伊右衛門の侍大将の野野村太郎右衛門九郎が馬をあおって近づき、
「殿、敵の左が手薄でござる。あれに突き入りましょうず」
「よくぞ気づいたり」
と伊右衛門は馬上でサイをふって指揮し、駈け足で迂回しつつまず銃隊を繰り出して射撃させ、ついで弓隊を出し、最後に騎馬、徒歩隊に、
「かかれえっ」
とはげしく下知した。
むろん伊右衛門の隊だけでなく、堀尾忠氏隊、有馬豊氏隊などがあらそってかかったため敵はどっと崩れた。
「追えっ」
と、伊右衛門は下知した。
敵は、岐阜城の織田秀信の野戦部隊で、人数は味方よりもはるかにすくなかった。算をみだして逃げ、城内に入りこんでしまった。
池田輝政以下追撃軍は岐阜城下の荒田の橋まで迫り、そこで兵を集結し、まだ日が高かったが、新加納、芋島、平島などの諸部落に宿営した。

伊右衛門は、芋島に宿営し、みずからは軍議のために新加納の寺にいる池田輝政のもとに行った。

尾越の渡河点をとった福島正則らの諸隊が、岐阜城商町口（あきないまちぐち）から入ってきたのは、翌日の朝六時すぎである。

正則は、池田輝政の違約に激怒し、

「わしがノロシをあげてのち両軍時を同じくして渡るというのが約束であったのに、三左衛門(池田輝政)めは抜け駈けをしおったか。もはや、敵は石田ではない。三左衛門じゃ」

と諸隊の筒口を池田輝政にむけさせたため、家康から派遣されている本多、井伊の両軍監はまたまたおどろき、その調停にかけまわらざるをえなかった。

「左衛門大夫(正則)の申し条にむりはござらぬ」

と、池田輝政にいったのは伊右衛門であった。かれは戦場のはなばなしさよりも軍議の調停のほうに才がたけていた。

「ことわる」

と、若い池田輝政がいった。

伊右衛門はそこは巧者である。

「それゆえ、この岐阜城攻めには、大手門攻めの花は福島正則にゆずり、われらはカラメ手門にまわりましょう。その旨、はやばやと福島の陣屋に使いをやって口上させなされ」

「あなたは内府のむこ殿ではござらぬか。この場合、大手門の功は福島にゆずられるのが御外戚の大度と申すものでござる」



「いや」

と、池田はなおもくびをふったが、伊右衛門は声をはげまし、

「あの福島が、かかるささいなことで石田方に走るようなことがあればわが軍は利をうしない、総くずれとなりまするぞ。それでもあなたは大手門を固執なさるか。つまりわが軍敗戦の因をつくりなさるか」

といつに似気なく大声でいったので輝政も閉口し、なるほどとも思って、

「対州殿、左様につかまつる」

と、使番を福島陣屋に走らせた。正則は、自分が大手門の攻め口をもつときいてさすがによろこび、

「されば言うことはない」

と鳴りやめ、さっそく大手門にかかる準備をはじめた。

伊右衛門らはカラメ手へまわり、かれの隊は浄土寺口から攻めることになった。

岐阜城というのは、金華山上にあり、そばに瑞竜寺山をしたがえ、山谷、断崖多く、山麓には長良川をめぐらす堅城で、かつては城作りの名人といわれた斎藤道三（どうさん）が鉄砲戦にたえられるように改造し、信長がさらにそれに手をくわえ、天下の名城のひとつにかぞえられている。

が、城方にさほどの戦意はない。

主将織田中納言秀信は、織田信長の嫡孫として豊臣家から特別の礼遇をうけていたが、まだ二十二歳の若者で、合戦というものに馴れない。

それに、譜代の家来木造具正、百々綱家のふたりはむしろ関東に味方することを秀信に主張してきた。しかし秀信は、石田方がもちだしている条件が、

「もしお味方に参ぜられるならば、美濃、尾張二国を進上し奉る」

というものであったため、押しきって西軍についた。そこへ東軍三万が押しよせてきたわけで、戦備もまだ十分でない。それに城兵は六千しかいなかった。

城下に入った東軍諸将はそれぞれの町口を破ったが、なかでも細川忠興は大手門におしよせ、苦もなく打ちやぶってしまった。

一方、浅野幸長も瑞竜寺砦をやぶってこれを占領し、つづいて堀尾隊、井伊隊が乱入した。

それら味方の猛攻のおかげで伊右衛門が担当した浄土寺口の城門は敵の守備兵がいちはやく逃げたため、これまたらくらくと破り、諸隊と合して山の尾根にのぼり、そこから本丸をめざして進撃した。

その本丸も、大手門から攻めのぼった池田輝政、福島正則の隊のために陥ち、伊右衛門が現場についたときは黒煙をあげて燃える天守閣を見あげるばかりで、まるで用がなかった。城将秀信は、城壁に笠を突き出して降伏した。

ついで、近隣の犬山城である。

これには美濃で十二万石の領地をもつ石川貞清を主将として、美濃の小領主の稲葉貞通、加藤



貞泰らがまもっているが、いずれももともと戦意がなく、加藤貞泰などはすでに使者を江戸に送って家康に味方する旨を通じているほどであった。

このため、東軍が包囲するや、加藤貞泰らは主将の石川貞清を除外して降伏の相談をし、

「さて、その仲介の労をとってもらうのにたれがよかろうか」

と、東軍諸将の性格をあれこれ論じ、結局は山内対馬守どのが律義でもあり、人情にも通じている、というので城から使者を伊右衛門の陣地に送った。

「なんと、わしを仲介に？」

と、伊右衛門は使者の口上をきいておどろき、かつよろこんだ。たのまれた以上は引きうけてやるのが世の道であろうと思い、使者を自陣に待たせ、

「なんとか労をとって進ぜる」

と、馬をとばして福島正則の陣屋にゆき、その旨をいうとさすが合戦好きの正則も、

「敵もよい人に目をつけたものよ。対州殿に口をきかれては押して城を攻めるというわけにも参らぬわ」

と、苦笑した。あとは井伊、本多の両軍監の了解もとりつけ、自陣にもどってきて、

「お願いの筋、かないました」

と、丁寧に言い、自分の家来をつけて城へもどしてやった。

城は、戦わずして落城した。

「なかなかに、対州どののお手柄じゃ」

と福島正則は大笑いしながらいったが、伊右衛門は皮肉られているような気がしてならなかった。べつだんなんの武功もなく、このようなことにだけ役立つ、という自分が、自分ながらに奇妙に思えたのである。

伊右衛門は、軍監の井伊直政から、貴殿はしばらく犬山城下にとどまって、降兵の始末をしてくださるように、と言いつけられた。

「それはこまります」

と、伊右衛門はろうばいして手をふった。諸隊が先をあらそって戦闘行軍しつつあるというのに、自分だけがなぜ犬山城にのこって降伏者のあと始末をせねばならぬのか。

「ここでとどまれというのは、それがしに武辺がない、といわれるのと同然ではありませぬか」

「いやいや」

と、井伊はいった。

「対州どののお人数はすくのうござる。小勢には小勢の味なお役目があるというもの」

「ばかな」

伊右衛門は珍しく色をなした。この合戦でもし功をなさなければ、生涯もはや運はめぐって来ないであろう。

「承服できぬ」

と、いった。すでに一城のぬしになっている。しかし千代との結婚の夜、



——一国一城のあるじになろう。

といった。伊右衛門はもはや残りの春秋の多くもない生涯であるが、この最後の世の変動を機会に一国のあるじになりおおせてみたいと思っていた。

(おれは太守、千代は太守夫人)

という、まるで子供っぽい夢ではあったが男の生涯など、思ってみればその子供っぽい夢がかれを駈けさせる原動力になっているのではあるまいか。

「なるほど、それがしは小身者にて人数も多くはござらぬ。しかし士卒は他家にまさるともおとり申さぬ。いや、わが家の士卒一騎一人にて、他家の十騎十人にあたり申そう」

「これはこれは」

井伊直政はひどく好意ある微笑をした。この伊右衛門がこれほどの大言壮語をするとは意外だったのである。

「対州どのも申されるものかな」

と声をあげて笑い、やがてむこうへ行ってしまった。

(はて、やはり申してみるものじゃ。意がかなったわ)

と思っているうちに、井伊はいま一人の軍監の本多忠勝をつれてきて、こんどは老練の忠勝をして説かしめた。

「対州殿、おぬしがそう申されるなら、拙者などはどう不平を申してよいか。拙者ははばかりながら徳川家では聞こえた者でござる。それがなんとこのたびは軍監のお役目じゃ。軍監なれば先

陣もかなわぬし、一番槍、一番乗りもかないませぬ。その拙者が辛抱しておる。拙者ともども、ここは辛抱してくださらぬか」

「……」

と、伊右衛門は沈黙している。

「たのむ、こうじゃ」

本多忠勝は、おがむ真似をし、さらにいった、――空き城になった犬山城にひとまずこもっていただく、上様が西上なされればそのときしかるべき旗本の将をして交替せしめよう、頼み奉る、と忠勝はいった。

そこまでいわれて伊右衛門は、我意を張りとおせる男ではなかった。またそういう性格だからこそ、本多、井伊も伊右衛門に目をつけたのであろう。

「やむをえぬ」

伊右衛門は力なくうなだれた。

(運は去った)

とおもった。やはり大身代をもち大部隊をもつ者は功をたてることも大きい、小身者はあくまでも小功に甘んじねばならぬものか、とおもい、なんとなく泣きたい思いであった。

「それではおねがい申す」

と、井伊、本多は伊右衛門の気のかわらぬうちに、と掻き消えてしまった。



伊右衛門が犬山城の守備隊長として時をすごしているうちに、同僚の諸将はつぎつぎと目のさめるような戦功をたてた。

合渡(こうど)という村がある。

墨俣川(すのまたがわ)のほとりにある村で、石田三成の前線指揮所のある大垣城にせまるには、ここを通らざるをえないところであった。

自然、渡河戦になった。

東軍でこの方面に出たのは、黒田長政、田中吉政、藤堂高虎の三部隊で、かれらは岐阜城の陥落が意外にはやかったために戦場に参着できず、

――されば直接大垣の本拠を衝(つ)くか。

とたがいに相談して一決し、合渡村付近でいっせいに墨俣川を渡河したのである。

西軍はこの岸辺にわずか一千の人数を張り出させていたにすぎなかった。

西軍にとって不幸なことには、予定されている宇喜多秀家一万の大軍が来着しておらず、たとえそれが来着しても、この時期においては決定的に人数不足で、この合渡付近にも千人の人数しかさけなかったのである。

そのため、いわば黒田、田中、藤堂らは功名のたてどくという結果になり、濃霧のなかで射撃戦、白兵戦をくりかえして一挙に西軍を潰走させてしまった。

藤堂高虎は急進して赤坂の宿場にいたり、そこで踏みとどまって布陣し、とりあえず江戸の家康に急使を出して合渡の快勝を告げた。

余談だが、岐阜落城につづくこの開戦早々の戦勝に家康はよほどよろこんだものか、この使者に黄金一枚をつかわした、ということがあとで評判になった。

（ばかな）

と歯がみする思いをしたのは、後方の犬山城にいる伊右衛門であった。

「彦作」

と侍大将の乾彦作にいった。

「敵はたかが千人かそこらだ。それを藤堂の二千五百、黒田の五千四百、田中の三千で打ちかかっている。勝つのが当然で、ことごとしく江戸へ急使を立てるなどは、功名泥棒にもひとしい」

居ならぶ家来どもは、いつにない伊右衛門の昂奮ぶりに驚き、たがいに顔をみあわせた。伊右衛門にすれば、かつて人のわる口などはいったことがないのである。

（よほど、あせっておられる）

と、たれの目にもそう映った。そのとおりで、山内隊は開戦以来、さほどの敵にも出あっていないのだ。

そのあと、乾彦作は福岡市右衛門、深尾湯右衛門らと申しあわせて伊右衛門の居間にゆき、

「殿、もはやかくなった以上はおあせりはご無用になされませ。古来、あせるいくさに運はつかぬと申しまする。待つうちによき運もめぐって参りましょう」

「理屈はわかっている」

と、伊右衛門はいった。



「が、わしは凡夫だ、わかっていても、あせる。わしは賢人でも名将でもなく、ただ律義なだけが身上でここまで生きてきた。その律義者が、自分の生涯の運をこの一戦にかけている。あせらずにおられるか」

「殿、しかし」

「言うな。考えてもみよ。いま東軍諸将でこの戦場に居る者は、福島にしろ田中にしろ黒田にしろ池田にしろすべてわしよりも年歴のあさい者ばかりで、わしは最古参になる。しかもかれらよりわしは身上がひくい。わしは半生、運がわるかった。いや、決して不運だとは思わぬ。不運だとは思わぬが、運にめぐまれていたとも思えない。いつもわしにめぐってくるは第一流の運ではなくて、二次の運ばかりだったような気がする。だからこそ、小山軍議以来わしはこの一戦でこそ天運を力ずくで掻き寄せてでも七彩の雲に乗ってみたかった。これを、あせらずにいられるか」

ところが、味方の諸軍が追撃戦をやめた、ということをきいて、伊右衛門は、

（しめた）

とおもった。天はまだわしを見捨てぬ、と大げさに思った。戦場で運を期待する心理というのは、やはり異常心理の一つといっていい。これ以上、他人のみが武功をたてるほうだいに立てる、という現状がつづくことは、自分の運がカンナに削られて減ってゆくというあせりと表裏をなしておなじ実感なのである。

「事情をきいて来るように」

と、伊右衛門は江田文四郎を使者に立て、前線の諸将へ事情をききにやらせた。
やがて文四郎が帰ってきて、諸将は中山道赤坂宿場を最前線として兵を停止せしめているという。
「なぜだ」
「藤堂殿が主唱あそばされて、まず緒戦で快勝したるにつき、これ以上は徳川殿のご来着を待ってのうえで、という理由だそうでござりまする」
(ばかにしている)
と、それはそれで思わざるをえない。それほどの作戦方針の決定に、伊右衛門はひとことの相談も受けていないのである。
「文四郎、わしは相談を受けておらぬぞ」
「殿」
と、文四郎はずけりといった。
「殿はおとなしすぎまするな。よいご気質でござるが、かような修羅場では人にうとんぜられ、われらまで損を致しまするわ」
「言うのう」
この露骨な不平に、主人の伊右衛門のほうがあきれた。もともと江田文四郎というのはそういう男で、この者は長浜時代に召しかかえた。
性勇猛で、戦場をわがものがおに駆けまわるかわりに、平素も直言してはばからない。



小田原の陣のとき、山中城攻めで首級二つを得た。ところが文四郎も右腕を斬り裂かれ、白い骨がみえている。
伊右衛門は見かねて、文四郎、さがって加療せよ、といったがこの男はきかない。
——武士の生涯でよき戦場というのは一度か二度でござる。この小田原攻めほどの大いくさを見すてて後方にさがれば生涯の悔いになりましょう。人間、事にあたってつねに悔いをつくらざることが、世渡り上手と申す。
といった。
その傷が数日して膿み、白膿が流れ、うじさえ湧くようになった。伊右衛門は、主命である、として後方の掛川宿までさがらせた。
ところがこの男は、三島の宿まで行ってひきかえし、また陣にくわわった。聞けば三島で塩をひとざる買い、それを傷口にすりこんでやってきたのだという。
(世にはすごい男もいるものだ)
と、伊右衛門はわが家来ながらあきれた。この文四郎はのちに千石取りになり、世が静まってから朋輩と大喧嘩してそれを斬り、切腹している。
「殿、いまから赤坂へお供申すゆえ、どなりこみなされ。福島殿などは口うるさき人ゆえ内府さえ遠慮なされ、なんとはなくよいお顔で世を渡っておられる。殿のようなご気象では、人のアト足のチリばかりかぶることに相成りまするぞ」
「おれはそちよりも年をとっている」

と、伊右衛門はいった。
「人はその性格によって最良の行き方をとるべきだ。福島殿はあれはあれでよし。しかしわしがおのれの気性にもないことをして宙に浮いたるがごとき言動はとりたくない」
「しかし殿、殿のご生涯にとってこのたびの大戦はまたとない機会でござりまするぞ。宙にも浮きなされ、舞いもしなされ」
「いや、よそう」
伊右衛門は、かぶりをふった。

家康はなお江戸にあった。
かれは江戸からさまざまの戦略や外交のさしずをし、必勝の確信を得るまで腰をあげようとしなかった。
まず、西軍の総大将の毛利輝元である。その石高、軍勢の多さは、徳川家につぐ。
その毛利家に対する特別工作を黒田長政に命じ、長政は毛利の分家吉川広家とひそかに意を通じ、ついに毛利家が表面はともかく内実は石田方に味方せぬ、という確約をとりつけた。
ついで九州で西軍の小西、島津らを相手に戦闘するはずの加藤清正に対し、
「戦勝のあかつきには、肥後と筑後をあたえる」
という旨の約束をして九州における奮戦を期待し、東北の会津上杉家よりする脅威に対しては仙台の伊達政宗、越後の堀直寄らに使者を送ってその牽制方を命じ、その間八月二十七日、岐阜



城陥落の報に接し、
——もはやよかろう。
とようやく腰をあげることに決した。
家康は九月一日、兵三万二千七百をひきいて江戸を発し、途中犬山城の降伏をきき、
「ほう、城番を山内対馬守がさせられておると？　律義者の損じゃな」
と、すぐ伊右衛門と交替させるために、自分の家来のなかから人選し、結局、下総岩富で一万石を食んでいる北条氏勝をえらび、急行させた。
家康が岐阜城に入ったのは、九月十三日の夕刻である。
その翌十四日のあさ、岐阜城の城門を出、長良川をこえた。
川には、橋がない。そのため、鵜飼船四、五十隻をかりあつめて船橋をつくり、その上を三万余の軍勢が通過した。
「内府がきた」
という報は、前線諸将を安堵させた。伊右衛門も正直なところ、ほっとした。
すでに二十日間も待っていたのである。
途中、
（あるいは？）
と心細くなる瞬間もあった。あるいは家康は西軍の強勢をみて意外におそれ、戦意をうしない、ついに戦場に来ないのではないか、とさえ思った。

十四日未明に岐阜を発した家康は中山道の旧道をとり、朝八時ごろ神戸に休憩し、ついで池尻村にいたり、ここで諸将の出迎えをうけた。

出迎えた諸将は、福島正則、細川忠興、加藤嘉明、黒田長政、藤堂高虎、京極高知、田中吉政、生駒一正、寺沢広高、蜂須賀豊雄、池田輝政、浅野幸長、堀尾忠氏、有馬豊氏、一柳直盛、戸川達安、山内一豊らである。

家康は機嫌よく諸将をねぎらい、伊右衛門には、

「犬山のあゆの味はいかがでござった」

と、この老人にはめずらしく軽口をいった。

そのまま家康は行軍をすすめ、この日の正午には、前線指揮所として予定されている赤坂の宿場に入った。

宿場は、広大な野のなかにあるが、その南に丘が一つある。

家康の来着前にあらかじめ諸将が軍議してこの丘をもって本陣とすることをきめ、土地の者にその丘の名をきくと、

——岡山でござります。

というので、岡山の本陣と通称することにし、丘の上に仮り殿舎を建て、丘の前に堀をうがち、柵をめぐらし、仮り城の体裁をとった。

家康はいよいよ上機嫌でその丘の上へのぼり、仮り殿舎に入り、かつその頂上に金扇の馬ジルシ、葵の紋の旗七本、白旗二十本を大垣の敵本営にむかって立てならべさせた。



大垣までは、わずか五十余丁である。

すでにその岡山本陣のまわりには諸将の陣営がつくられ、伊右衛門も桑畑のなかの仮り小屋にいる。

大垣城の本営にいる石田三成は、五十丁むこうの赤坂の岡山ににわかに家康の金扇の馬ジルシ、葵紋の旗、白旗などがおびただしく立ったのをみて、

「家康がきたか」

と、不審がった。

諸将は、まさか、と言い、三成の謀臣で高名な戦さ達者の島左近でさえ、

「そんなはずはない。家康は奥州会津で上杉氏と戦っているはずでござる。かようなところへにわかに来るはずがござらぬ」

といったが、なおも疑わしかったため、手練れの物見三人を放って偵察にやった。やがて帰ってきて、

「まぎれもなく徳川内府が来陣されております。その証拠に」

と、一人がいった。

「それがしは内府の持筒頭の渡辺半蔵の指物を見知っておりますが、その半蔵が参っております。持筒頭の半蔵がいるかぎりは、内府がすでに来陣しておるとみてさしつかえござりませぬ」

このうわさが西軍諸陣につたわり、ひどく動揺した。当時、日本最大の兵力と日本最古参の武

将としての経歴をもつ家康というのはそれほど畏怖すべき存在だった。

動揺せずに静まりかえっているのは石田三成の陣営だけだったといっていい。味方のこの動揺をみて島左近は、

「この動揺をふせぐには、一戦して勝利を得るしか仕方がありませんな」

といい、三成のゆるしを得、兵五百をつれて出発した。

東軍赤坂の陣の前方に、株瀬川（くいぜがわ）という小さな川がある。その上流の西方に、東軍の中村一栄、有馬豊氏、さらにその後方に伊右衛門の軍が宿営している。

左近はところどころに伏兵を置き、自分は主力をひきいて一挙に株瀬川をわたり、対岸の稲を刈りはじめた。

挑発である。

東軍の有馬、中村の両隊はこれに乗り、どっと攻めかかった。

島左近は退いては戦い、戦っては退いてたくみに伏兵の位置まで誘導し、ここで一挙に反撃して大いに東軍を破った。

この戦闘を、伊右衛門は現場からはるか後方に宿営していたため遅く気づき、

（ゆくべきか）

ととっさに思ったが、銃声の数をかぞえてみると意外に少ないことを知り、

「動くな」

と、隊を動かさなかった。すでに日没に近くなっている。小部隊の戦闘に無用に動いてその留



守に夜襲をかけられる、ということはよくあることだった。

野野村、福岡、乾らの家老は、

「行きましょう」

と、しつこくすすめた。開戦以来、ろくな戦場をうけもたされていない伊右衛門の隊としては、あせるのはむりもなかった。が、伊右衛門はあくまでも動ぜず、

「静まっておれ。この分ではやがて銃声もやむ。わしはお前たちよりも、数多くの戦場を知っている」

と断乎といった。

やがて伊右衛門の言葉どおりになった。しかも翌朝、自軍の有馬、中村両隊のさんざんの敗戦を知って家老たちは、

「行かなくてよろしうございましたな。駈けつけておれば不面目の敗けいくさにまきこまれていたはずでございます」

と、伊右衛門のさすが古豪というにふさわしい直覚力に敬服した。皮肉にも伊右衛門の経験は、ひどく消極的なところで威力を発揮した。

その日、伊右衛門は軍議のため、岡山本陣に招集された。

岡山での軍議の席上、家康は諸将に対し自由に意見をのべさせた。

まず、五十余丁むこうの大垣城に居すわっている西軍の本拠をつくかどうかである。

「いかがでござろうかな」
と、家康の座のそばに侍している井伊直政が、議事の進行がかりのような形になった。
「されば」
と池田輝政が進み出て、
「内府御着陣で士気大いにあがっておりまする。この勢いを駆って一挙に大垣城を抜くべきものと存じまする」
と言い、賛同する声が多かった。
伊右衛門は末座にいて、若い諸将らの気おいこんだ意見をきいている。
(内府はむかしから城攻めぎらいだ)
と、物に古りた伊右衛門はそのことをよく知っていた。家康は秀吉とはちがい、城攻めがにが手で、野外決戦を得意としていた。だから池田輝政らの攻城論に対し、
「はて、大垣城は宇喜多秀家をはじめ、石田三成、大谷吉継らがこもっている。いままでの岐阜城や犬山城のようには参らぬぞ」
と、つぶやくようにいった。
この攻城は大ごとになるはずであった。包囲しているうちに一月や二月はたつ。そのあいだに、味方が敵に変じはしまいか、というのが家康の悩みであろうと伊右衛門は思った。
(考えてもみよ)
と伊右衛門は思うのである。家康が主力をひきいて日本列島の中央部の美濃の小城である大垣



城を包囲し、攻めあぐんでいる。敵は大坂城にある毛利、会津にある上杉、というわけだから、自分は囲んでいるつもりでも、大きく西軍に包囲されていることになる。
「それがし、意見がござるが」
と、何度伊右衛門は言おうとおもったか知れなかった。
が、そのつど気がさしてやめたのは、「ではどうするか」という意見が、伊右衛門のあたまにうかんで来ないのである。
(池田輝政らの未熟は笑えぬ)
と伊右衛門はわが身が悲しかった。
(経験が多いということも、しょせんは否定的な意見を豊富にいえるというだけのことで、だからどうしようという案を思いつくに至らぬ。とすれば、未熟と五十歩百歩か)
そんなことを考えているうちに、単純勁烈な例の福島正則がすっくと立ちあがり、
「ごめん」
と諸将のひざとひざとのあいだを通りぬけ前へ出て着座した。
(あの男はなにか言おうとしているらしい)
伊右衛門は、正則のような性格がうらやましかった。どんなことでも咳ばらいをしながら発言する。自分が気に食わなければどなり散らしてでも相手を屈服させようとする。
そういう性格だから、つい人に憚られ、こういう軍議の席でも、家康でさえ、
「ほう、左衛門大夫どのなら、なにかご妙案がおありだろう」

と、格別な微笑をおくってその意見をきく真似をするようであった。

正則の意見は単純である。

「ただちに大坂へ攻めのぼられよ」

ということであった。大坂で西軍の主力である毛利軍と決戦するのである。毛利さえつぶせば他は枝葉のみ、というのが正則の意見であった。

これは暴論であった。

なぜならば大坂城は日本最大の城で、とても大垣城どころのさわぎではない。伊右衛門は、おそらく家康が反対するだろうと思ったが、意外にも、

「そのご意見、よろしかろう」

と採用したのである。

（はて、じかに大坂城を攻めなさると？）

と、伊右衛門はおどろいたが、福島正則は自分の意見が採用されたのをよろこび、

「それに、しくはござらん」

といった。

「いちはやく大坂にむかって進撃し、大坂城下の屋敷々々に閉じこめられている諸将の妻子をとりもどす。それによって諸将の人心を安定する」

と、正則は自分の作戦案の利を説いた。伊右衛門はなるほどと思った。



（千代を救うための作戦か）

そう思うと、にわかに千代のことが気づかわしくなり、一時も早くこの美濃赤坂を発して大坂へ行軍したい、と思った。

諸将もおなじ気持らしい。

あちこちで人の頭がざわめきゆれ、くちぐちに、

「妙案じゃ」

といった。それぞれの諸将が野戦にありながらなによりも気づかっているのが、大坂で人質同然に取り囲われている妻子であることがこの一事でもわかった。

家康も、この機微は十分に察し、大坂方面への進軍こそ士気をいやますものだと見、

「左衛門大夫どの、よう申された」とほめ、さらに家康はいった。

「その途上に、三成の本拠、江州佐和山城（現在彦根市）がある。それをも囲み、踏みつぶしその上で大坂へゆく」

（ほう）

と、伊右衛門はいよいよ意外の感を深くした。生涯で、みずからの意志で城攻めをしたことがない家康が、大坂城ばかりかついでに佐和山城までも攻めおとそう、という異例の作戦計画をたてたのである。

（妙だな）

と思ったが、伊右衛門の頭脳は所詮は掛川六万石程度のもので、家康の意中を汲むことができ

なかった。

家康のねらいは、そのようなところになかったことを、伊右衛門はずいぶんあとになって気づいた。

家康は、大坂城も佐和山城も攻める気は毛頭なかった。

ただそう呼号すれば、当然、陣中に西軍の間諜が入っている。それがいそいで大垣城にある石田三成に報ずるであろう。

三成は狼狽するにちがいない。

当然であった。大坂城を攻められてはモトも子もなくなるのである。いそぎ大垣城を出、兵をひきいて佐和山城に入り、東軍の西上をまず江州の地で食いとめる策に出るであろう。

なににしても、三成はサザエがむき身になるように、大垣城という殻をすてて野外に出るのである。

——それを討つ。

というのが家康の構想であった。戦場はおそらく美濃関ヶ原になるであろう。なぜならば、関ヶ原は中山道、北国街道、伊勢街道の三つの道路が一ツところに入りこみ、行動に便であるばかりか、大軍の決戦にはちょうどいい広さをもつ盆地であった。

「出発は、明日」

と、家康はいった。

すぐ井伊直政、本多忠勝の両軍監は部隊の行軍序列をきめた。



この夜、大垣城にある石田三成もおなじ結論に達した。

諜報によって三成は東軍の大坂への急進方針をすでに知った。とすれば城を出ざるをえないであろう。

「このむこうに関ヶ原という平闊地（へいかつち）がある。わが軍はそれへ先んじて進み、そこで布陣し、敵の来るのを待ち、一挙に撃破しよう」

といった。諸将はこれを妙案とし、大垣城には福原長堯（ながたか）らに七千五百の兵をつけて守備させ、今夜出発することに決した。

家康は出発を今夜にも、とも思ったが、なお二つのことを用心した。

まず、敵の兵数である。

このため諸隊に命じてそれぞれ大垣方面の敵陣へ間諜をはなたしめた。伊右衛門の隊からも、数人の者を出した。

帰ってきて報告するのに、ざっと十万だという。

「十万か」

敵の巨大さにおどろいたが、とりあえず家康の本営へ報告させた。

家康の本営ではすでに諸隊からの報告があつまっているが、ほとんどが十万とみていた。

ところがただ一人、

「二万でござる」

と言う者がある。黒田長政の家来で、毛屋武久という老練の士であった。家康がその数字があまりにちがうのでじきじきよんできくと、

「なるほど敵は人間の数こそ多うござるが、しかしその大半は、南宮山（なんぐうざん）などの山上にあり、かつ日和見（ひよりみ）をしている者もある。それをもってみれば、かならず戦うという者は、ざっと二万とみたわけでござる」

といった。家康は、自軍が敵の人数の過大さに動揺することをおそれ、

「そのとおりだ」

と毛屋の観測をほめ、そのことばを全軍に伝えしめた。

まず、敵の概数はわかった。

つぎに、夜襲のおそれである。さきほどの株瀬川の戦闘からみて西軍の動きは軽快活潑であり、このぶんでは今夜、夜襲を計画しているかもしれぬ、と見ねばならなかった。

ところで、夜襲を受けた場合のことである。陣地守備中に受けるほうが損害がかるい。もし夜間行軍を開始してしまったあとで受けるならば、しまつにおえぬ混乱におち入るだろう。

家康のそういう判断から行軍の開始は明朝、陽が昇ってから、というぐあいにあらためられた。

さらに部署がきめられた。伊右衛門はその発表の座につらなりながら、

（こんどこそ先鋒、まちがいなし）

と思い、少年のように胸をおどらせながら井伊直政の読みあげる軍令をきいていた。

伊右衛門はすでに下野小山の軍議のときに先鋒を希望し、家康もたしかにうなずいている。



ところが、井伊直政はそういう部署にはふれず、最初に後方警戒軍の発令をおこなった。

「この岡山には」

と直政はいった。堀尾忠氏（遠州浜松）、中村一栄（駿河）の名をあげ、その守備を命じた。伊右衛門は堀尾忠氏と親しかっただけに、

（お気の毒な）

と思った。

ついで岡山付近の急造陣地である長松砦には一柳直盛（尾張黒田）。そのほかこの付近に中山道垂井という宿場があり、その付近に陣地をつくる者として浅野幸長（甲府）、池田輝政（三河吉田）、さらに大垣と関ヶ原の中間にある南宮山の敵に備える者として、有馬豊氏（遠州横須賀）、山内一豊。

（これは。……）

と、伊右衛門はぼう然とした。後方警備の諸侯は、ことごとく東海地方の大名である。

（むりもない）

と思った。早くから家康に接近していた浅野、池田をのぞいては、東海地方の大名はこの開戦前までことごとく中立的態度をとり、小山の軍議でやっと家康を推し立ててゆくという態度に決したのである。家康としてはこういういわば新参の味方に重要な功名の猟場をあたえるはずがないであろう。

その夜、挿話がある。

家康は、大垣城の敵本営から夜襲部隊がくることは必至と見、諸将に命じ、各陣営ごとにカガリ火をさかんにし、多数の巡察隊をまわらせ、斥候を遠くに放たしめるように処置し、そのうえで寝についた。

ところで夜半である。

意外な報告が、西尾光教のまもる曾根砦からきて、

「敵兵はすでに大垣城にいない」

という。

さらに福島正則の手もとからも、祖父江法斎という武士が急使としてやってきて同じことを伝え、

「敵は大垣を退去し、野口村から牧田街道を西進している。正則はただちに行動をおこし、このあとを追い、もし接触すればただちに戦闘を開始したい」

という旨をいった。

家康はふとんを蹴って起き、

「然(しか)るか」

と叫び、すぐに井伊直政をよび、

「わしはただちに出発する」といった。

おりから美濃の野に夜雨がふりはじめている。

伊右衛門も陣中で寝についていたが、遠く福島隊のほうで人馬のざわめきがきこえることに驚



き、

「なにごとか」

といっているうちに、家康の本営から使番がきて、

「ただいま福島左衛門大夫殿の御人数が出発なされたにつき、夕刻さだめられた部署により手ぬかりなくお発ちありますように」

といった。

(ほう、もはや合戦がはじまろうとするか)

と、歯の根があわぬほどにふるえた。若いころからのくせで、なにか事がはじまろうとするときに伊右衛門は発作のような恐怖にかられる。

すぐ侍大将たちをあつめ、

「出発する」

と、手みじかくいった。

「すぐ、と申されましたが、先鋒ではござらぬゆえまだまだ間がござりましょう」

乾彦作が、不遠慮にいった。

行軍部署は、福島正則を先鋒に、藤堂高虎、京極高知、黒田長政、細川忠興、加藤嘉明、田中吉政、筒井定次、松平忠吉、井伊直政らがいわば前線戦闘部隊として進み、そのあとに家康がひきいる徳川軍三万二千がゆく。

後衛として、関ヶ原の東端にある南宮山に備える伊右衛門と有馬豊氏とはその徳川軍のあとを

行軍するわけである。伊右衛門のあとには、浅野幸長、池田輝政とつづく。
道は二列縦隊はむずかしい。
路幅もせまく、闇夜でもあり、しかも雨である。一列になってながながと進むことになろう。しかも各隊とも荷駄がついている。行軍速度からいって、伊右衛門の隊が出発できるのは、深夜にちがいない。
「そのとおりだ」
と、伊右衛門はいった。すでに、例の突発的な恐怖から立ちなおっている。
「いますぐめしを炊かせて、食わせておけ。おそらく合戦はあす夜明けからはじまることになろう。そうなれば、めしも食えぬ」
「左様、しかし」
と彦作はいった。
「われらは南宮山への備えと申す。南宮山の敵は、内応すると申す。果して山を駈けおりて戦いましょうや」
「わからん」
それが合戦の常である。予測できるようなことはほんのわずかで、予測もつかぬことがあすからおこるだろう。

戦後にわかったことだが、この夜、大垣城にあった石田三成は敵を関ヶ原でむかえ撃つことに



決心し、
「すぐ発つ」
と、全軍に令した。
午後七時に出発している。
馬には枚(ばい)を噛ませていななかせず、全軍灯火を用いず、具足の草ズリはナワでしばって金具の音を消し、粛々と出発した。
先鋒は、石田隊である。ついで島津隊、小西隊、宇喜多隊の順であった。
すでに西軍の過半である小早川隊、毛利隊、吉川隊、長束隊、安国寺隊、長曾我部隊は、数日前から関ヶ原周辺の丘陵地帯に陣をかまえて滞陣している。
それと合流するのである。
第一隊の石田三成の人数が大垣城を出たとき、雨がはげしく降りはじめた。
時とともにすさまじくなり、この雨のためにかれらの行動が、五十余丁離れた岡山付近の東軍陣地にはわからなかった。
城がからに、いや厳密には七千の留守兵がおかれているが、とにかく西軍の大垣離脱が完了してから、その報が家康のもとに入ったのである。
ともあれ。
伊右衛門の隊が行軍を開始したのは、夜半をすぎようとしている。
「蓑(みの)をもつ者は蓑をば着よ、火縄は油紙につつんでしめらせるな、無用の私語をすべからず。無用

の叫び声をあげる者は斬に処す。たとえ敵に襲われるともさわぐな、部署々々の頭の下知に従え」と伊右衛門は命じ、まず先登部隊を出発させ、自分は中軍の中央にあり、馬上、雨の路上に出た。

伊右衛門の人数は、二千余人である。それが、ときに一列、ときに二列の縦隊になって進むと、闇夜、数丁にわたった。

関ヶ原東端の伊右衛門の守備陣地までざっと四里。

（寒い）

と、伊右衛門は馬上で体をふるわせた。蓑は着ているが、雨は、むきだしたカブトを打っている。それがマビサシをつたっていきなりのどにながれこみ、体のなかまで滲みとおった。

（風邪をひく）

このことが、伊右衛門にはこわかった。戦場で風邪のために熱を出し、五体がゆるみ、気力がおとろえ、このために敵に討ちとられて果てたという話を、どれだけ多くきいたかわからない。

風邪をひかぬようにするには、居眠りなどはせずつねに気力を充実させていることだが、そういう緊張も合戦の前にはいけない。

いざ戦闘というときに、体力がおとろえているからである。

（合戦とは、つらいものだ）

雨にずぶぬれになりながら、伊右衛門は鞍の上にゆられてゆく。

（もう、何度目になるか）

と、おもった。半生で、数多くの戦場を踏んだ。どの戦場も、そのつど、泣きたいほどにつら



かった。もはや武士をやめようと思ったことも何度かある。

伊右衛門は、頭を垂れながら進んだ。

（もはや生涯で、この合戦が最後のものとなるだろう）

敗けるとは思わなかった。

秀吉が家康と戦った小牧・長久手の陣の敗戦をのぞいては、いちども敗けいくさに参加したことはなかった。よほど幸運な半生といえるだろう。

たれかの馬が倒れた。泥濘である。数万の人馬がこねまわした道だけに、すぐ足をとられる。

とにかく、雨、雨、雨である。そのなかを伊右衛門の隊二千余がゆく。

（長篠の戦いのときもこうであった）

と、伊右衛門は若いころを思いだした。甲州の武田勝頼を相手に織田信長が戦った合戦だが、待機中も行軍中も、ほとんどやむことのない雨がつづいた。

（あのとき、織田家の同盟軍が徳川殿で、それが前線で戦っていた。それを救援にゆくというので、われらが出た。そのときの家康殿が、いまや天下分け目の合戦の一方の旗頭になっている）

やがて、左手前方の闇に、南宮山の山容が大きくひろがってきた。

「たいまつをふやせ」

と、伊右衛門は命じた。

南宮山は、敵の巣の一つである。

山頂に吉川広家・毛利秀元の兵一万六千が駐陣し、ついでその東麓の栗原村付近には安国寺恵瓊千八百、長束正家千五百、長曾我部盛親六千六百が布陣している。
「敵は動く様子がないな」
と、伊右衛門はほっとして野野村太郎右衛門九郎にいった。当然であった。伊右衛門らはいわばこの山の下を行軍しているのである。山上山麓の敵がもし駈けおりてきて、伸びきった伊右衛門の縦隊を側面から突けば、当方はこっぱみじんに粉砕されてしまうだろう。
「カガリ火、タイマツなど、いっさい動く様子がござりませぬな」
（やはり風説どおり、山上の吉川・毛利はわが方に内応しているものとみえる）
垂井の宿へ出た。
さらに西へ折れる。やがて夜が白むころ、伊右衛門は所定の陣地についた。
ここからは南宮山は、南のほう、ほとんど目の前にそびえているはずだが、夜があけるとともに山野に霧が湧いた。
夜をこめて降りつづいた雨はやっと小ぶりになったようだが、視界が白濁してみえない。
「ひどい霧だ」
と、伊右衛門はつぶやいた。さし出した自分の手がやっと見えるほどの視界で、これではいくさにもなにも、身を動かすこともできなかった。
松林の中にやがて陣地の準備ができ、伊右衛門はそのなかに入った。丸に三ツ葉柏の定紋を染めぬいた幔幕を張りめぐらせ、無の字を染めぬいた隊旗をたて、そのそばに床几（しょうぎ）をおかせ、伊右衛門は腰をおろした。
西方、ほんの十丁むこうに家康の本陣があり、その西方がひろやかな盆地になっていて、いわゆる関ケ原がひろがっている。
「いくさはまだでござりましょうか」
と、野野村がきいた。
「この霧だ」
伊右衛門は空をみあげた。
「すこし晴れねばなにごとも」
はじまらぬであろう。おそらく関ケ原盆地では、敵味方の区別もついていないのにちがいない。
「しかし関ケ原でいくさがはじまっても、われわれは鉄砲の音をきくだけでござりまするな」
「かもしれぬ」
伊右衛門は、にがい顔をした。武運のわるいことだった。こんな位置にいては、本戦の勝敗さえわからぬかもしれなかった。
「心細うござるな」
「物見を出そう」
と、心きいた者三十人をえらび、関ケ原方面の敵味方の様子を見てくるように命じた。
「味方に斬られるな」

先鋒主力は、みな気が立っている。後方から合戦見物にやってくる物見など、うかうかすると斬られてしまうかもしれない。

（気味がわるい）

と、伊右衛門は、具足のなかで体をゆりうごかした。雨がしみとおって腹のあたりに水たまりができているようであった。

雨はなおやまず、時に木の葉をたたきおとすほどに降ったかと思うと、また小降りになる。午前八時ごろになってやっと小やみになり、あれほど視界をさえぎっていた霧もはれはじめた。

「旗のしずくをしぼっておけ」

と、伊右衛門は命じた。

見あげると、雲が走っている。東へ。

（これは、やむな）

と、おもった。なぜといえば、千代が「美濃関ヶ原のあたりでは雲が東へゆけば雨があがる」といっていたのを思いだしたのである。千代は、この関ヶ原のあたりに所領と屋敷をもつ美濃郷士不破家で成人した。このあたりのことは、彼女はよく知っている。伊右衛門がいま陣所にしている松林も千代の童女のころの思い出の濃い風景かもしれないし、げんに昨夜、夜をこめて行軍してきた大垣からの街道は、千代の花嫁行列の通りみちであった。

（千代が関ヶ原付近でそだったということ、思えば宿縁のふかいことだな）



ふしぎな妻であった。山内家にきて以来、伊右衛門の人生はことごとく千代の手によって作られたといってよく、しかも奇縁なことに、千代はこの関ヶ原付近で育っている。

（おかしなおなごよ）

ひとり笑いがこみあげてくるほど伊右衛門は落ちつきができた。

そのときである。

この陣地の西方十丁のむこうにある家康の桃配山（ももくばりやま）の本陣から、

ぶおーっ

ぶおーっ

と、貝の音が雨雲の天にひびきあがり、後方の伊右衛門の陣に落ちてきた。

「やっ、はじまるわ」

と、伊右衛門は床几からとびあがった。貝の音は、全軍戦闘を開始せよ、の合図である。たちまち、関ヶ原の四方の山々に布陣している敵味方の諸隊の陣地々々から、貝、太鼓の音が鳴りひびきはじめた。

どっとときの声があがり、それに攻め太鼓の音がくわわり、それらが入りまじって後方の伊右衛門の陣地へは、地をゆるがすような海鳴りの音のようにきこえてきた。

さらに、

どどどーん

と、鉄砲の音が一時にひびき、それが雲間にとどろいて雷鳴のように四方を走った。

雨は、あがった。

「鎮まれ」

と、伊右衛門は兵をしずめた。かれの隊は南宮山への敵の備えのためにある。

「殿、南宮山をみなされ」

眼前の山である。

旗、のぼりが無数にひるがえっている。ところがいざ合戦といういまになっても、どの旗も動かないのである。

「攻めくだってくる様子がございませぬぞ」

「なるほど、しずかだ」

「味方への内応、必至でござるぞ」

と、口々にいったのは、野野村、福岡、乾といった侍大将連である。

「さればここに布陣していても用はござりませぬ。この陣所をすてて関ヶ原へ押し出しましょうず」

「無用だ」

「なにをおおせられる」

「われらがここに居ればこそ南宮山の敵は動かぬ。かれらは内応したりとはいえ、なおかつ山上から野の勝負を見ている。石田が勝つとみればぬけ目もなく石田方にもどり、山を駈けおりてわれらを突きくずすだろう。内応者というのはそういうものだ。ここは離れられぬ。内府もそう申



されている」

「お律義なことよ！」

と、みな歯がみした。なぜ抜けがけをせぬか、と思うのだ。こうなっては軍令など無視すればよいではないか。

やがて、物見が帰ってきた。

「おお」

伊右衛門は不必要なほど身をのり出した。さすがに昂奮していた。

「合戦の模様はどうだ」

「すさまじうござりまするわ。合戦は福島左衛門大夫殿の突撃からはじまり、西軍の宇喜多中納言秀家どのが押しかえしております」

と、見てきたままでの現状をはなした。

非常な乱戦らしい。福島の陣は関ノ明神の森を背に備え立ててしていたが、霧のはれるとともに、天満山の山麓にいた宇喜多秀家隊にむかって突撃した。

はじめ銃発し、あとはまっしぐらに宇喜多隊の前線をおそって突きくずしつつあるという。

「それまでか」

「は、そこまで見て走りもどりましてござりまする」

ついで、次の物見が帰ってきたときには、福島隊がさんざんに突きたてられて四、五丁も

潰走しているという。

「ほう」

伊右衛門は立ちあがった。

「それで？」

「宇喜多殿の侍大将、明石全登、本多正重、長船吉兵衛ら陣を立てなおして押しかえし、逆に突き立て突きたてして福島隊はさんざんに崩されております」

「そこまでか」

「は、いかにも」

というち、つぎの物見が四、五人駈けもどってきて戦況を報告した。

勝敗はわからぬという。

とにかく、乱軍のなかを、宇喜多の太鼓ノ丸の旗と福島の山道の旗とが押しかえし押しかえされ、まったく混戦の状況にある。

「ほかは？」

「石田の本陣から兵が突出し、東軍の田中吉政殿、生駒一正殿、金森長近殿、竹中重門殿の旗が押し進み押しかえされしておりますが、これまた勝敗さだかでござりませぬ」

「色合いは？」

と、伊右衛門は声をひそめてきいた。大体の勝敗の色をきいたのである。

物見はいずれもくびをかしげ、



「西軍の優勢」

と小声でいった。

そのあと、伊右衛門は床几へどさりと腰をおろした。

（敗けるかもしれぬ）

千代の顔がうかんだ。敗ければこの日が、千代と自分の今生の別れとなるだろう。

一時間ほど経った。

銃声、ときの声、攻め太鼓、退き鉦などの物音はいよいよはげしくなった。

（ばかな）

と、さすがにいらいらしてきた。いままで幾十度となく戦場を往来してきたが、いまだかつて戦場を耳でのみ聞く持ち場に立たされたことがない。

また物見が帰ってきた。

「どうじゃ」

と、伊右衛門はひざもとまでよんだ。小声で報告をきくためであった。

「敵方島津殿の隊は、はじめ人数ことごとくが座禅のごとく折り敷いて戦うや戦わざるやわからざる景況でござりましたが、これに御味方の細川殿、稲葉殿、井伊殿らの人数がうちかかられ、大いくさと相成り、すさまじく戦っておりまするが、どうやら、お味方の旗色悪しうござりまする。さらに、石田の本陣へ攻めかかりたる御味方の諸将も、二重柵の正面にて大砲で射ち白まされ、三成みずから突撃し、このため御味方は三丁ばかりも潰走つかまつりました」

伊右衛門は、戦慄した。

朝十時半、雨はすっかりあがったが、なお雲が低く、霧が濃い。

物見がつぎつぎと帰ってくる。

どの物見が伝える戦況も、東軍に不利であった。

（しまった）

と、伊右衛門は思い、息づかいがあらくなり、腰がひどく冷えてきた。

（身をあやまったか）

悔恨とも焦燥とも恐怖ともつかぬ黒ずんだ感情が胸に満ちはじめた。家康に運命を託したこと、はたして当を得たことであったかどうか。

目の前で、草が騒いでいる。風がつよくなったようであった。伊右衛門はその草をみつめながら、ぼう然とした。半生かかって築いてきた自分の人生が、いま、崩れ去ろうとしている。

（崩れるか）

いや、崩れよ、とも思いかえした。崩れるものなら崩れ去るがよい、と別の伊右衛門が、おびえる伊右衛門に言いきかせた。もともと無一物でうまれてきた。いまさらうろたえることはないではないか。

別の伊右衛門は、伏見で誕生した。伏見のころ、しきりと禅僧をよび、みずからも禅堂に出かけて接心した。単に流行を追ったにすぎず、なま悟り一つしなかったが、しかし、それ以後、心



中に別な伊右衛門が、生まれて出てきたようにもおもわれる。

それが、この切所で顔を出した。顔を出して、

（六万石、従四位下対馬守、そのようなものは浮世の仮り着ではないか。ぬぎすてたところで損得はない）

と伊右衛門に言い、さらに、

（その肉体もそうさ）

と、ふとぶとしい声でいうのである。肉体さえ、いずこからか来た自分の生命の仮り着にすぎない。去ればまたいずこかへ去る。

「なるほど、左様でもあるな」

と、なまの伊右衛門が、ゆらいでいる草を見つめながらつぶやいた。なにやら、かつて味わったことのない勇猛心がわきあがってきたようであった。

（どうせ、ほろび、うしない去るのだ）

伊右衛門は立ちあがった。

そのとき、幾人目かの物見が帰ってきて、

「徳川殿の御本陣近くまで石田治部少輔が突撃し、いったんは押しかえされましたが、戦況なお油断ができませぬ」

といった。聞きおわるや、

「太郎右衛門九郎」

と、野野村の長ったらしい名前をよんだ。
「そちが使番になって内府の御陣へゆけ。もはや、御下知がどうあろうと、対馬守は戦場に出まするぞ、と」
「はっ」
「待て。こうも申せ。眼前の南宮山の敵、いまだ動きませぬ、この分では内応の心かたしと見てよろしうござろう、そういう敵を相手の張り番は無用でござる、と」
「されば早速に」
と、野野村は馬にとび乗るや、西にむかって駈けだした。
かれが家康の本陣桃配山に駈けあがったのは、十一時である。霧がようやく晴れ、眼下に戦況をまざまざと見ることができた。
野野村は家康の謀将本多忠勝に会い、伊右衛門の言葉をのべると、
「対州どのもそう思われるか」
と意外によろこび、家康を見て、
「さきほどから何度も申しましたとおり、南宮山の敵はもはや動きませぬ。浅野、池田の隊はそのままに据えおき、山内、有馬らは前へ出しましょう」
といった。野野村の察するところ、家康は南宮山の敵になお警戒心を持ち、「大丈夫」とみる忠勝とのあいだに論争があったようであった。



家康は、忠勝の案に賛同せざるをえなかった。
眼下の戦況がわるい。多少の危険をおかしてでも後方の予備隊を投入せざるをえないであろう。
「出よ」
と家康はいった。
忠勝は一礼し、野野村太郎右衛門九郎を丘のはずれにつれてゆき、
「あれが、松尾山」
といった。松尾山には、西軍最大の兵力である小早川秀秋が、一万六千を擁していまだ動かずにいる。かれは事前に家康に連絡して内応すると約束しながら、なお旗幟(きし)をあきらかにしない。
その山麓には、東軍の藤堂高虎隊、京極高知隊がせまっているが、この局面だけははなばなしい戦闘がまだ行なわれていない様子であった。
「あの方面まで出られよ」
と、忠勝はいった。
「ありがたし」
と野野村は丘をかけくだり、馬にとびのるなり陣所に駈けもどった。
伊右衛門は野野村の復命をきき、すぐ進発の命を出し、同時に隣りの有馬隊に伝えさせた。
二千余が、路上に出た。
「駈けよ」
と、伊右衛門は命じた。

全軍、足をとどろかせ、武者声をあげて駈けはじめた。

「咆（ほ）えろ」

と、先手隊長の深尾が叫ぶ。応じて武者声が高くなり、

えい、おう

えい、おう

とすさまじく咆え、足並をそろえ、全軍まっ黒になって関ヶ原の野に出現した。

家康は山上にあり、

「あれは対州の軍か」

と、「無」の字の旗ジルシが勢いよく西進するのを見、新手の参着を膝をうってよろこんだ。

やがて関ヶ原村にさしかかった。

村は、すでに焼きはらわれて、そこここに焼け柱が林立している。

それを突きぬけ、さらに西へ進むと、味方の藤堂隊、京極隊の背後に出た。

伊右衛門はそこで兵を展開し、野の老松の根方に馬ジルシを立てさせ、そこを指揮所とした。

「太郎右衛門九郎」

と、野野村をよんだ。

「この松尾山の敵も、いっこうに動きそうでないではないか」

「わが罪ではござらん」

野野村も、気が立っている。動く動かぬは敵の都合であろう。



伊右衛門は、やむなく鉄砲隊だけを前進させ、山麓にいる赤座、朽木（くつぎ）、小川、脇坂らの敵の小部隊に対し、威嚇射撃を行なわせた。

敵からも撃ってくる。

しかし距離がありすぎて、弾はいずれも中間の田畑に落ちた。

激戦は、北方で行なわれていた。

北のほう、手前から天満山の宇喜多秀家、そのむこうの笹尾山の石田三成の隊が強勢で、それに立ちむかっている東軍主力は、銃戦、白兵戦をくりかえし、敵味方の旗が入りまじってすさまじい戦闘を展開していた。

前面には、西軍きっての勇将とされる大谷吉継がいる。

が、それには東軍藤堂隊、京極隊が打ちかかっていて、伊右衛門の割りこむすきがない。

要するに、伊右衛門は戦場に入ったものの、ひどく手持ちぶさたなかっこうになった。

ほどなく後方の家康の本陣から陣貝、陣鼓が鳴りわたり、伊右衛門がおどろいてその方角をみると、家康の本陣が動きだした。

西へ動く。

徳川の旗本は三万二千で、単位部隊としては関ヶ原における最大の人数だった。

その人数が、銃を射ち、矢を発し、武者押しの声をあげながら進む。

（ほう、動いたか）

と、伊右衛門はほっとする思いだったが、その先頭部隊へすかさず石田三成の銃隊が一斉射撃を加え、さらに騎馬隊の突撃をかけたために、たちまち混乱状態におち入り、しばらく揉みあっていたが、やがて、

（あっ）

と伊右衛門がうめいたのは、徳川兵団が崩れはじめたのである。崩れはじめると早い。後方で、

——ひくなっ、ひくなっ。

と侍どもがさけんで自軍の崩壊を必死にくいとめているようだが、先頭の崩れが波及してきて馬を立てることもできない様子だった。

（こ、これは敗けるかもしれぬ）

と、伊右衛門は全身の毛穴が一時に縮むような悪感をおぼえた。

徳川軍は、距離にして、三、四丁は潰走したが、やがて中軍で食いとめた。

その間、十五、六分ほどの出来ごとである。

やがて正午前になった。

そのとき、突然、天地の色が変ずるほどの驚きを、伊右衛門はおぼえた。

異変がおこった。

その奇現象は、前方ななめ左にそびえている松尾山でおこった。山頂から山腹にかけて林立していた西軍小早川秀秋一万五千余の人数が、にわかに北西に動きはじめたのである。

（あっ、裏切りか）



と伊右衛門が見る間に、小早川隊はいっせいに山を駈けくだり、銃砲を隣接する自軍の大谷吉継の陣地にむかって射ちだした。

「さてこそ、金吾（秀秋）は裏切ったぞ」

と伊右衛門は馬のそばに駈け寄り、ひらりと乗った。

「この機をはずすな、押せや」

と、ムチをあげ、大谷吉継の陣をさし示した。

後ろを見ると、いったん敗走した徳川軍にもこの内応がわかったらしく、陣をたてなおし、すさまじい勢いで進撃しはじめた。

戦勢は逆転した。

一瞬の間だった。

（歴史はいま一変しようとしている）

と、伊右衛門は馬上で指揮しながら、感慨をもった。なんと皮肉なことであろう、ともおもった。小早川秀秋というのは秀吉の縁者で養子になっていた若者である。資性劣弱で、もともと人の笑い者になっていた男だが、歴史のもっとも重要なかぎが、人もあろうにこういう男の手ににぎられていたとは。

伊右衛門は、おもった。

「この勢いに乗れっ」

とはげしく下知しながらも、心中、爽快さはない。裏切り者への人としての憎しみがある。

(何事ぞ)

とおもった。

戦場の様相は一変している。西軍は各陣地において動揺し、崩れはじめた。

さらに裏切り者が続出した。小早川陣地の下で布陣していた西軍の朽木元綱、赤座直保、小川祐忠(すけただ)、脇坂安治ら小大名が、ホコをさかさまにして味方の大谷陣地へなだれこんだのである。

(ばかな)

と、伊右衛門は、敵のことながらも義憤を感じた。感じながらも、

(これで、救われた)

という、わが身の安堵感はおさえきれない。

そのあとが、伊右衛門にとってこの大戦でのはじめての戦闘だったといっていい。

敵はすでに崩れ立っている。

なお戦闘は一時間ほどつづいたが、西軍大谷吉継隊はほとんど全滅し、石田三成隊も攻撃に攻撃をかさねてよく戦ったが東軍主力の大半を一手にうけてついに潰滅し、つづいて宇喜多秀家、小西行長隊がくずれ、島津隊も敗走し、午後一時すぎには戦場を駈けているのはおもに東軍の将士ばかりとなった。

午後二時すぎ、戦いはまったくおわった。家康は関ヶ原の西端天満山のそばの藤川の台地まで床几をすすめ、ここで首級を検した。



そのあと、諸将を引見した。

伊右衛門も家康に賀をのべ、ひきさがろうとしたときに、雨がふたたび降ってきた。

「対州どの」

と、家康は声をかけた。

伊右衛門はふりむき、片膝をつくと、家康は見ぐるしいほどに笑みくずれながら、

「いやいや何でもござらぬ。雨がふってきたゆえ、帰りは濡れ給うなと申したかっただけじゃ」

といった。

(この老人、とりとめもないことを)

と思ったが、家康は天下をとってうれしくてたまらず、そちこちに声をかけたかったのであろう。

「痛み入りまする」

とひきさがり、陣屋の前で馬に乗った。

きょうは、関ヶ原の西端の藤川の河原で一夜を送ることになっている。

雨脚がはげしくなってきた。

伊右衛門はそのなかを、単騎、藤川へ帰ってゆく。口取りは、吉蔵という男だった。

「吉蔵、死体を踏まぬようにせよ」

と、伊右衛門はいった。

野のあちこちに、敵味方の死体がころがり、鉄砲、刀槍、旗指物が散乱している。

「勝ったな、吉蔵」
と、伊右衛門はぼんやりつぶやくようにいった。
「はっ、おめでとうござりまする」
「めでたいか」
はげしい脱力感が伊右衛門の体をおそい、背をまるめ、あごを突き出し、眼をうつろにひらいて、鞍の上にいるのがやっとだった。
そこへ、侍大将の野野村太郎右衛門九郎が馬をあおって駈けてきて、
「殿、宿割りがかわりまして、今夜は野上に宿営することに相成りました」
「案内せい」
と、物憂くいった。
「殿、お体がおわるいのでございますか」
「なぜだ」
「左様にお首を垂れてだらりとお乗りあそばしていると、落人かなんぞに見えまする」
「そうかな」
かすかに微笑した伊右衛門の顔が、ひどく老人くさくみえた。
「勝ちはしたが、よろこびが湧かぬなあ」
「なぜでござりまする」
「勝つことも淋しいものだ」



「お淋しい？」
野野村はおどろいて顔をあげた。
「わしほどの年にならねばわからぬことよ。なるほど勝った、それがどうした、と自分をあざわらいたくなる」
「殿、負ければお命はありませぬ。いまごろここらあたりの首なし死骸の一つにおなりあそばしていることでござろう」
「それと本来、どれだけの変りがあるか」
「おどろきましたな。左様なうわごとを申されるというのは、ひっきょう、お熱でもおありなのでございましょう」
「なるほど、そう申せばすこし寒い」
雨の勢いが、さらに激しくなった。

# 再会

伊右衛門が勝利軍とともに大坂に入ったのは、九月二十七日であった。

すでに東軍の先鋒がさきに大坂に入って市街の治安を確立しているため、混乱はない。

京街道を大坂にむかってくだってきた伊右衛門は、守口を経て城の京橋口に至ると、城壁にはすでに徳川の旗が林立している。伊右衛門は家老深尾をよび、

「西ノ丸へゆき、参着を告げるように」

と走らせ、自分はそのまま部隊をひきい、大坂の自邸にむかった。

門前には、千代が立ち、留守居の老臣、侍女、家士の家族一同をひきいて迎えに出ていた。

千代と重臣は立礼し、他の者は路上、門内にすわり、平伏した。

伊右衛門は馬からおりるや、ゆっくりと千代のそばに歩みよった。

「留守中、大儀であった」

「申し遅れました。つつがなくお帰りの上、このたびの御勝利、おめでたく存じまする」



つとめて、情感は出さない。

たがいに型どおりの会釈(えしゃく)である。

しかしそれを見ただけで、路上にすわっている者、凱旋した将士のなかで感きわまって泣き出す者があった。伊右衛門のねぎらい、千代の賀辞が、従軍家士とその家族たがいの私情をそのままに代表している。

留守居の老臣市川山城の先導で伊右衛門はすぐ書院に通り、留守居の士のあいさつを受け、あとは奥に入り、

「湯をつかいたい」

といった。

遠州掛川出城以来、相模、武蔵、下野まで行軍し、旋回して東海道をのぼり、駿河、遠江、三河、尾張を経て美濃関ヶ原で敵を討ち、近江、山城のさかいを越えてようやくこの大坂にもどってきた。

征旅二ヵ月余、その間、満足に湯に入ったこともない。

「戦塵をおとすのだ」

といってから、ふと、もう生涯の戦塵をきょう落すことになるのではないか、とおもった。

その間、表(おもて)ならば小姓か同朋衆(どうぼうしゅう)が、裏ならば侍女が取りしきるはずであったが、千代がみずからその役にあたった。

「湯はすでに立ててございます」

「おお、ありがたし」
伊右衛門はその場で素裸かになり、褌一つで歩きだした。この小心なほど行儀のよい男にしては、例のないふるまいである。
「お垢は、わたくしがお落し申しましょう」
「千代が、か」
伊右衛門は笑いだした。
「それはありがたい。若いころとはちがい、城持になってから絶えてそなたに背を流してもらったことがない」
侍女たちも遠くからこの夫婦を見まもっていて近づこうとしない。ふたりを水入らずにしてさしあげたいと思っているのであろう。
伊右衛門は板敷の上にどっかとあぐらをかき、やれやれといった顔でわが肩をたたいた。
やがて千代が、たすきをかけ、すそをたくしあげて、かいがいしい恰好で入ってきた。
「なんだ、そちも裸かにならぬのか」
「いくらなんでも」
千代は声をあげて笑った。
「むかしのようには参りませぬ。殿様と奥方とが素裸かで湯殿に入っておられた、などと家来にいわれてはずかしうございます」
「殿様稼業も不自由なものだな」



「奥方稼業も決してよいものではありませぬ」
伊右衛門は湯舟につかり、湯気のなかから感情をおし殺したような声で、
「千代、よくぞ生きていたな」
といった。
千代も、湯気のなかにある。その言葉をきいて思わず感情がせきあげ、
「うっ」
と、袂で顔をおおってしまった。
「よく生きていてくれた」
「一豊様こそ」
と、千代は袂のなかからいった。
「運がよかった。ことごとく千代の差配のおかげだと思っている」
「これは意外な」
文字どおり意外だった。伊右衛門は本来、このことを口に出していったことはない。外面のかたちは何事もすべて伊右衛門の発意から出たこととしてあり、千代の持ってゆきかたの巧みさで伊右衛門自身、自分の智恵から出たものと信じこむようなかたちになっている。
「意外なことでございます。すべて一豊様の御器量のたまものでございます」
「それを申すな、わしは自分の無能をよく知っている」

「いいえ」

と千代はかぶりをふったが、その実、どちらでもよいことだと思っている。伊右衛門もこれ以上言いあらそう気がないらしく、

「話がかわるが、このたびのことだけでなくそれにしても織田、豊臣、徳川と三代にわたってよくぞ無事に生きつづけてこられたものだとふしぎに思う」

「ご運でございます」

「いや、女運（にょうん）ということがある。連れそう女房の持ってうまれた運の光で男の一生は左右されるのだという。そういえば、おれのような者は当代まれな運をもっている」

実に、伊右衛門は奇蹟の男といってよかった。関ヶ原に出陣した東軍諸将のなかで、織田、豊臣、徳川の三代を生きのび得た者は、家康その人のほかに、伊右衛門しかいない。福島正則らは秀吉からこちらの男だし、黒田長政や細川忠興は第二世でそのおやじ殿はべつとしてかれら自身織田家につかえたことはない。

（おれに子があれば、おそらくその子が関ヶ原に出陣して荒仕事をしたろう。他家とはちがい、子がないためにおれ自身が出ている）

すでに老境に入った肉体を駆っての戦場しごとは、ずいぶんとつらかった。家康が、関ヶ原での主力決戦に福島、黒田、細川といった若手の大名のみつかい、伊右衛門をつかわなかったのは、年齢を顧慮し、伊右衛門では血気の突撃をすまい、と見たからであろう。

「とにかく、おれが齢がしらだった」



「そういえばそうでございますね」

と、千代は感慨ぶかげにいった。さまで武辺者でもないこの夫が、三代にわたる重要な戦場にはことごとく出陣し、めだつほどの武功もないかわりにたいしたしくじりもなく場数のみをかさねてきた。豪傑、軍略家といわれた連中は、ほとんどが早死するか、さもなければ自分の器量才能を誇り、増上慢を生じ、人と衝突して世間の表から消えた。

（この亭主殿だけが、はればれしくも生きのこっている）

それが千代にはおかしかった。可もなく不可もない人間で律義一方の男だけが人の世の勝利者になるものなのだろうか。

（とにかくこの人は、わたくしがつくりあげたものだ）

というひそかな思いが千代にはある。千代の素材となるには、伊右衛門ほど従順で癖のない、好都合な男はいなかった。

（若いころには多少のもの足りなさがあったけれど、結局はこの亭主殿が、わたくしのような女にいちばん適（あ）っていたのかもしれない）

夜、寝室で、伊右衛門は千代を相手にふたりきりの酒宴をひらいた。

ふたりとも酒はさほどに飲めないが、

「きょうは、無理にもすごしてみよう」

という約束で杯をかわしはじめた。千代が注（つ）げば伊右衛門が飲む、伊右衛門がつげば千代が飲

む。

だんだん酔ってきた。

「なあ、千代よ」

と、伊右衛門の言葉もぞんざいになった。

「合戦には勝った。あの勝った瞬間、おれは戦場に立ちながら物さみしさが、腹の底からわきあがってきたな」

「きっとお齢のせいでございましょう」

千代も酔っている。

「齢、齢、といわれるほどの齢ではないぞ」

「若いころにはいくさに勝てば狂喜するほどによろこぶものでございますけど、齢をとるにつれ、つい敗けた相手のことを考えておしまいになるのではございませぬか」

「千代はよく知っている」

伊右衛門は目をみはった。

「そりゃ、想像すればわかりますもの。年を経れば人々はおなじ生のなかに生かされているということが、しみじみとわかります。それが物のはずみで敵になり、味方になっても所詮は仮の姿にすぎぬということがわかるような気がします。それがわかってくると人生の滋味があじわえるとともに、もはや若いころのような、無法にどこまでも突っこんでゆく行動力がおこりませぬ。仕事はわかいころ、物を味わうのは老いてから、——きっとそのようになっているのでございま



しょう」

「そのとおりだな」

伊右衛門はうなずき、自分が自分の肉体できりひらいてきた半生はこのあたりでひと区切りになるかもしれぬ、とおもった。

「もっと飲まぬか、千代」

と、伊右衛門は酒器をあげた。

「もう、たくさん」

「弱いやつだ」

「あのようなことをおっしゃって、一豊様こそお体がたえずゆれておりますのに」

「ひとつ、舞おうか」

伊右衛門はよろりと立ちあがった。千代が白扇をさしだすと、受けとるやすぐぱらりとひろげ、

「千代、謡え」

「なにをうたえばよろしうございましょう」

「敦盛などを」

と、伊右衛門はもう座敷の真中にすべり出て両手をひろげている。

千代が、うたいはじめた。

伊右衛門が舞う。

それも長つづきがせず、やがてドサリと倒れこんでしまった。千代が走りよると、伊右衛門は

しくしく泣きはじめている。

「千代も泣け」

ごろりとあおむけざまになった。

「泣かぬか。敵にまわった石田三成をはじめ関ケ原の死者と敗者のために泣いてやれ」

「……」

「おれはな」

と、千代の肩をもって起きあがり、

「関ケ原に暮色がたれこめはじめたころの想いをわすれることができぬ。勝つも負けるも人生、まことにはかないものだ」

「儚うございますけど、一豊どのをおたすけ申して日々心の充ちたいままでを送ってきた千代には、またとない豊かな半生でございました」

「おれも、まあ、そうだ」

「まあだけは余分でございましょう」

「余分かな」

勝った伊右衛門には、その喜びのぶんだけ、ぽっかりと空虚な穴があいてしまっているらしい。

家康は九月二十七日、大坂城西ノ丸に入って、戦後の始末にとりかかった。

この日すぐ着手したのは、論功行賞の実務である。譜代の井伊直政、本多忠勝、本多正信、大



久保忠隣、榊原康政それに外様関係の事情通として徳永寿昌らの六人をえらび、調査と草案の作成者とした。

「譜代は翌年になってもよし、客将からはじめよ」

と、家康は方針を明示した。なにしろ家康の側にくわわった豊臣家の大名は五十人いる。その功をいちいちしらべるだけでもこれは大変な作業だった。

むろん賞罰には家康自身の意向がある。それはあらかじめ六人の者に言いふくめた。

「山内対馬守一豊のことだが」

と、家康は六人衆にいった。

「かれはいま掛川六万石を食んでいる。これに土佐一国二十余万石を与えるように」

といったから六人は驚き、なかでも本多正信は進み出、

「おそれながら不審でござりまする。山内対馬守にそれほどの戦功がござりましたかな」

といった。なるほど、関ケ原での主力戦で血みどろの合戦をした福島正則、池田輝政、黒田長政などからみれば、伊右衛門はただ戦場付近をうろうろしていたにすぎない。

「ないな」

家康はわらった。

「しかしそちらは、武功と申せば槍先の功名のみと思っているのであろう。槍働きなどやろうと思えばたれにでも出来る」

「は？」

「対馬守は、小山での前夜、その妻からとどいた書状を開封せずにわしにさしだし、当時動揺しつづけていた客将の心をわがほう加担にふみきらせ、かつ小山の軍議では、わしに城を進呈することを申し入れ、そのため東海道に居城をもつ諸将はあらそって城を空にしてわがほうにつき、この一事で諸将の気持がかたまった。あの瞬間でもはや勝敗は決したといっていい。その功、抜群というか、とにかく関ヶ原を勝利にみちびき、わが家を興すいしずえをきずいてくれた。土佐一国はむしろ安い」

家康は、区々たる軍事功名よりも政治的働きのほうが効果影響が大きいとみているから、この処置をとった。

「賞はできるだけ早いほうがよく、またきまった分からつぎつぎに言いわたしてゆくほうが人心に無用の疑念がおこらずにすむ」

伊右衛門にこの旨が達せられたのは、十月に入ってからである。井伊直政によばれてこの事を伝えられるや、

「国持？」

と、伊右衛門は信じられない、といった顔をした。あの程度の戦功からみて、せいぜい六万石から十万石程度になるかと思っていたのである。

それが国主にさせるというのだ。

「おそれながら兵部少輔（直政）どの」

と、伊右衛門はこの徳川家の官僚にいった。



「おまちがいではありますまいか」

「相変らず、ご正直でござるな」

直政も笑いだしてしまった。

「対州どの、うち割ったところを申しますると、われわれもこの法外な御加増は不審でござった。ところが上様におかれましては、御じきじきの言葉にて、かくせよ、とおおせあった。対州どのの功は諸将のうちの随一であると」

「おそれ入ります」

と伊右衛門は墨付を貰ったがまだ信じられなかった。

帰館してから千代にかくかくであった、と墨付を見せると、千代は大声でわらい、

「頂くときにはあっさり頂くものです。御律義も時によってよしあし、うじうじと御遠慮なさるとお人が小さく見えます」

といった。

土佐二十四万石というのは、なににしても意外だった。

その日、伊右衛門は千代からなにをいわれてもぼう然とし、ときどき「千代、幸運というものはあるものだな」などとつぶやき、まだ実感がつかめてない様子だったが、翌朝、目ざめるとすぐ、

「千代、人数が要る」

とひどく張りきった声でいった。千代がびっくりして伊右衛門の顔をみたほどに大きな声だっ

た。
「すぐ、掛川、美濃、近江あたりの知るべをさがしてよき者を掻きあつめよう」
「すぐ、はご無用でございましょう」
「いや、すぐだ。もしたったいま大戦があればどうする。二十四万石の軍役がつとまらぬではないか」
「もういくさはございませぬよ」
「ある」
(このひと、気が触れたのではないかしら)
千代はいやな気がした。先日、戦場からもどったときはつくづく人の世の憂きことを物語っていたのに、たかだか四倍の増封を得たぐらいで、もうころりと人がわりがしている。
「土佐は、古来、鬼国とか建依別の国とか申し、男の気の荒いところときいています。それに長曾我部の残党が一万人以上もいて、新国主が入部すれば目にものをみせてくれようと手ぐすねひいて待ちかまえていると申すではございませぬか。まず、かの国へ人をつかわして様子をおさぐりあそばすのが第一かと思います」
「それは当然なことだ、それはそれ、人数は人数、すぐにも整えねばならぬ」
「しかし土佐では長曾我部家という地生えの国主がぽっかりなくなって、遺臣どもがあすをも知れぬという境涯におちたのでございますよ。おそらく、死にものぐるいになって反抗するにちがいありませぬ」



「だからこそ人数だ」
「いいえ、できればその土地の様子を見、土地の者を召しかかえられるのが一番と存じます。そうなればみなも安堵し、鬼国というかの者もなつくようになりましょう」
「いや、それは心もとない。他の国とちがい、土佐は叛骨のつよい土地で容易ならぬ連中が住んでいる。大軍をつれてのりこみ、弾圧をくわえるしかない」
「一豊様らしからぬ……」
と、千代はおどろいてしまった。たった一夜で人がわりしたとは、どういうわけだろう。
「おれには自信がある」
伊右衛門はいった。
「上様も、土佐は対州でこそ始末ができる、そう申された」
事実そうであろう。家康は土佐の国柄や長曾我部家の主従の結束の固さを知っている。これを若い大名に料理させるとおそらく一揆につぐ一揆がおこり、ついには国を乱し、天下の大乱になるかもしれぬ、ということをおそれた。それには、年歴のゆたかな伊右衛門がいい、と思ったのだろうし、また、福島正則あたりをやると長曾我部の遺臣どもにたきつけられ、家康に弓をひきかねまじきことにもなる。その点でも、客将出身のなかで律義一途の伊右衛門がいい。徳川の天下こそ大事と思って、あやまちなくやってくれるだろう、と思った。
だから伊右衛門がえらばれた、と千代はみている。
その伊右衛門が、大封をえた第一日こそ可愛らしくも意外な顔をしていたが、その翌日には、

——おれはそれだけの器なのだ。

という自信が出来、ちょっと英雄気どりになりはじめたのである。

（これはこまったことになる）

千代はなかば、恐れをいだいた。男はこうなれば始末におえなくなることを千代は知っている。

「土佐。——」

と、千代は一日のうちで何度かつぶやくようになった。

（どんな国だろう）

なにもしらない。千代は、伊右衛門が土佐一国を受領してから、この未知の国についての知識をできるだけ得ようとした。

が、手がかりもないのである。侍女、御坊主、侍、のたれにきいても、そういう国名があるということを知っている程度で、みな恐れ入ってうなだれるばかりであった。

「鬼国でありまするそうな」

と、おののくように言った侍女もあった。鬼のような男どもが住んでいる、というのが、僻地に知識のない上方の者の印象であった。

「でも、人も住んでいるでしょう」

と、千代は声を立てて笑った。

土佐は七郡にわかれている、ということは千代も知っている。南は大きく太平洋に面し、くじ



ら、まぐろ、さば、かつおなどの巨魚がとれるということもきいている。むかしは京の政治犯の流罪地で、「土佐に流される」といえば王朝の公卿などはふるえあがったものだった。そういうむかし、公卿で土佐の国司として赴任せよといわれても、ほとんど任地にはゆかなかったらしい。

そのころ、土佐の国司を命ぜられて、なにかの事情で現地に行かざるをえなくなった歌人紀貫之が、承平五年任期満ちて京にもどるとき、その五十五日間の旅行日記をかき、それを「土佐日記」と名づけた。

当時の人々があらそってそれを筆写し、おもしろがって読み、その後千代の時代まで数百年、土佐知識の源泉になっている、という事は、異様なことといっていい。それほどにこの南海地方は、知られざる国なのである。

千代は念のため、京に人をやってその「土佐日記」をさがさせ、やっと手に入れて読んでみた。千代の時代から六百数十年前の宮廷人の見聞記をたよりに知識を得ねばならぬとはどういうことであろう。

伊右衛門はどうかといえば、これもひどくたよりなげであった。

「おれはな」

と、伊右衛門はいった。

「わるい印象がある。あれはやはりいわれるような鬼国だな」

「どのような？」

千代がきくと、太閤はなやかなりしころの話である。

太閤が四国征伐をやって長曾我部氏をくだした。その降伏によって長曾我部氏は土佐一国を安堵され、豊臣家の大名になったのだが、その御礼のために長曾我部元親は海上に船をうかべて大坂にやってきたことがある。

その当時、

——土佐の人間がくる。

というので、大坂の庶人まで物めずらしがって見物に出た。

その黒山のような見物人のなかを、土佐武士二百人ほどが行列をつらねて歩いてきた。かれらもまたうまれてはじめて上陸した本土の光景に昂奮していたにちがいない。みな具足をつけていた。

色は真黒で眼ばかり光り、その具足ときたら、

——手製ではないか？

とうたがわしくなるほどに粗末で、帯などは縄を巻いているのもいた。そのくせ、肩をそびやかし、手をふり、意気軒昂としているのである。

「その後、上方の風にも馴れ、伏見の長曾我部屋敷に詰めている土佐人はさほど奇妙なものではなくなったが、はじめはおどろいたものだ」

家康の参謀本部と軍団は、なお大坂城に駐屯しつづけている。戦後処理のためである。

その戦後処理にあたっているのは、家康の参謀団である井伊直政、本多忠勝、本多正信、榊原



康政ら譜代の諸将だが、伊右衛門は毎日大坂城西ノ丸に登城して毎日かれらに会い、大小となく相談をもちかけた。

（うるさい男だ）

と、かれらもおもったであろう。

（そんなことがわからないのか）

と、おもったにちがいない。

しかし同時に、あまりに頼られてしまったためにかれらは伊右衛門の問題を自分の問題として考えるようにもなった。人情といっていい。

最初、伊右衛門は家康から土佐一国の朱印状をもらったとき、なにやら体が宙に浮くようでぼう然としてしまったが、翌日、たちまち、

（こまった）

と思いだした。

土佐の前国主の長曾我部盛親はまだ浦戸城（うらどじょう）にいるし、その軍団は完全体制のまま一国に蟠踞（ばんきょ）しているのである。

（それを、どうするのだ）

ともおもった。長曾我部家はなるほど関ヶ原では敗北したが、かれらはほとんど無傷のままだし、そのまま戦場からしりぞき、伊勢路を通って伊賀に出、大坂に入り、そこから船を仕立てて帰国してしまっている。

――土佐一国は山内対馬守一豊に。

といわれたところで、それはまだ紙きれ一枚のことで、このさき長曾我部家をどうするかという重大問題がある。

（おとなしく退去すまい）

と思うのだ。なにしろ長曾我部家は、土佐土着の大名で、それだけに主従とも土地を去りがたいであろう。

（必死に抵抗するだろう）

とみるのが、至当だった。必死に抵抗するとなれば遠国だし兵は強悍である。天下の兵をこぞって攻めても容易に片づかぬ乱になる。

伊右衛門は朱印状を頂戴した翌朝、はやくから大坂城に登城し、西ノ丸に詰めている井伊直政の袖にすがりつくようにして、

「長曾我部はおとなしく退散しましょうや」

といった。

「わかりませぬな」

伊右衛門より年下の井伊直政は、いかにも能吏らしく、さしさわりのない微笑をうかべていった。

「それはこまります」

「左様」

井伊はうなずいた。伊右衛門だけでなく、土佐が叛乱をおこされては、天下をとったばかりの



徳川家もこまるのだ。

「それがし一手の兵にて入国せねばなりませぬか」

もしそうなら敗けるだろう。六万石の兵力をひきいて、一国の大名を討てるはずがない。

「まず、当方にて」

と井伊がいった。

「かの国へ使者を送りましょう。おとなしく受けるか受けぬか、事はそれからでござる」

「なにぶんともよろしくおねがいつかまつりまする」

そんなことをいってはひきさがってゆく。

井伊ら家康の官僚団は、諸国の大名領を没収したり、与えたりしてひどくいそがしく、伊右衛門のことだけにかかりきりになっていられないのだが、この無能者に愛情がわいてきた。

たとえば福島正則などは尾張清洲二十四万石から一躍安芸備後両国四十九万八千石になったのだが、新領地に進駐するのは、ほとんど独立でやる準備をととのえている。伊右衛門はそうではないだけに可愛気がわいてくるのであろう。

ある日、井伊直政は、

「対州どの（伊右衛門）、左様にご心配なさることはござらぬ。土佐の長曾我部氏は貴殿以上に心配していることでござろうよ」

といった。

当然である。長曾我部氏は敗者の立場にあり、どういう処置をうけるか、戦慄しながら日を送っているであろう。当然考えられることは、当主盛親はうまくいって切腹、まずければ打首、領土召しあげ、ということになるであろう。

さまざまに臆測しながら土佐浦戸城で連日会議をひらいているにちがいない。

(いずれ、助命嘆願の使者がくる)

と井伊直政はみていた。そのときに政治的な手を打てばいいのである。

「まあまあおまかせあれ」

と、伊右衛門を安心させた。

果せるかな、長曾我部盛親のほうから、老臣立石助兵衛、横山新兵衛のふたりが盛親の使いとして井伊直政のもとに訪ねてきた。

助命嘆願である。

だけではない。領国もそのままにしてくれということであった。

「なにぶんとも、拙者主人盛親こと、若年にて世事にうとく、心ならずも石田に属し、内府(家康)にお手むかい致しました。しかしながら関ヶ原南宮山に陣し、一発の鉄砲も射ち候わず、そのことをよくよくおぼしめしくだされ、内府の御前をおとりなしくださりませぬか。ひとえにお願いし奉る」

といった。

長曾我部家は、不幸だったといっていい。



一代の風雲児といわれた先代元親が関ヶ原の直前に病死し、まだ天下の情勢にくらい盛親が家を継ぎ、ついだとたん、あれよあれよというまに情勢に押し流されたのである。

もともと非社交的な家で、他大名とつきあわなかっただけに、石田三成ともさほど親しかったわけではない。

味方する義理もなかったのである。

それに、この家はじつは最初は家康に味方する方針をきめていた。

大坂で石田三成が旗をあげるや、盛親は関東にいる家康に、

——お味方つかまつります。

という旨の密書をかき、ふたりの家来に持たせ、大坂を出発させたのである。

家来の名は、十市新右衛門、町三郎左衛門であった。このふたりは町人姿に化け、いそぎ東へくだったが、不運にも西軍長束正家が近江水口に関所を設けてあやしい者の関東にくだるのをふせぎ、きびしく人あらためをしている。

それにかかった。

そのために追いかえされ、たったそれだけのことで石田方につくはめになった。

運といっていい。

あのとき、千代も大坂にいて、家来田中孫作を密使とし、百姓姿に変装させ、関東へ走らせたところ、おなじ近江水口の関所にひっかかった。このとき孫作はなんなく通過した。

これが山内家、長曾我部家興亡のわかれ道になっている。一方は土佐の領主になり、一方は土

佐を追われる身になった。奇運というほかない。

が、千代が派遣した田中孫作は、近江坂田郡高溝村の出身で、関所の所在地である近江弁ができる。

「この国の百姓でございます」と関所役人にいってもあやしまれないのである。

が、長曾我部盛親が派遣した十市と町のふたりは純然たる土佐人で、土佐ことばしかできない。

「ナマリは手形」だという。「これは土佐のやつではないか」とたちまち露顕し、追いかえされたのである。要は人選のあやまりであった。そのささいな手落ちが、土佐一国をうしなうはめになっている。

とにかく井伊直政は、土佐からきたふたりの謝罪使を引見し、

「いやいや、ご同情にたえぬ」

と愛想よくいった。

「土佐侍従（盛親）とは存ぜぬ仲ではない。それにこのたび石田に御加担なされたこと、心ならずもの事という御事情も相わかった。この上はそれがしの力の及ぶかぎり上様（家康）の御前をお取りなし申しあげる」

わっ、とおどりあがりたいほどの喜色をふたりの謝罪使はうかべた。立石助兵衛にしろ横山新兵衛にしろ、土佐の田舎者だけに、家康の官僚というものがどういうものであるかはわからない。

この言葉を真にうけた。



井伊直政にすれば、骨のずいまで徳川家の安危しかない。長曾我部家がどうなろうとかまわないことで、ただかれらが無用のさわぎをおこして天下の大乱になることだけがおそろしいのである。

だから、心から同情するような顔つきでできるだけやさしく、愛想よく、応対した。

「ありがとうござりまする。ひとえに兵部少輔（直政）さまのみが頼りでござりまするゆえ、なにとぞなにとぞ、おねがい申しあげまする」

「しかし御両所」と、井伊直政はいった。

「御取りなしはいたしまするが、しかし盛親殿ご自身がお国もとでけろりとなされていてはなんともできぬ。上様の御心証もいかがであろう。そう気づかわれるゆえ、なにはともあれ、軽装にて上方までおのぼりくださらぬか」

「それは」

二人は絶句した。盛親がきてしまえば身の安全はどうか、と思ったのである。

「御心配無用、お身柄については拙者が請けあいます」

と直政がいった。

「あっ、左様で」

ふたりはまた叩頭した。ここで直政にさからっては、モトも子もなくなってしまう。

「さっそく国許へはせかえり、主人を説き、御説のごとく致しまするでありましょう」

「よう申された。拙者がそう申してもお国もとの衆はお疑いであろうゆえ、拙者の家来をおつけ

申しましょう」
　と直政は言い、井伊家の家来で梶原源右衛門、川手内記のふたりを添えた。
「これはかさねがさね、ありがたきことに存じまする」
　とふたりは礼を言い、井伊家の家来ともども大坂を発ち、海路国もとへ帰った。
　国もとでは、ふたりの帰りを鶴首（かくしゅ）して待っていた。
　当時、土佐の主城は浦戸湾に面した岡の上にあり、浦戸城という。
　さっそく城内大広間で会議がひらかれた。
　立石、横山のふたりは、
「井伊兵部少輔さまにはいたく御同情のおもちにて、首尾はまず上乗かと存じまする」
　と報告し、井伊家から差しつかわされている梶原、川手のふたりも同様のことを言い、それを裏づけた。
　この梶原、川手のふたりは、大坂出発にあたって主人直政から、
　――とにかく盛親を大坂にのぼらせねばならぬ。身柄をこっち側の手にとってしまえばあとはなんとか料理できる。この事、くれぐれも誤るでないぞ。
　と言いふくめられている。
　長曾我部盛親はよろこび、この井伊家の使者を三日三晩にわたって饗応し、
「されば、盛親、おおせに従って近日まかりのぼりますゆえ、御主人兵部少輔どのにはよしなにお取りなし下されよ」



　と返答し、立石助兵衛のほかに豊永惣右衛門をそえて大坂へ帰らせた。
　――大坂へのぼる。
　と取りあえず返事したあと、長曾我部盛親は家臣のおも立つ者をあつめ、評議した。
　議題は要するに、
　――井伊殿のさしずにまかせて軽装で大坂へのぼるか。
　それとも、
　――籠城すべきか。
　ということである。
「籠城なされ」
　という意見が、圧倒的に多かった。
　主戦論者の代表は、大黒主計、武内内蔵助のふたりである。
「なるほど井伊殿のご好意はまぎれもござりますまい。しかし、天下の仕置というものはとかく人情のみにては運ばぬもの。おそらく殿が大坂へおのぼりあそばせば、敵はえたりかしことトリコにいたすでござりましょう。運を天にまかせて籠城あそばすにしかず」
　と、大黒主計がいった。それを受けて武内内蔵助が「籠城はかならず成功する」という戦術戦略論をのべはじめた。
「当国は北は千山万岳そびえ立ち、南は大海をひかえ、しかも本土から攻めるには船をもって渡

海せねばならず、一国籠城するにかように便利な国はござらぬ。遠き鎌倉の世にも平家の将卒壇ノ浦にて破れて以来、多くは土佐に逃げ、山々浦々に土着つかまつりましたるが、鎌倉の源氏はついに当国までは遠征できず、手つかずに相成った古き例がござる。なるほどいざ籠城となればこの浦戸城は味方の出入り駈け引きには便利でござるが、敵の大軍をひきうけるには要害よろしからず。されば国中に山林嶮阻（けんそ）あまたござれば、自由に要害をえらび、そこここに籠り、さんざんに敵をなやませば、五年六年は敗けることはござりませぬ。そのうち寄せ手も退屈し、アツカイ（講和）になることまちがいござりませぬ」

なかなかの道理である。

ところが戸波右兵衛という者がそれまで黙然としていたが、やがて腕組みを解き、

「無理じゃな」

といった。

「源平のむかしとはちがう。太閤の朝鮮御渡海以来、諸国で大船をもつようになった。それをかきあつめて天下の軍が押しよせてくれば何ともならぬ。国中の山林にかくれて巧妙に戦えば五年十年はもつ、ということであるが、それも源平のむかしのことだ。いまは鉄砲というものがある。これを何千何万挺と陸上げして野狩り山狩りをやられれば、今日はひがしの小城、あすは西の小城とつぎつぎに陥されて平らげられるまでに三月とかかるまい。しかもかの関ヶ原の一戦で天下の権はさだまり日本全土、草木といえども徳川になびかぬというものがない。されば、天下の兵をひきうけて勝つはずのないいくさをするよりも、いっそ長曾我部侍の武名を残すためならばこ



の浦戸城に籠り、はなばなしく一戦していさぎよく全滅するにしかず」

なるほど、と一同うなずき、この日の評定はそれが結論になった。

しかし翌日、翌々日と評定をかさねるうちに人々は評定に飽き、疲労し、しだいに軟論が勢力をしめるようになり、筆頭家老久武内蔵助が、しきりに軟論をとなえはじめたため、一同、

「久武殿におまかせしよう」

ということになった。

主人盛親を大坂にのぼらせ、井伊直政の同情にすがる、という案である。

やがて出発の日どりがきまった。

浦戸出帆にさきだって盛親は、行くすえを祈るがために付近の柏尾の観音堂に参詣すると、近づくよりも早く堂は燃えあがったという。

敗将長曾我部盛親が、家康のゆるしを得るために土佐の浦戸湾を出帆したのは、秋も深くなってからである。

供は、世をはばかってすくなくし、侍十一人、足軽百八十人にとどめた。

大坂の木津川尻（きづがわじり）で上陸し、ただちに天満学授の寺に入った。

ところがその夜、町々に流説がとび、

——合戦じゃ。

という。天満の町家では家財を荷車につんで逃げ出す者もあるというさわぎで、盛親は、

「何事か、きいてみよ」

と人を走らせると、なんと、徳川方では部将榊原康政、本多忠勝を大将として攻め寄せてくるという。

「敵はたれだ」

と盛親がきくと、「おそれながらわが君でござりまするそうで」と、流説をきいてきた者が答えた。

これには盛親はおどろいた。家臣がうろたえるうちに夜があけたが、朝になって気づいてみると、なんと百八十人もいた足軽がひとり残らず前夜のうちに逃げ散ってしまっていた。

侍も、四人足りない。

残ったのは、吉田孫左衛門、中村惣右衛門、江村孫左衛門、黒岩掃部、立石助兵衛、豊永惣右衛門、横山新兵衛の七人であった。

この流説は、大坂城西ノ丸に詰めている井伊直政が流したものらしい。

この能吏にすれば、

「軽装で来よ」

と盛親にいったのに、足軽百八十人もつれてきたことが不快だったのであろう。それにこの多数が大坂で合戦でもおこされるとこまると思い、

――大軍をもって攻めかかる。

といううわさを流したものらしい。



とにかく、足軽は散った。

その朝、井伊直政は盛親のもとに使者を出し、

「そこは御用心もわるく、御不自由でもあり、なにかとうわさのたねにもなりましょう。それがしの屋敷にて宿られよ」

と好意を示してきたので盛親はいよいよろこび、井伊家の下屋敷に移った。

直政にすれば、「敵」がはだか身一つで自分の屋敷に移ったのだから、野の鳥を籠に入れたのも同然になった。

それでも井伊は一応は他の本多、榊原らと家康の御前にゆき、

「盛親は、石田にあざむかれたもので、関ヶ原でもことさらに合戦に及ばず、同情の余地がござりまする」

と盛親のために弁じた。

そのあと下城し、自分の上屋敷に盛親の家来どもをよび、

「上様に申しあげておいた」

と憂わしげな表情でいった。

「それでいかがでございました」

「実はよい話ではない」

「えっ」

「上様は、ご不興げであった。どうやら、盛親殿は国を出発なさるとき、津野孫次郎という御実

弟を殺害なされたそうな」

「あ、その事を。——」

「そう、お耳に入っている。わしは知らなんだが、上様はたれかからお聞きあそばしたらしい。そこで、関ヶ原の事はさておくとして、盛親とは不義者ではないか、左様な不義者には腹を切らせよ」

「あっ」

ばかな話だ。盛親はたしかにその実弟を処分したが、しかしそれは大名の家の統率上のことで、家康からとやかくいわれる筋はない。それを家来は主張した。

「とにかく、切腹だけはなんとかおゆるしねがえるよう奔走してみる」

と、直政はいった。

家康、直政は巧妙だった。

いったんは、盛親の小事をあばいて切腹を宣告し、家来一同を蒼白にさせた。

もはや、本領安堵どころのさわぎではなかった。盛親の助命をねがうことが、唯一の希望になった。

盛親の家来たちは、必死に直政にすがった。

「むずかしいが、なんとかする」

と直政は言い、数日問題を捨てておいてからふたたび自分の上屋敷に盛親の家来たちをよび、



「朗報がある」

と、晴れやかな顔を作っていった。

「上様にさらに嘆願つかまつったところ、上様格別のお慈悲により死罪だけはさしゆるされることに相成った」

「あっ、まことでござりまするか」

「左様。土佐一国をめしあげ、身柄は京都所司代におあずけ、ということに相成る。つまり牢人になり、町家の一軒も借り、そこにて住め、ということじゃ」

「あ、ありがたきお慈悲でござりまする」

と家来たちはいった。

「しかしながら」

直政はいう。

「土佐一国はお召しあげになるぞ」

やむをえないことであった。

家来たちがその旨、盛親に報告すると、盛親ははじめて、

（はかられた。——）

と気づいた。べつに愚鈍というほどの男ではない。のちに大坂の陣で牢人の身ながら大坂城に入城し、旧臣をかきあつめ、真田幸村、木村重成、後藤基次（又兵衛）などとともに大坂城七将のひとりにえらばれ、河内長瀬堤で藤堂兵と戦い、さんざんに破っている。軍人としてはすぐれて

いたが、ただうまれつき、政治的感覚というものがない。土佐一国をうしなうにいたったのは、盛親一個の才能の敗北といっていいだろう。

　盛親はやむなく、国もとの家老あてに城地いっさいを明けわたすように、という旨の朱印状を書き、それを井伊直政に渡した。

　家康は、とりあえず土佐一国は井伊直政のあずかりということにして、伊右衛門の入国が円滑にゆくようはかってやれ、と直政に命じた。

　伊右衛門は帰邸してその旨を千代にいうと千代は冴えない顔色で、

「では、盛親どのはどうなるのです」

と、きいた。

　敗者が、あわれである。べつに縁のあった人物ではないが、関ヶ原の直前、千代の密使が近江水口の関所を無事通過し、盛親の関東加担の密使がそこで追いかえされた。そこでくるった運命が、こんにちの現実になって、勝者と敗者の位置をかえている。

　だから、千代は、まだ見ぬ、おそらく今後も会うことがないであろう長曾我部盛親という若い大名のことを、考えずにはいられないのである。

「盛親のこと？」

　伊右衛門は、意外な顔をした。かれは、あたらしい国主になることで頭がいっぱいで、ほろんだ前国主のことなど考えられもしない、といった顔つきだった。伊右衛門にはもともとそういう現金さというか、ごく自然な酷薄さといっていいものがあるようである。



「盛親がどうした」

「いいえ、どうしたでなくて、どうなったのですか、ときいているのです」

「領地召しあげ、位官剝奪（はくだつ）、牢人のうえ、京の柳ノ図子というところに、所司代の監視づきで住まわせられることになる」

「まあ、ご牢人におなりあそばすのですか」

「そうだ」

　伊右衛門はなにか家老へ用を思いだしたらしくあわただしく表へ出て行った。

　翌日、千代はまた、

「盛親どののことですけれど」

と、またきのうの話をむしかえした。

「京の柳ノ図子とやらにお住まいあそばすとか」

「死罪よりましだ」

「そりゃ、そうでしょうけど」

「遠島にもならなかった。身の幸いといっていい」

と、伊右衛門はあいかわらず、この敗将に対してはひどく冷淡だった。

（かわった。――）

と、千代はおもった。

昔は、そういう性格があったとしてもこうも冷淡な言葉を、それもてきぱきと吐きだすような男ではなかった。

いまはそうではない。

――相手は人生の敗北者だ、いたしかたがないではないか。

といった調子である。「ばかだから敗けたのだ」といわんばかりだった。

自分を勝者だと思っている。なるほど勝者にはちがいないが、勝者になりうる能力、器量のもちぬしだ、と思いはじめているようであった。土佐一国、という思いもよらぬ僥倖（ぎょうこう）をひきあててから、どうも伊右衛門は、それ以前の伊右衛門にくらべてすこしかわったようである。

（以前はこうではなかった。以前、この人は、自分が凡庸だと思いこんでいたし、それなりに功名をたててそれなりの加増があるとひどくよろこび、自分は運がいい、それほどの分際ではないのだが、というような謙虚さがあった。いまはそうではない。自分の力でかちえた、と思いはじめている）

男に、出世とはこわい。

分不相応の位置につくと、つい思いあがって人変りのする例が多い。

千代は、念のために、

「盛親どのにくらべて、一豊様は、おしあわせでございましたな」

と、さぐりを入れてみた。伊右衛門は単純にかかってきて、

「それだけのことをした」



と、いった。

「盛親は怠った。それに、あの男の父親は英雄といえるが、かれは親に似ぬ者だ。能がない。土佐をうしなうのもむりはない」

「うしなうのと、得るのとは、たいそうなちがいでございますね」

「そうだ」

「なにが、そう違わせたのでしょう」

「器量だな」

と、伊右衛門はいった。

「天正以来、さまざまな大小名の興亡をみてきた。天は公平にできている。興る者は器量によって興り、ほろびる者は不器量によってほろびる。おもしろいものだ」

「あなた様は？」

「げんに、土佐一国を得ている。千代、天正以来、わしは運がわるかったが」

と、伊右衛門はむかしとは逆なことをいった。

「やっと芽が出た。天はながい目でみれば公平なものだとわかった。というより、故太閤によって見出されなかったわしの器量が、家康殿によって見出された、ということになる」

「盛親殿はやむをえませぬ」

と、千代は話をもとにかえした。

「が、国もとに残されたその家臣どもがあわれです。何万という牢人が、きょうからできたこと

になります。その者どもの一部でも召しかかえてやってくださいませぬか」
「召しかかえる？　とんでもない」
　伊右衛門はいった。
「そのことについては、前にも申したではないか。かれらはそんなあまい連中ではない。わしの入国するのを、刃を磨（みが）いて待っている」
「千代は世間があまい」
　と、伊右衛門がいった。
「おやおや。千代の世間知らずは、ご当家に輿入れしてきた当初からでございますけど」
「叱っているのではない。そこがそなたの可愛いところだった」
　と、伊右衛門は大きな顔でいった。その、なにか贅肉（ぜいにく）のだぶついたような顔つきを、
（いやだな）
　と、千代はおもった。男が自分の技能に自信をもったときの美しさというのは格別なものだが、自らの位階に自信をもった場合は、鼻もちならなくなる。
「千代は所詮は女だ」
　と、伊右衛門はいった。
「盛親に同情せよ、とか長曾我部家の牢人を召しかかえてやれ、などというのは、婦女子の感傷にすぎぬ。感傷では世間の切り盛りはできぬことよ」



「そりゃそうでしょうけど、敗れたひとへの思いやりが、ほんのわずかでもあってこそ、男はみごとにみえるものではありませぬか」
「おれにはそんなゆとりがない」
　と、伊右衛門はいった。
「こころみに勝敗ところを変えてみよ。西軍がもし勝てば、きょうそなたとこんな話をしていられたかどうか。おれは斬首されている。おれの首は、六条河原にさらされ、千代はとっくに大坂で殺されていたにちがいない。それが世間だ」
　さらに、
「いままで、わしは何度か知行地がかわってきた。それらはいずれもすでに平定された土地で、そこへゆくことについてはなんの苦労もなかった。こんどはちがう。きっと合戦がある。独力で土佐へ攻めこんで独力で切りとるのとおなじぐらいの努力を要するだろう。その事態に立たされているおれに、敵方の長曾我部の牢人をやとうだの、盛親に同情する、などのことが考えられたことか。そんなことをすれば、召しかかえた連中は敵に通じ、おれは土佐入部の合戦でやぶれ、せっかくかち得た国の浜でさらし首になるのがおちだろう」
「なりはしませぬ」
　と、千代はいった。
「ご入部なさる前に、京の盛親殿にはそれなりのお手当を送って国もとの家来どもを安堵させ、さらに人をやって、能ある者は召しかかえる、というわさを立て、事実召しかかえてあげれば、

いかに土佐衆が頑迷でも一揆や叛乱をおこすなどの無謀はしないと思います。たとえ一部でおこしても、他の多くの国衆が自分の手でそれを鎮圧するでしょう。きっとそうなると思います」

「女だな」

「おんな、おんなと申されますまい」

千代はさすがに腹が立ってきた。

「いや、おこるな。千代には男どもというものがまだわからぬ。この場合は情でゆくよりも、この上方の土地で諸牢人をめしかかえ、大軍勢をととのえてから威をもって圧する。それ以外に手はない」

「そうかなあ」

千代は、ちょっと微笑し、伊右衛門の再考をうながすような表情をつくった。以前の伊右衛門なら、千代のこんな表情にあうとたちまち自信をなくし、首をひねって考えこみ、やがては千代の考えどおりになったものだが、土佐国主になってしまった伊右衛門には、もはやそれも通じなかった。

伊右衛門は、相変らず、毎日登城しては、井伊直政と相談している。

その翌日、

「どうも、阿波方面からの情報では、長曾我部の家来どもが、盛親に半国でも与えよ、与えねば籠城して新国主に反抗する、と気勢をあげているようです」

と、直政はひどくこまったような表情でいった。



「だから、貴殿は」

と、伊右衛門にいう。

「いきなり入部なさることはおひかえあって、名代として御舎弟の修理亮どのでもまずさしむけられることでござるな」

# 浦戸

土佐浦戸城受けとりの人数が、海路、大坂を発したのは慶長五年十月十七日である。
船は八艘。
紀淡海峡を南にくだった。
乗船しているのは、長曾我部盛親の家老立石助兵衛、それに井伊直政の家来鈴木平兵衛、松井武大夫。
さらに伊右衛門の名代として舎弟修理亮康豊が乗っている。井伊、山内家をあわせて、人数はおよそ二百余人であった。
途中、風浪にあうことなく三日で土佐浦戸湾の沖についた。
「これが土佐ですか」
と、修理亮は、やや青ざめた顔で、眼前の山河をみた。この修理亮は、兄伊右衛門よりひとまわり気が小さい。



「平兵衛どの、長曾我部者が反抗すればこの人数では足りますまいな」
と、井伊家の重臣鈴木平兵衛にいった。
「左様。しかし、盛親どのの印判もござるゆえ、いかにこの国の者が無法とはいえ、合戦を仕掛けるようなことはござるまい」
鈴木平兵衛は落ちついていった。
やがて船団は浦戸の浜に近づいた。このあたり一帯を浦戸というが、浜の名は桂浜（かつらはま）という。みなとはいえ外洋に面し、波が高い。
浜には数百の人間が出ている。それぞれ具足に身をかため、槍の穂を天にきらめかせていた。
やがて長曾我部盛親の家老立石助兵衛は、船から小舟をおろし、ただひとりで浜へむかった。
「やあ、撃つな、立石助兵衛であるぞ」
と、立石は小舟の上で浜へわめきつつ漕ぎよせ、やがてひらりと砂の上に立った。
「大坂の模様、どうじゃった」
と、口々に言うなかを、立石は掻きわけ掻きわけ、
「お城へのぼってからいう。通せ通せ」
とすすみ、浜を見おろす岡の上の城にのぼった。
城の大広間には、すでに家老物頭といった重臣が待っていた。
「いかがであった」
とみないうのを立石助兵衛は答えず、だまって盛親の朱印状を渡した。

「なんと、城を譲りわたせと？」

多少の希望があっただけに、色をうしなった。「馬鹿なっ」と一人が叫んだ。立石はそれをなだめ、こまごまと事情を話した。

「大坂ではことのほか、強硬である。殿の御命がたすかっただけでも、もうけものであったとよろこぶほかはない」

そこは、家老物頭である。立石に事こまかく事情を話されると、理屈ではいちおうはわかった。が、おさまらぬのは、この国で「一領具足」とよばれている連中である。

この連中が、かつては四国全土を征服した長曾我部軍団の中核といっていい。

特殊な武士で、知行地はもっていない。田畑を自作し、免租というだけが特権である。あけくれ武勇をみがき、田に出るときも槍の柄にワラジ兵糧をくくりつけてアゼに突っ立てておき、すわといえばクワをすてて走り陣にくわわる。

具足は一領きりで差しかえのものもなく、馬も一頭だけで乗りかえ馬もなく、ただそれだけで駈けまわるから「一領具足」といわれている。

城下の武家集団とつきあわないため、礼儀や作法もなく、天下の情勢ということも耳にする機会がない。興味もない。たれが中央で将軍になろうとかれらの知ったことではなかった。

かれらが、

「なんの上方侍づれにこの国を渡せるか」

と口々にいいながら桂浜に駈けあつまってきた。その人数たちまち千人以上に達した。



浜の人数がふえてくるに従い、船上の山内修理亮は心配になってきたが、

「なあに、物珍しいのでございましょう」

と、楽観する者もある。

そのうち、浜の人数がどっと波打ぎわまで押してきた。どんどん入って、腰のつかるあたりまで近づく者もある。それがなんと、手に手に鉄砲をもっているのである。

「あ、碇（いかり）、碇をあげよ」

と船頭がさわいだときには遅かった。浜の鉄砲がいっせいに火を噴いた。五、六百挺もあるだろう。それが、詰めかえ詰めかえ射ってくるため、船上の者はばたばた倒れた。

「船を沖へ、船を沖へ」

と、修理亮が叫んだ。安心して浜に近寄りすぎていた。

「頭を出すな。船べりに身を寄せよ。無用の者は胴の間へ降りよ」

と、井伊家の鈴木平兵衛は、手ぎわよく指揮し、やっと船を鉄砲の射程距離外にまで移動した。が、このままではなんともならない。

鈴木平兵衛は、声の大きな男をえらび、それをヘサキに立たせ、浜辺にむかって、

「これは上使であるぞ。天下すでに定まったれば、申しきかすことあり。聞けえっ、聞くがためには、小舟を一艘ずつ漕ぎよせよ、二艘以上はならず、一艘ずつ来よ、されば船べりで申して聞

かせるであろう」
すでに夕刻になっている。
鈴木平兵衛は、夜襲されることを怖れ、八艘の船に焚けるだけのカガリ火をたかせた。
やがて、夜になった。
浜辺から小舟がカガリ火を一つ吊るし、一艘ずつやってきた。
その一艘ずつへ、井伊家の者が船べりから身を乗り出して、土佐の国守がかわったこと、盛親の一命は助かったこと、みな鎮まるべきこと、もし騒げば盛親の一命はないこと、などを説ききかせた。
面倒なしごとだった。
日没からはじめて深夜になっても一領具足をのせた小舟はつぎつぎとやって来、あけがたになってもおわらず、夜があけてからはいよいよとめどもなく、ひる前にやっとおわった。
そのうち、浜辺の人数は五千人を越えはじめている。
「これは、陸にものぼれませぬな」
と、伊右衛門の弟の修理亮がいうと、鈴木平兵衛はおどろきもせず、
「なんとかなりましょう」
と言い、家来を一人、小舟にのせて浜辺に漕ぎやり、付近の雪蹊寺(せっけいじ)という寺を訪ねさせた。長曾我部家の菩提寺である。この住僧の月峯和尚という禅僧が、上下の信望をえているということを、大坂で盛親からきいてきた。



その月峯和尚に調停を頼んだのである。
「やってみよう」
と、月峯はうけあってくれた。
そこで月峯みずから浜辺に降り、
「大将はたれか」
というと、ひとりの壮漢があらわれ、
「一領具足に大将とてはなけれども、それがし、推されて下知をまかされております。竹内惣左衛門と申す者」
「とにかく、上使方と話しあってから、事をきめればよいではないか」
と月峯は理をつくしてなだめ、やっと雪蹊寺で会見することになった。
そこで船からは、上使鈴木平兵衛、副使松井武大夫、それに山内修理亮が家老深尾湯右衛門とともに出むいた。
雪蹊寺での会見では、一揆の一領具足がわはあくまでも強硬で、
「せめて長曾我部家に半国なりともつかわされよ。さもなくば、われら天下の兵をひきうけて百年でも戦い申す」
と言いはるのである。
（こまった国だ）

と鈴木平兵衛はおもった。他の大名家が取りつぶされる場合、重臣さえなっとくすればそれで人数はおさまる。この国はむしろ、身分のひくい一領具足のほうが頑固で、この一揆にも、家老や物頭はくわわっていないのである。だから、鈴木らは、了解を集団に対して得なければならなかった。

交渉は、二日にわたってつづいた。

「半国をつかわす、と申しても、われらには即答できる権限がない」

と鈴木平兵衛がいうと、

「たれにあるのじゃい」

といった調子だった。

「大坂におわす上様にある」

「上様とはたれじゃい」

と、一領具足の代表がいった。

「徳川内大臣家康様である」

「さればその上様なるお人に、ここまで来てもらおう」

という無茶なことをいった。

「上様はもはや天下びとであるぞ」

と鈴木平兵衛は一喝したが、かれらはおどろきもしない。

「ではどうじゃ、その上様へお前様から使いを出しなされ」



と、一揆がわがいった。鈴木平兵衛は当惑し、

「すでにきまったことである」

というと、みな大口をあけて笑い、

「使いを出さぬと申されるなら、おのおのを討ち取ってしまう」

というのだ。

やむなく鈴木平兵衛は、岡七平、田中源左衛門という井伊家の平士を使者とし、いそぎ大坂へのぼらせた。

岡らは、大坂城にのぼり、主人井伊直政に拝謁し、土佐の現状をつぶさにのべた。

直政は事のすさまじさにおどろき、家康まで言上し、くわしく指図をうけた。

そのあと、伊右衛門が血の気のない顔で御用部屋へやってきて、

「どうなっております」

ときいた。

「こまったことが出来(しゅったい)しています」

と直政が説明すると、伊右衛門はいよいよ浮かぬ顔になった。

「どうなりましょう」

「いや、ご心配あるな、かかることもあるかと思い、国境を接する伊予、阿波、讃岐(さぬき)の大名たちにすでに下知してあります。きょう急使を出し、軍勢を国境まで繰り出すよう指図するつもりですから、ご安心あるように」

「拙者はどうすればよろしいか」

「大坂で静まっておらるるがよろしかろう」

「いや、それではあまりにも」

と伊右衛門はいったが、かといってどうすることも出来ない。かれがのこのこと土佐へ出かけてゆけば、

——新国主はうぬか。

とばかりに首を獲られてしまうだけだろう。

「とにかくかの国の一領具足などはどうにもならぬ連中でござってな。こんども話をきくと、新領主はどなた様でござる、ときく。山内対馬守一豊様じゃと当家の者が答えると、そんな名はきいたこともないわ、と大笑するようなしまつで」

「ははあ」

伊右衛門にとって、いずれにせよ、うれしい話ではない。

やがて、大坂へのぼった二人の使者が土佐に帰ってきて、

「御諚は変わらず」

と復命した。

談判は決裂した。

「このうえは、天下の兵をひきいて一戦あるのみ」



と、一揆は気勢をあげ、「新国主山内なにがしが土佐の浜に一歩でも入れると思うならやって来よ」と口々にわめき、雪蹊寺を占領し、境内に急造のヤグラを組みあげ、小屋をつくり、境内への山道の要所々々に柵を結いまわし、サカモギを植えこんだ。

その報が、大坂にとどいた日、伊右衛門は屋敷に帰ってから、千代の前でため息をついた。

「せっかく土佐一国を拝領したが、このぶんでは絵にかいた餅になるかもしれぬ」

「まあ」

千代は、目をみはった。

ひどくうれしそうな顔をしている。

「なんだ、その顔」

「いいえ、このところ、一豊様はお人変りなされたかとおもうほどに、お気がつよくおなりあそばしていましたが、ひさしぶりでむかしの一豊様のお顔を、いま拝見しました」

「千代、思案はないか」

と、ほそい声でいった。

千代はいよいようれしくなった。なにやらこういう気弱な伊右衛門を見ると、

——しっかり、おし。

と肩をどやしつけてやりたくなるような、変な元気がわいてくるのである。結婚以来、ならい性になってしまったのかもしれない。

「お酒をめしあがりませぬか」

千代は、はしゃいでしまった。

「酒どころではない」

「でも、ひさしぶりで、むかし懐しい一豊様にお会い致したのでございますもの。千代のほうが、頂戴しとうございます」

「そなた、飲むのか」

「そりゃ、もう」

と、千代は立って侍女をよび、酒をあたためさせ、みずから台所に立って、簡単なサカナをつくりはじめた。

老女の芳野という者が、

「御台所さまには、なにか、おうれしいことでもおありでございますか」

と不審がったほどに千代はうきうきしていた。

「あるのです」

「まあ、なんでございましょう。そのお福をおすそわけねがえませぬか」

と、せがんだ。老女といっても芳野はまだ二十七歳で、よく笑う女だ。

「さあな」

千代は惜しそうな顔をつくった。

「芳野はひとり身ゆえわからないでしょうが夫婦とはおかしいもの」



「どのように?」

「すこしでも平素と変わったことがあれば、もうそれでうれしいのですよ。たとえば亭主殿のお鼻がきょうは赤いとか、歯痛がよくなられたとか、ひさしぶりでお酒をおのみあそばすとか、他愛もないことが」

「まあ」

芳野は、ちょっとたじろいだ。

「そなたは、亭主をもたぬゆえ、うらやましいでしょう」

と、千代は芳野をからかってやった。

「おうらやましくはございませぬ。お歯の病いがどうしたとか、お酒をどうなさるとか、そんなこと、ちっとも」

「さてさて、芳野は情こわいおなごでありますこと」

簡単な酒肴の膳ができた。

伊右衛門と千代は水入らずでのみかわしながら、

「さて千代、そなたの智恵はどうだ」

「智恵?」

千代は、意外な顔をした。

「なんだ千代、そなたは、智恵をかしてやるから酒をのめと申したではないか」

「ああ、そのこと」
千代は笑いだした。
「智恵と申しますのは、このようにお酒でものんでのんびりなされませ、ということだけでございます」
「なんじゃと？」
「だめだめ」
千代は手をふった。
「古女房には、そのようにこわいお顔をなされてもおどしはききませぬよ」
「そなたが、だますからだ」
「いいえ」
千代は徳利をとりあげ、伊右衛門につぎながら、
「本当なのです。土佐のことは、内府様と井伊殿におまかせなされませ。あなた様は、土佐をやる、という御朱印を頂戴なされたことはたしかでございますけど、土佐に斬りこめ、という黒印つきの軍令状を頂戴したわけではございますまい」
「それはそうだが」
「のんびり、お酒でものんで、太平楽をおとなえあそばせばよいのでございます。いらいらなされていては、お人柄がひどく小さくみえます。しまいに、井伊殿に見くびられておしまいになりましょう」



「そうは申すが、この事態にじっとしておられるか」
「では、一豊様と千代とがふたりで土佐へ斬りこみましょうか」
「そなたは、なにをいっている。もう酔っているのか」
「すこし酔ったかな」
千代は、掌を頬にあてた。
「そなたとふたりで斬りこんで、どうするのだ。やくたいもない」
「そうでしょう？　人数がふたりでも、二千人でもおなじことでございます。やくたいもございませぬ。やくたいもないことを、いらいらあそばすことはございませぬ」
「そうかな」
酒に弱い伊右衛門は、二、三杯のんだだけでもう赤くなっている。
「もっと、ぼんやりあそばして、あの仁はすこしうすのろか、といわれるぐらいのほうが大国の国主に似つかわしうございます」
「そうかなあ」
「もともと」
薄ぼんやりしていたくせに——と千代は言いかけたが、よした。
「まあ、当分は様子をながめてくらすか」
「そのようになされませ」

土佐では、変事がつづいている。

両派にわかれてしまっていた。

浦戸城にいる家老物頭とその家来たちと、付近の雪蹊寺にたてこもっている一領具足一万五千と。

家老物頭たちのほうは、井伊家の鈴木平兵衛のやっきの説得が功を奏して、

「もはや、時勢はなんともならぬ。無用にさわいでは京にある殿のお命があぶない」

というところまで軟化していた。

そこを鈴木平兵衛はさらに説得し、

「一領具足がさわいでも、上方への聞えはいかがでござろう。かれらまた長曾我部家の旧臣ゆえ、土佐が乱をおこしている、とうけとられましょう。そこまでおわかりあれば、いっそ、乱人どもを討ちとられては如何」

浦戸城の重臣らが軟化した、といううわさをきいて、雪蹊寺の一領具足たちは、

「それ、家老どもは腰をぬかしたぞ」

と激昂した。

「どうやら、わしらに内緒で城を明けわたす所存らしい。こうとなってはわしらにあたらしい覚悟が要るわ」

と、十一月二十九日、大軍議をひらき、



「家老物頭の心底、相見えた。かくなる以上はかれらをも討ちとり、上使鈴木平兵衛に腹を切らせ、一国籠城に踏み切るべし」

ときめ、明後日を期して浦戸城攻めとりを決議した。

いよいよ、乱である。

ところが一領具足のなかでこれを、重臣のほうへ洩らす者があった。

おどろいたのは、重臣のめんめんである。

「なにか、手はないか」

と協議するうち、桑名弥次兵衛という若い家老が顔をあげて、

「多少、存念がある。始末はそれがしにまかせてもらえぬか」

と、一同を見た。

桑名弥次兵衛は、軍団の指揮にかけては無双といわれ、その名は、土佐だけでなく四方にきこえている。先代元親が死ぬとき、「わが家、将来事あらば桑名弥次兵衛を先陣とせば破れることなし」と遺言したほどである。

一同うなずき、まかせる、といった。

桑名弥次兵衛の父は、主人盛親の守役で、このためかれは盛親の遊び相手として成人した。盛親に対する愛情は主従をこえたものがある。

(下士どもの軽挙のために殿が上方で殺されるようなことがあってはならぬ)

とつよく思っている。

（計略が要る）

とおもった。奇計を講ずる以外に、このさわぎを食いとめる道はない。

弥次兵衛は家来のなかから刀術に熟達した者十人をえらび、たったそれだけの人数でしかも平装のまま一領具足のもとに出かけた。

弥次兵衛は事前に偵察して知っている。この夜、一揆の主力は雪蹊寺にあり、その大将格八人の者が、雪蹊寺の下の役所で軍議しているはずであった。

「弥次兵衛じゃ」

と、かれは役所の門前でよばわった。「そのほうどもに同腹したい。ついては談合したきことあるゆえ、われを門内に入れよ」

弥次兵衛は、一領具足どものあいだに非常な人気がある。みなよろこび、かれを軍議の間へ案内した。

なかに、八人がいた。

吉川善介、徳井佐亀之助、池田又兵衛、野村孫右衛門、福良助兵衛、蔵岡彦兵衛、下元十兵衛、近藤五兵衛。

弥次兵衛は室内に踏みこむなり、

「ふびんながら、誅を加えるぞ」

とどなるなり、いきなり大剣を薙ぎはらって池田又兵衛の首をとばし、かえす刀で徳井佐亀之助の右肩を袈裟に割り、さらに踏みこんで蔵岡彦兵衛を真っ向から唐竹割りに斬りさげた。



瞬間のできごとである。

他の五人は抜きあわせて弥次兵衛の家来と闘ったが、なにぶん不意をうたれたために腰がたじろいでいる。またたくまに斬り伏せられた。

それと同時に、弥次兵衛の手くばりにより家老物頭の人数一万が雪蹊寺を押しつつみ、火の出るほどに攻めたてた。

激闘のすえ、あけ方になって一領具足方は破れ、四方に散った。攻撃側がうちとった首級は二百七十三で、これを上使鈴木平兵衛は十二月一日、船二艘を仕立てて大坂へ送っている。

その日、伊右衛門の名代修理亮は、やっと浦戸城をうけとった。

土佐が流血のすえ平定した、と大坂できいたとき伊右衛門はよろこび、帰邸するなり、

「千代、やったわ」

と、はしゃぐようにいった。

「やっと？」

「おお、やっとよ。井伊殿の家老鈴木平兵衛がきょう大坂へもどり、西ノ丸でその旨を言上した」

と、事情をつぶさに語った。

千代は、女である。合戦ならともかく、めでたかるべき入国になぜそのように血が流れねばならぬかと眉をひそめた。

「かの国には一領具足というやつらがいる。これは人にあらず鬼じゃな」
と、伊右衛門は一領具足の異様な抵抗をみてそんな印象をもったらしい。
「まさか」
「いや、理をつくし言葉をかさねても受けつけぬ連中らしい。いましばらくはおさまっているが、入部すれば、またまた叛乱をおこすだろう」
「そこは殿様である一豊様のお徳にて撫育なされればよろしうございます」
「そんな上方風の考えが、あの連中に通用するものか」
「どうなさるのでございます」
「わしの武威のほどを見せてやるわ」
と、伊右衛門はいった。
千代は、そんなあらあらしいことをおおせられますな、と何度もいったが、伊右衛門にはじつは恐怖がある。恐怖がある以上、一領具足どもを政治で撫してゆくゆとりなどはなく、刃には刃を、というたけり立った心境になっていて、千代のいうことなど、
といってきかない。
「それはものの理想じゃ」
「兵を動かす者は兵をもって鎮圧する。刃をあやつる者は刃をもって誅す。それ以外に武権を樹(た)てる法がない」
「でも、長曾我部家の旧臣のなかでも、上士の者は当方に従ったのでございましょう?」



「あの者らには理がわかる。従ったどころかかれらの手で一領具足どもを鎮圧している」
「井伊家の鈴木平兵衛殿のやりかたはみごとでありますな」
と千代はそれとなく伊右衛門を皮肉ってみたが伊右衛門には通じなかった。
「それで、家老、物頭などのおもだつ者はどうなるのです」
「至急、国を退去するよう命じてある」
「その桑名弥次兵衛どのも?」
「そうだ」
桑名弥次兵衛はその後、藤堂家に乞われてその家の家老になっている。
そのほか長曾我部家の旧臣でおもだつ者の身のふりかたをみると、例の立石助兵衛は千五百石で細川家、家老十市縫殿助(ぬいのすけ)は二千石で紀州徳川家、同宿毛(すくも)甚左衛門は千五百石で藤堂家、同香宗我部左近は二千石で堀田家、物頭柴田忠次郎は三千石で奥州伊達家、同近藤長兵衛は千五百石で森家、同斎藤与惣右衛門は三千石で徳川旗本、同斎藤摂津は五千石で徳川旗本、同蜷川木工左衛門は千石で徳川旗本、さらに、その他の大名に百石以上の禄で召しかかえられた者は百人以上ある。
とにかく千代は、そういう連中を召しかかえよと力説したが、伊右衛門はどうしても賛成しなかった。
これから入国しようという国の人間に、嫌悪と恐怖をいだいているらしい。
「一豊様は、頑固におなりあそばしたな」

と、溜め息をつくしかなかった。
「齢だ、仕方がない」
「もっとおつむりがお柔らかい年ごろに国主におなりあそばせば、千代の申すことがおわかりくだされるはずでございますのに」
土佐が一応鎮定された、というのに、伊右衛門はなお大坂にいる。
だけでなく、大坂でどしどし牢人を召しかかえては家臣にし、それを船にのせて土佐へ送りこんでいるのだ。
(まるで人買いのような)
と、千代は伊右衛門のやっていることがおかしくてたまらなかった。
幕末までつづいた土佐二十四万石の山内家の家臣団の七割までは、このとき伊右衛門が大坂で召しかかえた諸国牢人である。
十二月に入ってから、千代は、
「いつ一豊様は土佐へお入りあそばす」
と、たまりかねてきいてみた。
「おお、いつでもゆくぞ」
伊右衛門は虚勢を張っていったが、じつはまだ気味がわるいらしい。
「そろそろ年を越しますよ」



「なんの、あわてることはない」
「しかし」
市中のうわさでは、山内対馬守どのは大坂から遠吠えに土佐へ号令している、と町人でさえ笑っているらしい。
「そのようなうわさ、ごぞんじでございますか」
などとは、千代はいわなかった。むかしから千代は、夫についての悪評を耳にしても伊右衛門にきかせたことがなかった。うわさなどという無責任なもののために夫が悲観したり激昂したりすることは、伊右衛門のために害あるのみで益はひとつもない。
「土佐の者は、はやく新国主さまのお顔がおがみたいでありましょうに」
と、いっておだててみた。
「いやいや」
伊右衛門はさすがにうれしがらない。うれしがるほどの齢でもないのであろう。
「おがむどころか、火縄に火を点じて、草むらのあいだからずどんとやりたくてうずうずしているだろう」
「それならこまるけど」
と、千代も、そういわれてみればたってすすめる気にもならなかった。
そのうち、大坂城西ノ丸の御用部屋に詰めている井伊直政が、ある日、殿中をうろうろしている伊右衛門をよびとめ、

「おや、対馬守どの」
と、寄ってきた。
(まだ大坂にいるのか)
といいたげな顔である。
微笑に皮肉をつつみ、
「どうやら、正月は大坂で御内儀のお顔をみながらお迎えなさろうというおつもりのようでござるな」
といった。伊右衛門はかんちがいして、
「いや、妻などと」
と、いい年をして赤くなった。こういうあたりが、伊右衛門の身上であった。
「よい奥方でござるゆえな」
「なんのなんの」
にこにこしている。
「まったく、ここ数年」
と、井伊直政はいった。
「天下は安静ならず、一つ所で妻子と日を送れるゆとりもござらなんだ。われわれとちがい、お内儀お大事の対馬守どののことじゃ、土佐へ行こうとお思いなされても、後ろ髪をひかれる思いなのでござろう」



ここまでいわれて、伊右衛門にはやっと直政の言葉のなぞが解けた。
「いや、お言葉、おそれ入る。十二月の半ばごろには船を仕立てて入国するつもりでござる」
「それは重畳(ちょうじょう)。おみやげ話を、上様(家康)も待ちかねておわす」
伊右衛門は、わきの下にびっしょりと汗をかいていた。
千代は大坂に残った。
伊右衛門が、船がかりをして大坂を発したのは十二月の半ばである。
船団は、泉州、紀州の西岸づたいにゆるゆるとすすみ、紀州有田川の河口で船泊りした。
そこで数日、
「風待ち」
という理由をつけて伊右衛門は動かなかった。
ほどなく土佐方面から一船がやってきて、有田に入港した。
その船に、すでに浦戸城に駐留している弟修理亮からの使者が来、つぶさに土佐の治安状況をのべた。
使者の報告では、まだ不穏だという。
「しばらくこの有田にて待つゆえ、つぎつぎに様子を報らせて来よ」
と、その使者を土佐に帰した。
伊右衛門は、有田港に腰をすえ、はるか海のむこうの土佐の形勢を観望するというかっこうに

なった。

要するに、あまり大坂にながくいては、千代にせきたてられたり、井伊直政から皮肉をいわれたりするから、出かけたふりをして人知れず船泊りをしているのである。

ついに正月になった。

伊右衛門は、船上で賀宴を張り、家老野野村太郎右衛門九郎らの賀を受けた。

酒宴になってから野野村は、

「船上の元旦とは、意外でございましたな」

と、皮肉った。

「わしも意外だった」

伊右衛門はすなおである。

「この年になるまでさまざまの土地で正月をむかえたが、潮風を浴びながら屠蘇酒(とそざけ)をのんだことはない」

「しかも、ゆかりもなき紀州で」

と、野野村はいう。

伊右衛門はうなずき、

「宿縁というべきだろう」

円満に笑っている。

そのうち、何度めかの土佐からの使者が、



「もはやよろしうございましょう」

といったのは、正月も十日になっていた。

おりよく風のぐあいもよかったので、帆をあげて外洋にすべり出た。

船は、二艘である。

大将である伊右衛門の船団としてはひどくすくない。

その上、わざと山内家の三ッ葉柏の紋の幔幕や旗をたてず、ちょっと見には、回船問屋の船のようによそおっている。

——新国主が搭乗している。

ということを気取(けど)られないための伊右衛門の苦心の策である。

三日目の朝、船はようやく浦戸城の下の桂浜に入った。

伊右衛門は船上から目をこらし、陸地の様子をしさいに見た。

なるほど、浦戸城には山内家の旗がおびただしくひるがえっている。

「大丈夫であろうな」

と、野野村にいった。

「なんの、殿はむかしから命冥加(いのちみょうが)におわしますゆえ、かような浜で狙撃されるなどはございますまい」

すでに浦戸城には使いが行っている。

やがて、二千ばかりの軍兵が浜におりてきて、すきまもないほどの警戒陣を張った。

それでも伊右衛門は安心できず、わざと平士の平装に身をととのえ、しかもそれと同じ服装の者を五人つくり、万端ととのえた上で小船にのり移った。

やがて、浜におりた。

砂地をふみながら、

（せっかくの初入国がこの姿か）

と思うと、さすがになさけないような気もした。

伊右衛門は浦戸城に入ったものの、一歩もそとへ出なかった。

「殿、お出ましあそばすな」

と、家老たちが懸命にとめたからである。

むりもなかった。

毎日のように事件がおこっていた。山内家の侍や足軽が路傍で殺され、下手人はつねにわからない。

そのため、家中の者にも私的な外出はいっさい禁止していた。出かけるときには、一隊をなし、具足をつけ、槍、鉄砲をもって出てゆく。

国中みな、敵といってよかった。いつ、草や木が、一領具足に変じて襲いかかるかもしれないのである。

そういう事態のなかで、伊右衛門が城をそとに出かけるとなれば、



――それ、新国主を討ちとれ。

とばかりに国中の一領具足どもがむらがりあつまって野いくさを仕掛けてくるかもしれない。そのため、「山内対馬守様がご入国あそばした」ということは、いっさい秘密になっていた。

（ばかな）

と、伊右衛門はおもわざるをえない。

（おれは国主だ。土佐はおれの国である。であるのに、まるで泥棒猫のように足音をしのばせて入国し、入国後も息をひそめて城内にひそんでおらねばならぬのか）

と、腹だたしかった。かといって、

――無用である。華麗な上方風の行列をつくって国中をねりあるき、野蛮未開の土佐者の肝をうばってやる。

と言いだすほどの勇気は、伊右衛門にはなかった。

（おれは臆病者だな）

と、あらためて思わざるをえない。

むかし、といっても、伊右衛門の長浜時代だが、加藤清正が、はたち半ばという若さで肥後半国を太閤から拝領し、熊本城の城主になった。余談だが、肥後は天下有数の穀倉地帯だから、半国でも二十五万石で、土佐一国とほぼおなじ草高なのである。

ところが、土着の国人の気風は土佐と酷似している。この新領主に執拗に抵抗し、そこここに叛乱がおこって、国中ひっくりかえるようなさわぎになった。

が、清正は大いに奮発し、兵をひきいて国中を駈けまわり、つねに陣頭に立ち、時には一騎討の勝負などをしてまたたくまに鎮圧したばかりか、かえって国人は清正の武勇をおそれ、尊崇し、ついには半神のごとくあがめるようになった。

が、伊右衛門にはそんな芸はできない。まねをしたところで、高ころびにころんで、土民どもの嘲笑をうけるだけであろう。

伊右衛門は、長曾我部時代からある土佐一国の地図、それと、天正検地で長曾我部氏がしらべた各郡各村の草高の明細帳をもとに、家老以下の知行地をきめた。

まず、弱年のころから郎党としてつき従ってきた祖父江新右衛門は、すでに足腰も不自由なほどに老衰していたが、これに千四百石をあたえた。

祖父江とともに、伊右衛門の最初の郎党だった五藤吉兵衛は伊勢亀山の陣で戦死している。そのため弟内蔵助為重を抜擢し五千石をあたえた。

乾彦作には、四千五百石、福岡市右衛門には千石、深尾湯右衛門には佐川郷をあたえ一万石で家老筆頭とした。野野村太郎右衛門九郎には四千五百石、安東左近には幡多(はた)郡宿毛をあたえて七千石、寺村太郎左衛門には四千五百石。前野勘八郎には三千六百石、百々三郎左衛門には七千石。

「それぞれ知行地をすみやかに鎮撫せよ」と、伊右衛門は命じた。家老を一人もおかなかった清正とはちがい伊右衛門はすべて分掌主義をとった。



家老、重臣たちは、それぞれ人数をひきいて、自分の知行地にゆき、鎮撫しはじめた。

伊右衛門の直轄領に対しては、奉行が任命されて鎮撫にゆく。

伊右衛門は、相変らず、城内にこもったきりである。

「いったい、この国の一領具足とはどんなふうな人体(にんてい)の者だ」

と、ある日、筆頭家老の深尾にきいた。

「まず月代(さかやき)は剃りませぬ。山賊のごとくのばし、マゲはあくまで太うございます。刀はおそろしく長大で、ふつう三尺はございましょう。脇差も二尺ほどの大いなるものを帯びております。武勇をてらい、肘張(ひじば)りして歩くさまは野盗と異なりませぬ」

「ほほう」

「着物は、晴着でもツムギか木綿でございます。それに冬は綿をうんと入れ、しかもソデがみじかく、ハカマのすそもみじかく、胴中で西畑という木綿帯をぐるぐる巻きにした姿は、モグラモチとかわりませぬ」

「あっはははは」

伊右衛門は失笑した。

「モグラモチか」

「左様、またかれらの乗っている馬がこれまた小そうございます。犬のようでござりまするな」

「犬」

「土佐馬と申し、地ばえのもので、せいぜい四尺一寸が最大のものでございます。かれらは、わ

れわれの乗っている馬に驚き、あれは馬ではあるまい、なんぞ別な生きものであろうと申しております」
「無智なものじゃな」
「物知らずと申せば、われわれの鞍におどろいているようでござりまする。たとえば梨地の漆塗りの鞍などをみて、この光るものはなんぞ、と申しおるような次第で」
「あきれたものだ」
「おもしろいのは、マゲでございます。われわれ同様ひもにてモトドリを結んでいる者もござりまするが、なかには鹿のツノを輪切りにし、その中穴に髪を通し、それをひもがわりにして澄ましこんでいる男もおりまする」
「なるほど」
「しかし、武勇は、これはあるいはわれわれも及びませぬな。刺撃に長じ、野山を駈けることけもののごとく、しかも死をいささかも怖れず、むしろ死を誇るふうさえみられまする」
「それが厄介だ」
まったく厄介であった。この鎮撫は、自分一代でできるかどうか。
「一領具足の人数はどれほどか」
「ざっと一万でござります」
と、深尾は、ため息とともにいった。
実は、新政第一の施策として、一領具足から侍の身分をとりあげてしまっている。



これがかれらを刺戟しているらしい。
それに、経済問題もある。侍でなくなればただの百姓である。いままでは作りどりをみとめられていたのに、こんどは年貢（ねんぐ）を出さねばならないのだ。かれらにとってみれば、名誉と身分を奪われた上に、生活が苦しくなる。これでは新領主を歓迎するはずがない。
「千代はな」
と、伊右衛門はいった。
「かれらを家来として取りたてよと申したが、一万人の人数を召しかかえれば徳川家に対してどうであろう。普通の軍役の数倍の人数を持てば、あるいは対馬守謀叛をおこすのではないか、と疑われてもしかたがない。そういうことはできぬ相談だ」
「左様でござりまするな」
深尾も、よい智恵もなくぼう然としている。なにやら大規模な叛乱がおこりそうな予感がひしひしとするのである。
さすが、南国である。
早咲きの桜が野山にほころびはじめ、伊右衛門の目をおどろかせた。
そのころになると、国中では、
「どうやら、新国主は浦戸城にきているらしい」
ということが常識になってきた。

しかも、長曾我部武士の百姓への格下げと年貢のとりたてのために国中に不平が充満し、機会さえあればかれらがいっせいに蜂起しそうな気配になってきた。
「蜂起すれば、容赦なく打ちのめす」
という方針を、伊右衛門は軍議のすえ決定している。口頭で言いきかせてもわかる連中ではない、という見方が前提になっていた。
ある日のことだ。
浦戸城の大手門に、新領主非難の激越な文章を墨くろぐろと書いた高札をかかげた者がいる。朝になって番士が発見し、ひきぬいて家老深尾湯右衛門のもとにもってきた。
伊右衛門もそれを見た。
「一領具足めのしわざでござりまするな」
と、深尾がいった。
しかもあきれたことには、普通こういうばあいには匿名というのが常識だが、かれらは堂々と記名しているのである。
七人であった。
(名もかくさぬ)
普通ならばいかにも男らしくてみごとな態度というべきだったが、こういう場合、新領主の心証としてはそれがかえってにくにくしかった。
(底知れぬやつらだ)



と、伊右衛門は真蒼になって、その七人の名前を見つめている。
「いかがとりはからいましょう」
「知れたことだ」
とだけ、伊右衛門はいった。
深尾湯右衛門は、伊右衛門のただならぬ顔色をみて、
――殺せ。
ということだと判断した。
「承知つかまつってござりまする」
と座を立つや、みずから手くばりし、兵千人を動員してその村々を急襲し、七人の署名人をそれぞれの居村でとらえた。
かれらは堂々としていた。
部隊が村を包囲し、矢文を射こんで、
――尋常に出て来い。
と命ずると、どの男も、大剣を脱してゆうゆうと出てきた。
しかも村民が立ちさわぐのを、かれらみずからがおさえたという。
そのなかで、溝淵五郎右衛門という一領具足は身のたけ六尺ちかくあり、肩の筋肉が山のように盛りあがっている。
捕縛にむかった人数がおびえて鉄砲で射ちとろうとすると、

「なぜ捕えぬ」

と、大喝一声し、みずから剣をすて、地上にころがった。

それを折りかさなってとらえると、

「あっはは、とらえたか。土佐者とて鬼ではないぞ。白洲へつれてゆけ」

といった。

この男にすれば、白洲でさんざんに新政を嘲罵するつもりであったのだろう。

ところが深尾湯右衛門はそのまま潮江川の河原へつれだし、取りしらべもせずに首をはねてしまった。

七人ことごとく首になり、河原へさらされた。新政権がいかに反抗者に対して峻烈であるかを、現実のかたちでみせたのである。

伊右衛門は入国早々、浦戸城をみて、

（いかにも田舎じろだな）

とおもった。

武威を四国全土にほこった長曾我部氏の主城であるとはとてもおもえなかった。門、櫓などはほとんどわら屋根で、堀ぎわにも石垣というようなものがなく、土をかきあげた程度のものが防塁になっている。

信長の安土城以来、急速に発展した上方の城郭建築にくらべて、三十年は遅れていた。



（この程度のものでは、もし一領具足が蜂起したばあい、手もなく攻めつぶされてしまう）

「城を築こう」

と、伊右衛門は入国早々宣言した。土佐土着の士民のどぎもをぬくような上方風の城郭をきずき、天守を天にそびえさせ、かれらに新領主の威風というものをみせねばならぬ、と思った。田舎者を圧服させるには、百の言葉よりも巨きな土木をおこすにかぎるのである。

重臣たちはみな賛同した。

第一、この浦戸城では、おおぜいの家臣団を収容するには手ぜますぎた。それにまわりの土地もせまく、城下町をきずくことができない。

土佐はまだ、室町の後期ぐらいの段階なのである。長曾我部の武士団というのは、鎌倉時代のそれのように知行所にそれぞれ住んでいて、軍令一下郎党をひきいて城にかけつけてくる仕組みになっていた。信長以降、武士は城下に住み、合戦があればそのままの体制で戦場にゆく、ということになったが、この国はそうではない。

そのため、主城も小ぶりでよく、城のまわりの都市建設の必要もなかった。長曾我部時代なら、この浦戸城程度でよかったのである。

が、伊右衛門は、そうはいかない。

上方ふうに、国都、国城を建設せねばならなかった。必要上そうなったわけだが、伊右衛門ははじめてこの僻地に現代の先端的なものを持ちこんだことになる。

（まず、地を選ばねばならぬ）

とおもい、家老百々越前（三郎左衛門）をよんだ。この越前は、伊右衛門が土佐拝領の直後に、人をやって召しかかえた者である。

はじめ、織田信長につかえ、本能寺ノ変後秀吉の命により、信長の嫡孫秀信（岐阜城主・十三万三千石）の家老として仕え、家禄七千石役料五千石を食み、合戦、行政ともに長じ、高名の名家老だった。

その百々が、関ヶ原で秀信が石田方についたため、戦後、禄をうしない、京で牢人ぐらしをしていた。

伊右衛門は土佐一国を領するにおよび、それを運営できるだけの行政家がほしかった。

——百々越前が京にいる。

という風聞をきき、井伊直政を通じて家康の内意を得、人をやって仕官してくれるよう勧誘したのである。

百々はきた。齢は五十二。

この武人には、一つ特技がある。水害の多い美濃にながくいたために、治水にあかるいのである。

百々は先遣隊としてはやくから入国していたため、このあたりの地理にもあかるい。

「この浦戸から五里北に、河内（こうち）と申すところがございます。なかなか地相よきところでございますが、いちど、ご検分に参られませぬか」

「城のあったところか」



「いや、土地の故老にききますると、かつて長曾我部元親がここに城をさだめようとしましたところ、排水わるく、雨がふればすぐ水がつくということで、取りやめになったそうでござります。しかし、美濃の土木の法をもってすれば、その欠点をおさえることができましょう」

その翌日、伊右衛門は千人の部隊をひきつれ、相変らず四人の家老に自分とおなじ服装をさせ、新城の候補地という「河内」に行ってみた。

背後、数里の北に四国山脈をひかえ、前面は潮江川にのぞみ、付近は平闊で、中央に小高い岡がもりあがっている。

「あの岡はなんという」

「大高坂山（おおたかさかやま）と申しまする」

と、百々越前はいった。

「あれに築城するのだな」

伊右衛門は、さすが百々越前のめききだけある、とこの土地がすっかり気に入ってしまった。

その岡に登った。

なるほど、眼下に天然の外堀たるべき潮江川がうねり、浦戸湾にそそいでいる。町造りをした場合の商業上の水利もよいであろう。城下町の荷が、そのまま船に積まれ川口に出、大坂へ運ぶことができるのである。

「気に入った」

「それはよろしうございました。昨日も申しましたとおり、唯一の欠点は、雨期に水浸き（みずつき）が出るということでございますが、それは」
と、百々越前は鞭をあげてそこここの地形地物をさししめし、どこに堤を築き、どこに運河を掘り、といったぐあいに説明し、
「されば、まず水の心配はございませぬ」
と、うけあった。
「地名は、河内というのじゃな」
「無用の河川が縦横に走って、年に数度は水つきがあり、四時、土地が湿潤しているため左様な地名になったのでもございましょう」
「河内という名では水難がありそうで縁起がわるい。高知とすればどうだ」
「あっ、これはよい地名で」
と、百々がいった。
「高ク知ル、知るは統治するという意味もあり、つまりよく統治がゆきとどくという縁起よき文字にもなりまするな」
「越前でもそう思うか」
伊右衛門は、自分の想案を新規召しかかえの重臣にほめられてうれしそうな顔をした。
「さればこのあたりを高知とし、国中にも知らせよ」
歩いている。



その伊右衛門の様子をみて、どうやら尿意をもよおしているらしい、ということが家来たちにわかった。
伊右衛門が、ツイと群れから離れるときはそうなのである。奇妙なほど行儀のよい男で、そんなときには、近習（きんじゅう）といえどもついてくることを好まない。
みな、心得ている。
伊右衛門は、ひとり茂みにかくれた。
しずしずと笹の葉をぬらしはじめたとき、不意に目の前にがさがさと物音がして、はっと伊右衛門は腰をひいた。
「――？」
手を刀にかけた。袴のなかで尿がながれ、変にあたたかかった。
「何者だ」
と、叫ぼうとしたとき、巨大な狐が顔を出し、伊右衛門をじっと見つめた。
（一領具足めではなかったか）
と、ほっとし、そのぶんだけ狐に親しみを感じた。それにしても大きな狐である。めずらしく白毛にちかかった。
「お前は、この山に棲（す）む老狐か」
「そうだ」
というふうに、狐は目をそらさない。臆病ときいているこのけものにしてはめずらしいことで

ある。

「おれは山内対馬守というこの国の大名だ。ここに城をつくるゆえ、そのほうどもの穴もずいぶんとつぶされることであろう。わびに稲荷の祠をつくってやるぞ」

というと、狐は、ケーンと声をあげ、身をひるがえして消えた。

高知城の縄張り（設計）が、百々越前の手でほぼできあがった。

本丸、二ノ丸、三ノ丸は型どおりで、とくに岡の下の城下町の設計には心をくだいた。国内繁栄の源泉になるべき町だからである。

町割りの図面もできた。

まず一本、大道路の線がひかれている。本町筋と名づけた。平安京の設計でいえば朱雀大路にあたるものである。

そこを大禄の士の屋敷町とした。

さらに、中島町、帯広町、大手筋の町割りをおこない、ここに中禄以下の士の屋敷をおく一方、商業地とした。

以上はいわゆる「郭中」の町で、いざ籠城のときにはそれぞれの屋敷は、市街戦用の小要塞になるわけである。

ついでこのそとに上町を設け、徒士や足軽その他御小人の居住区とした。これがのちに、北奉公人町、南奉公人町のふたつにわかれる。



ついで、下町を置いた。

下町は、おいおい、郡部から移住してくる城下商人のための町である。のちに浦戸からきた者に与えた区を浦戸町、種崎からの者の区を種崎町、北のほうの山田から来た者の区を山田町、蓮池からきた者の区を蓮池町、とよばせるようになった。

さらに、伊右衛門の旧領の遠州掛川から移動してくる商人のために、掛川町という一区ができた。またおいおい、京から井筒屋宗泉という呉服商が移ってきたりしたので京町、堺からもきたので堺町といったような町もできた。

「すぐ普請、作事をはじめましょうか」

と、百々越前がいったが、伊右衛門はものごとの配慮の多い男で、

「いやいや、公儀にゆるしを得ておいたほうがよい」

と言い、その図面と手紙をそえて井伊直政まで送り、ついで伊右衛門自身その説明をするため、土佐をはなれた。

大坂へ入った。

家康はなお大坂城西ノ丸にとどまっており天下の再編成の大仕事をつづけている。

その夜、伊右衛門は千代とひさしぶりでながい寝物語をした。

「そんなに土佐とはおそろしいところでございまするか」

と、じつのところ、千代も伊右衛門のはなしをきいて想像を越えたところだと思った。

「一領具足というのが、頑迷でな。うかうか家来どもは一人あるきもできぬ」

「おおげさな」
「本当だ」
「上方者は弱うございますものね。一豊様をはじめ奉って……」
「これ」
伊右衛門は千代のももをつねった。
「弱ければ、士卒から身をおこして二十四万石のぬしにはなれぬぞ」
「なるほど、お強うございますこと」
「そなたは、わしをばかにしすぎている」
「そりゃ、太閤様でも北政所様にとってはただの夫でございましたもの。妻の目からみれば、夫はさほどお強いともおえらいとも思えるものではありませぬ」
「損だな」
「何が」
と、千代は、添い寝している伊右衛門の髪をそっとなでてやった。母親が幼童にするようなしぐさである。
「亭主というものはだよ」
「損？」
「そうだ」
「そうでしょうか。これほど、一豊様お大切一途に千代などは思いつめておりますのに」



「こまるなあ」
伊右衛門は髪の上の千代の手をそっとむこうへやった。
「これでも天下の国主さまだぞ。千代のもとにかえれば、なにやら子供あつかいにされるのでいやだ」

翌日、大坂城西ノ丸へ登城し、まず御用部屋をのぞくと、井伊直政が、
「お城の件、御許しが出ました」
といった。伊右衛門は礼を言い、そのあと高知という地名に変えた旨を報告した。
「高知とはよい名でござるな。いずれにせよ対州どのにとってはおはじめての城作り、なにかとご苦労が多かろうと存ずる。しかしお楽しみでもありましょうな」
「それはもう」
伊右衛門は、直政が照れるほどのうれしそうな顔をした。
「上様も、ときどき、対州どののうわさをなされます」
「ほう、どのような？」
「関ヶ原の働き、対州の功は、木で申せば幹である。諸将の功は枝葉である、と」
「かたじけないことでござる」
伊右衛門は、頭をさげた。
余談だが、かといって伊右衛門には天下の武士があこがれるような武功は何一つない。このた

め、幕末にいたるまで土佐藩士は他の藩士に肩身がせまかった。幕末など、土佐藩士は、酒席などで、「貴藩のご藩祖はいったい、どのような御武功で二十四万石を得られたのでござるか」と、きかれることが多い。他藩士もむろん、その事情をよく知っていて、からかっているのである。

　そういうときの土佐藩士の受け答えはこの通りで、型がきまっていた。「さあ、藩祖一豊様のお耳が福耳だったのでござろう」とか「そのときの公方様(家康)が、阿呆にましましたのかもしれませぬな」といって、話をざれごとでそらせてしまうのである。

　さて、御用部屋を出てから、案内されて家康に拝謁した。

　まず、城普請許可の一件のお礼を言上すると、家康はことのほか上機嫌で、

「長曾我部の遺臣もやかましいことでござろうゆえ、なるべく堅固におつくりあったほうがよろしかろう」

　といってくれた。

　雑談になった。

　ふと家康は小首をかしげて、

「それはそうと対州どの。土佐はいったい草高は何石でござったかな?」

　といった。

　伊右衛門はおどろいた。家康ともあろう者が、国を呉れておいて土佐の収穫高を知らぬはずはないと思ったのである。

　もともと土佐の石高というのは天正十六年長曾我部氏の検地では、最初二十万二千六百二十六石と出、それを秀吉にまで届け出た。これが天下の公式石数になったが、あとで多少数字がふえ、四万五千七百石増となり、通称二十四万石といわれている。



　伊右衛門はおそれ入り、

「天正検地では二十万二千六百二十六石でござりまする」

　というと、家康は意外な顔をし、

「まことか」

　といった。

「じつは太閤崩御の直後、わしは伏見の長曾我部屋敷にまねかれたことがある。そのときの接待の善美さ、調度の結構さ、これは五十万石以内ではあるまいと思った。五十万石なりと思ったればこそ、渡海難儀の国ながらも土佐を足下に参らせたのでござる」

(あっ)

　と、伊右衛門はおどろき、胴がおこりのようにふるえた。

(まこととすれば、わしの功名をそこまで重く見てくだされていたことになる)

　伊右衛門は感激して、とっさに言葉も出なかった。

「まこと、それはお気の毒なことをした」

　と、家康はいった。

　家康は、口ひとつで、伊右衛門を二重によろこばせ、二重の恩賞をあたえたことになる。

「千代、うれしいことがあった」

と、伊右衛門は、きょう、殿中で家康と対面したときのはなしをした。

「内府は、土佐の草高を、五十万石はくだらぬ、と思われていたらしい」

「左様でございましたか」

千代は、うれしそうな顔をした。のは、うわべだけのことであった。

(そのようなことってあるかしら)

とおもったのである。家康ほどの人物が、つまり天下を心掛けてきたほどの男が、国々の草高の概略を知らぬはずはない。知らなくてもその幕僚が知っているであろう。伊右衛門に土佐を与えるとき、

——土佐は何石だ。

と、左右にきくはずだからである。

(しかし、ひょっとすると家康殿は、存外抜けたところがおありなのかもしれない)

ともおもったりした。家康にかぎって信ぜられないことではあるが。

もともと、家康の若いころは、土地の物成りを量るのに石高だけではなく貫高や永高(えいだか)をもってしたり、ところによってまちまちだったが、秀吉によってそれが石高に統一された。

だから若い大名や武士は、何石といわれればほぼ見当がつくのだが、家康などのばあい、貫高のほうが理解しやすく、そのため諸国の石高の記憶が十分でなかったのかもしれない。

さらに家康は、東国の人である。東海道から関東にかけての経済地理にはあかるいであろうが、



四国や九州はまったく縁がなかった。

「土佐」

といわれたところで、ああ、讃岐のみなみか、という程度の地理感覚であろう。知らないのもむりはない。

とはいえ、論功行賞は天下をさだめる基盤である。むかし鎌倉の北条執権政府は、元寇ノ役での論功行賞ができなかったために諸国の人気をうしなって崩壊し、建武の中興による公家政治も功ある武士に薄く、公卿、僧侶に厚かったためにくずれ、逆に足利幕府は、功臣に気前よく領国をやりすぎたために大諸侯が出現して幕府の勢威がおちた。

家康はそんなことはよく知っている。むしろ知りすぎているほどの男である。

(土佐の草高をご存じないはずがない)

と千代はおもい、むしろそれをとぼけたということに、家康という男の智恵のふちをのぞきこんだような思いがした。「五十万石ではなかったか」ととぼけることで、ひとりの無邪気な大名を歓喜させてしまっているのである。あの老人にとっては、片言隻句が、徳川家永遠の基盤をつくる土台石の打ちこみになっているのであろう。

「おれは感佩(かんぱい)した」

と、律義な伊右衛門はいった。

「わが山内家のつづくかぎり、徳川家には弓はひくまいぞとおもった」

「ほんと」

千代はにこにこしていった。
「そのとおりだとおもいますわ」
「おれを、五十万石の男だと内府は見てくだされたのだ。これは子々孫々につたえねばならぬ」
(たいした力量でもないくせに)
と、千代は内心おもっておかしかった。
家康は、永遠につづく政権を考えている。それには、加藤清正、福島正則といった力量のあふれた御しがたい駿馬よりも、駄馬ながらも従順で律義な伊右衛門のような男に、大きく期待しているのであろう。武勇よりも、そのくそまじめさにである。世は治世におもむこうとしている。外様ながらも徳川大事と思ってくれるような男を、家康は優遇したい、千代が家康でも、伊右衛門型の男を愛するだろう。

大坂での公務がすむと、伊右衛門ははやばやと土佐に発たなければならなかった。
土佐になすべきことが山積している。いや、まだなにもなされていない。
城作り
一領具足の鎮撫
まずこのふたつであった。
「千代も来い」
と、伊右衛門はいった。



「土佐へ？」
千代はおどろいた。そんなあらくれた山河はごめんだとおもった。
「大坂屋敷にいます」
といってから、ふと、
「京に住もうかしら。京は四季がうつくしいし、人がおもしろいし」
といった。千代は年来そう思っている。世が治まれば京に住んで、京にしかいない知識人や詩人や絵師とまじわり、ひまひまにはあたらしい小袖などをつくって、都の子女に着せてみたい。
「京に？　そなたはばかだな。わしは京を拝領したのではなく、土佐だぞ」
「ああそうでした」
(いやな国を拝領したものだ)
と、千代はわれながらおかしくもあり、なさけなくもあった。伊右衛門のはなしではかの国の国人は武士でもズングリと綿入れなどを着、木綿帯を締め、もぐらもちのようだというではないか。千代にとっては服飾のうつくしい都がいい。
「お供いたしましょう」
やむなくいった。伊右衛門は「当然なことだ」と言い、
「もっとよろこんでついてくるかと思ったのに」
と、なさけなさそうにいった。
それをみると、せっかく力んでいる伊右衛門がかわいそうになり、

「夢にまでみた国ですもの」
と、よろこぶふりをしてやった。
「ほう、夢にみたのか」
「浦戸って、美しいところでしょう?」
「桂浜という白洲の浜がある。岩に怒濤がくだけ散って、なんともいえぬ土地だ」
「ひとは?」
もぐらもちでしょう? と言いかけたが、口をつぐんだ。
「じつは、船に乗ったことがないのです」
「ああ、そうだったな」
それでいやがっているのか、と思い、伊右衛門は安堵した様子をみせ、
「なに、風さえうまくゆけば三日もふらふらになればそれですむのだ。四日目には土佐の山がみえる」
「酔いませぬか」
「そりゃ、酔うさ。めしも食えぬ」
「食べることが好きなのに」
と、千代は悲しそうな顔をした。千代は人なみ以上に大食で、なにを食ってもおいしくてたまらぬほうである。
「ながくて五日だ」



「五日も」
と、千代は大声を出したので、伊右衛門はわらいだした。
「そなたはいつまでたっても子供だな」
「だから、いつまでたっても若くてきれいだといわれるのではありませぬか」
「自分でそう申しておれば世話はない」
「一豊様」
ちょっと、目をすえてやった。
「一豊様はそうお思いにならないのでございますか」
「なにがだ」
「千代がいつまでたっても若くてきれいだと」
「思っている」
「ほんとう?」
「ああ、まぎれもなくそう思っている」
三日後に、千代は伊右衛門とともに大坂木津川尻で乗船し、土佐にむかった。
大坂湾を出るときにはさほどでもなかったが、紀州の山々がみえはじめるころから波が高くなり、船がゆれはじめた。
千代のおそれていたとおりだった。

「あれは、何という島です」
と、指をあげたとき、うっとはきけが胸をつきあげてきたが、やっとこらえた。
「淡路島でございます」
侍女がまっ青な顔で答えた。千代の侍女は多くは美濃うまれの家臣の娘である。親代々海に縁のない血すじの者ばかりだった。
「船というのは、おそろしうございますね。沈まないでしょうか」
などと、朋輩とささやきあっている。
「一生、船などに乗らずに死にたい、と思っておりましたのに」
とつぶやいている娘もあった。
千代も同感である。
(大変なところにお国を頂戴したものだ)
とおもった。
「あの島がきれい」
「友ヶ島というのだ」
と、伊右衛門は教えてくれた。
「しかし、見るな」
「なぜ？」
「見れば酔う。島が動いているように見えるからだ」



「目をつぶっているのでございますか」
「そのほうがよい」
「五日も？」
千代は、うんざりした。
二日目、急に逆風になったので、風待ちをするため、熊野のどこやらの港に入って船泊りした。うんざりするほどに待った。
四日目に、やっと風が出た。船は帆をあげて勢いよく帆走しはじめたが、日が落ちるころにまた船どまりした。もっぱら沿岸の景色を見確かめながらかじをとる航海法であるため、夜は走れないのである。
陽が昇ると、船が出る。
外洋に出るといよいよ波が荒くなり、すわっていてもあやうく倒れかけることが何度もあった。
十日ほどして、土佐の浦戸についた。
「千代、そとへ出てみよ」
と伊右衛門がすすめるので、上へあがり、帆柱のあたりに立ってみた。
(なんと。――)
と目をみはったのは、浜から百そう以上の小船が、それぞれ紅白の吹きながしや、家紋のついた船ジルシを立て、千代たちの大船を歓迎するために漕ぎよせてくるのである。
家臣たちであった。

浜には、鉄砲、弓、槍をそろえた警戒の人数が出ている。
「美しい国だろう」
「はい」
なににしても、もう船から解放されるのだということが、千代にはなによりもうれしかった。
「土を踏みたい」
と、千代がいった。
「その土が、土佐だぞ。さまでいやがることはないのだ」
「そうでした」
「しかも、そなたによって得た、そなたの国だ」
と、伊右衛門が、意外なことをいった。
「えっ？」
千代は伊右衛門の顔を見つめ、
(このひとは、たしかにいまそういった。一豊様らしい、おだやかで謙虚な心をまだうしなっていないのだ)
そう思うと、みるみる涙があふれてきて、海も浜も山なみも一つの青さに溶けかすんでしまった。

千代は、浦戸城に入った。



(ちいさなお城)
とおもった。柱などは、チョウナであらあらしく削りたたいただけのもので、内壁もうわぬりなどはせず、赤土の色をむきだしにしたままのあら壁である。
屋根も、本丸や二、三の櫓だけが瓦ぶきで、あとはかやでふかれていた。
禅院ふうの庭があった。それも京住いになれた千代の目にはどこか田舎くさかったが、それを毎日悦に入ってながめ楽しんでいた長曾我部元親、盛親、それにその重臣たちというものを想像すると存外わるい男たちという感じがしなくなった。骨太で粗野で、しかし豪快な野の男という連想が、あざやかな映像となって千代の胸にうかびあがった。
(かれらを、敵としてしいたげるのはよくない)
と、城のあちこちを見歩きながら、千代はおもった。もぐらもちの一領具足どもにしても、おそらく会えばよい男どもであろう。
「気に入ったか」
「田舎ぶりというのも、わるいものではございませんね」
千代はいった。田舎といっても、千代がうまれた近江や、育った美濃は、いずれも豊かな米作地帯だったし、人々の住いや暮らしも、京に近いために都びている。こうもひどいものではなかったが、田舎ぶりというのもここまでくれば、いっそ傲然と根をおろしている老松の風格をみるようで、それなりにみごとなうつくしさがあった。
「この柱」

と、千代がおもわず声をはなったのは、本丸の心柱（しんばしら）のふとやかさであった。その巨大さにあきれ、これが材木だろうかと思い、

「この柱をくりぬいただけで、人が二人ほども住めそうですね」

といった。

「相変らず、おもしろいことをいう。これほどの檜は木曾や熊野にもあるまいぞ。本山郷というところがあってな、そこに白髪山という山がある。そのあたりが巨材の産地だ。それを伐って吉野川に流し、海上を船で曳きつつ大坂のほうへもってゆけば大そうな金になる」

「その本山郷とやらは、一豊様に服したのでございますか」

「服すものか」

伊右衛門は、いやな顔をした。

白髪山のあるあたりに、北山村という山深い里がある。北山五百石といわれる土地で、米はその程度にはできる。そこにいる郷士が高石左馬助という伊右衛門にいわせれば大曲者（くせもの）で、浦戸城の伊右衛門から家老を派遣して時代のかわったことを告げさせても、

——山内対馬守とは何者ぞ。

とおそれげもなく言いはなち、この土地はことごとくわしのものだ。年貢などは及びもよらぬことぞ、と追いかえした。

「そんなやつのいるところだ」

「どうなさるのでございます」



「いずれ、ゆるゆると攻めほろぼすほかはあるまい」

「この浦戸城によび、言うてお聞かせなされば？」

「来ぬわい」

伊右衛門は憎々しげにいった。「おなじ一領具足でも海べのやつらは話がわかりやすい。山へ入れば入るほど、わかりのわるいのがいる。北山村の高石左馬助などにいたっては、人というより、もはや天狗（てんぐ）じゃな。人の言葉も情けも通ぜぬ」

「そのようなものかしら」

「ただあまり山奥すぎて、おもしろいことに鉄砲は知っていても大筒は知らぬ。三、四挺もってゆき、おどしに射ってみればおどろいて退散するかもしれぬ」

その夜、千代は、

「とうとう、国主様になられましたなあ」

と、寝所でいった。すでに国主ではあるがこうして土佐に入国してはじめてひしひしと実感のわくことであった。

「そうだ」

伊右衛門も感慨ぶかげである。

「そなたとの結婚の夜が思いだされる。あのとき、そなたは、きっと一国一城のおんあるじになられませ、わたくしがお力添えをします、と申したが、正直なところ、夢のようなことで、将来

のことなど霧やかすみのむこうのように思われ、ただ言葉いたずらに、そうだ、そうしよう、といっただけであったが、その夢が、ついにまことになった。そなたのおかげかもしれぬ」
（かもしれぬ？）
千代は、ちょっと気に入らない。伊右衛門はまだまだ増上慢の天狗なのではないか。
「しかし、まだ山坂がある」
「どのような？」
「高知城を築くこと、一領具足を鎮めること、このふたつに、わしは自分に残っている最後の体力気力を傾けねばならぬ」
「まだ山坂がある、ということほど、人の世にめでたきことはございませぬ。気根を揮（ふる）いたたせねばならぬ相手があってはじめて、人はいきいきと生きられるのですから」
「まあそうだ。しかしふりかえってみると、おれもずいぶん長い坂をのぼってきたものだな」
伊右衛門は、ひどく老いふけた声を出していった。
「一豊様、もっとお若く」
「若く？」
「すぎてきた坂など、ふりかえって見おろさなくてもよろしうございます」
「しかし、いい気持だぞ、ふりかえって汗をぬぐうというのは」
「お年寄りくさくて、千代はいやでございます」
「そうかえ」



伊右衛門は考えこんでしまった。
「おれは年をとったのかな」
「お見かけはそうではございませぬが、そのようにいいお気持で溜め息などをおつきあそばすと、お年相応のお顔やお声になります」
「まだ若いのだ」
「そう」
千代は元気よくうなずいてやった。
「ずいぶんお若くていらっしゃいます。うかうか老いこみなさいますと、一領具足が天狗様のようにツッと巨きくなって、一豊様の首すじやお肩をつかみすえますよ」
「そうだな」
伊右衛門は、少年のようにうなずいた。
「それに」
千代はいった。
「お城も、ふけたお心でおつくりあそばすとふけて陰気な、ちぢかんだようなお城ができると思います」
「そのようなものかな」
「うんと若やいだお城をつくってごらんあそばせ」
「千代の小袖のようにはいかぬ」

「でも、千代の小袖も、千代はいくつになっても十七、八の娘に似合うものしかつくりませぬ。千代は一豊様とちがい、いつも若やいでおりますもの」
「申したな」
伊右衛門は、千代を抱きよせた。
眼が微笑っている。
千代を抱いて、自分の若やいだところをみせたいのであろう。

千代はその翌日は浦戸城で休息し、翌々日朝から身支度した。
きっと伊右衛門が、
——千代、高知城の普請場をみせてやる。
と言いにくるだろうと思ったのである。
案のじょう、奥へ入ってきて、
「千代、城外に出るのはこわくないか」
と、得意そうにいった。
「こわくなぞ、ございませぬ」
「言うわ。どの草むら、どの家の格子のなかから、一領具足の筒口がのぞいているかわからぬぞ」
「そのときは、一領具足に話してやります」



「なにを?」
「世がおさまったのだ、と」
「あっはは、千代の言うようなことをきくやつらか。しかしそれほどの心意気があればこわくないであろう。さればいまから高知城の普請場へつれて行ってやるゆえ、すぐ支度をせよ」
「支度はできております」
「なんだ」
伊右衛門は拍子ぬけした声を出した。
「そなたはついてゆく気だったのか」
「そりゃ」
千代は、様子をつくっていった。
「自分の家ですもの」
(いくつになってもお転婆でかなわぬ)
伊右衛門は思いながら、役人をよび、女駕籠の行列を支度するように、と命じた。
千代は、浦戸城の玄関から駕籠にのり、駕籠のまま石段を降り、城門を出た。城門のわきには、すでに伊右衛門の供奉(ぐぶ)の人や千代の行列が待っている。
やがて、伊右衛門がやってきて、馬に乗った。柿色のそでなし羽織に革ばかまをはき、粗末な大小を帯び、まずまず二百石取りの武士の風である。
その伊右衛門とおなじ服装をしているのが数人の家老たちであった。

（こまった臆病者。――）

千代はあきれた。

二里ばかり行ったところに、灘（なだ）という漁村がある。

家々の軒下に、二、三十人の男女が出て下座をし、顔を伏せている。

（これが、土佐人か）

千代にはめずらしかった。そういうつもりでみるせいか、どの顔もひといろのようで、みな似ていた。

（存外、やさしげな顔ではないか）

と思ううち、ひとりの男が目についた。髪を総髪にして無造作にたばね、盛りあがったような肩を前へかがめもせず、ゆうゆうと顔をあげている。

（一領具足だな）

と、千代は思い、とっさに駕籠をとめさせ、あの男を駕籠わきまで呼んでくるように、と命じた。

男は驚いたらしい。

両刀を帯している。その両刀を、鞘ぐるみぬきとって地に置き、小腰をかがめ、しずかに歩み寄ってきた。

（一領具足とはいえ、ちゃんと礼儀はあるではありませぬか）



と、千代は思った。

目鼻だちのはっきりした三十男である。長曾我部時代、このあたりのたばねをしていた男であろう。

「そなたは何と申しまする」

「はっ、水口吾助と申しまする」

「いいお顔をしています」

面魂（つらだましい）がいい、という意味である。

「あす、高知城の普請場にいる百々越前をたよって参られるように。きっとよいことがあります」

やがて普請場のそばで、駕籠がおろされた。駕籠から出て目をあげたとき、千代は息をのんでその場に立ちつくした。

まっさおな天の下で、岡が切りくずされ、土を掘る者、運ぶ者、石垣を築く者、足場を組む者、など一万人以上の男どもが、汗と泥にまみれて、視野いっぱいに動いている。

こんな盛んな光景を、千代はみたことがなかった。

「どうだ、千代」

と、伊右衛門はかえりみた。

「これがおれの城だ」

伊右衛門はうれしいのであろう。ながい侍渡世のなかで、うまれてはじめて自分の城をきずくのである。

総奉行の百々越前がやってきて、立礼した。普請場だからなり姿がすさまじい。尻をおもいきってからげ、真っ赤な錦のふんどしを締めている。

「越前どの、いいものを締めていますね」

と、千代は寄っていった。

越前はもう五十をすぎている。しかし御台所にふんどしをほめられたのにはへきえきしたのだろう、あわてて端折ったスソをおろそうとした。

「おそれ入りまする。普請場というのはみなの気がそろってわっと若やぎませぬと物がはこびませぬ。じゃによって、このようなものを締めておりまする」

越前はこの錦の赤ふんどしで普請場を駈けまわるのだそうだ。

働いている人数の三分の一は、家中の侍たちである。みなモモヒキをはき、腰にひるめしの盛り桶をくくりつけ、土を運んだり、石をころがしたりしている。

若侍などはそこは凝ったのもいて、わざと伊達模様のユカタを着たり、真赤な小袖のスソを切ったものをきたりしてひどく景気がいい。

「越前どの、あの侍どものなかに、もう一人侍を働かせてやってくれませぬか」

「もうひとり、と申しますると？」

「水口吾助という者です。あす普請場にそなたをたずねて参ります」



「はて何者でござりましょう」

と越前が首をかしげた。千代はチラリと伊右衛門のほうを見、くすくす笑って、

「一領具足ですよ」

といった。伊右衛門はおどろいて制しようとしたが、千代は「でも一豊様でなく越前どのにおねがいしているのですもの。直参（じきさん）でなく、越前どのの家来にしていただきます。あの石など」

と指さして、

「一人ででも運べそうなつらがまえをしておりましたよ」

といった。

伊右衛門は閉口し、千代をうしろの木蔭へつれてゆき、

「千代、女の身で、家士の新規抱えのことに口出しなどするものではないぞ」

と、こわい顔をした。

千代は、肩をすぼめ、ふるえるまねをしてみせた。

「なんだ、それは」

「叱られたから、こわがっているのです」

「こいつ、仕様がないな。いまの水口吾助は仕方がないとして二度と相成らんぞ」

「しかし、あのようにして上方からきた侍どもが城作りに働いているのをみて、土地の侍どもはどのような気持で見ておりましょう。きっと悲しがっているか、それともいまにみておれと腹にすえかねているか、どちらかだと思います。たとえ、すこしずつでも土地の者を召しかかえて行

ってやれば、気持がなごむのにちがいありませぬ」

築城については、伊右衛門の性格がまるだしに出ていておもしろい。

諸事、自分の頭脳に自信のないかれは、人の意見を、さんざんにきくのである。ごく素直な性格だから、ひとびとはあらそってかれのために意見をはいた。

最大の問題は、

——大手門をどの方角にむければよいか。

ということであった。

「はて、千代、どうしたものであろう」

と千代にまで相談した。真剣な顔で相談されるから千代も、

「そのようなこと、千代などの女にはわかりませぬ」ともいえず、

「さあ、一両日、考えてみます。でも、他のひとびとにもきかれたのでございましょう」

「いま、みなにきいておる。それが議論百出で、かえって迷うばかりじゃ」

「一斎どのにきかれては？」

と、千代はいった。

「一斎にか」

伊右衛門は、首をかしげた。一斎とはむかし毛利壱岐守吉成と名乗っていた豊臣家の大名である。豊前に二郡を領し、六万石の身上であった。中国の大族毛利氏の毛利ではない。尾張のうま



れでもとは森姓であったものを、中国の毛利にあやかるためにその姓にかえた。秀吉の無名時代から随従し、しだいに立身した。

関ヶ原では石田方に属したため戦後所領を没収され、公儀罪人として子の勝永とともに伊右衛門のアズカリとなり、いまは土佐にきている。

伊右衛門は、世間でも「有情の人」といわれているほどに人情ぶかい。この流人のために千石の捨扶持をあたえ、父の一斎は浦戸城内にすまわせ、子の勝永は郊外の久万に屋敷をあたえて、行動の自由もゆるしている。ちなみにこの勝永はのちの大坂の陣の直前に脱出して秀頼をたすけ、真田幸村らとともに大坂城の七将のひとりになって活躍し、落城のとき自殺した。

「なるほど、一斎になあ」

と、伊右衛門は考えこんだ。公儀罪人に築城のことなどをきいてよいものかを迷っているのである。

「よいではございませぬか」

と、千代はすすめた。一斎はかつて華やかだったころ、秀吉に命ぜられて伏見城の普請奉行になった経験がある。

伊右衛門は、浦戸城内の一斎の居館をたずね、図面をみせた。

一斎はしばらく考えていたが、

「菩提寺を城の北方の山にかまえ、大手門は西にひらかれるがよろしい」

とこたえた。菩提寺というのは名のとおり山内家代々の菩提をとむらうべき寺になるはずだが、

築城のばあいは、これもカラメ手の一要塞として考える。

が、伊右衛門は一斎の案がどうも良案ともおもえないので、築城に一見識をもつ家来の全員から意見をあつめた。さまざまな意見が出た。

が、伊右衛門はなっとくできない。

あるとき、弟の修理亮康豊がすすみ出て、

「いかがでありましょう、菩提寺を南にかまえ、大手門を東におひらきなされては」

と言い、その理由をこまごまとのべた。なるほど、そのほうがはるかに要害であるようだった。

「きめた」

と、あとで千代にいった。千代はうなずき「それはよろしうございました」とお祝いをのべた。じつはこれが千代の案だとは、伊右衛門はのちのちまで気づかなかった。千代はふと康豊にそう言い、

「女の身で築城のことにまで口を出すなどはいかがわしうございますから、康豊殿のお考えとして殿に申しあげなさい」といったのである。

伊右衛門という男が現在の高知市をつくったわけだが、それはまったく土地を造成した、といえばいえるほどの土木工事だった。

なにしろ、城に予定している大高坂山は海抜百五十尺で城郭をつくるにはなるほど手ごろだったが、ふもと一帯は、歩けば腰まで泥のなかに沈むほどの大湿地帯だった。



宿命的な地相なのである。奥地から流れてきている巨大な川が、この岡にぶつかって一つは江ノ口川、一つは潮江川となってそれぞれ浦戸湾にそそぐ。この二つの川のつくるデルタ地帯が伊右衛門の城下になるはずであった。その川がくせものであった。川といっても堤防がなく、大雨がふるごとにはんらんし流れがかわり、いちめんが湖のようになり、やがて干あがると池と湿地をのこす。

「はたしてできるかしら」

と千代もうたがわしくなっていた。一代の英雄といわれた旧国主長曾我部元親もここに築城することにきめたことがあるが、中途で断念せざるをえなくなった。それほどの工事を伊右衛門がやろうというのである。

「長曾我部元親ほどの人でもここでの築城はあきらめたそうでございますね」

というと、伊右衛門は意外にいいことをいった。

「元親ならできまい。利口者はえてして気がはやいものだ。おれは英雄ではないから、この工事はできる」

なるほど伊右衛門には、才気がないかわりにねばりがあった。

治水の経験者である百々越前の意見を入れて、まず江ノ口川と潮江川の堤防をきずくことから伊右衛門は手をつけた。さらにデルタ地帯に運河を掘らせ、湿地の水を海へながした。

湿地を埋めたてるのには、中高坂山という岡を切り崩し、その土を盛りつけた。

さらに、建物のほうの城がある。これを建てるのも大変だった。土佐はもともと瓦ぶきの建物

がまるでなく、そのため瓦が焼けない。瓦ひとつでも大坂から移入して来なければならなかった。
石垣もそうである。土佐の城はほとんど土をかきあげて土居をつくった程度のもので、このため石垣を組む職人がいなかった。伊右衛門は石垣きずきだけのために近江の穴生(あのう)の者を多数よんで土地の者を指導指揮させた。

そういう総指揮をしている伊右衛門のすがたをみて、千代は、

(ほんとうにえらいひとというのは、こういうひとのことをいうのではないかしら)

とあらためて亭主を見なおす思いがした。

ある夜、

「感心しました」

と、正直にいうと、何がだ、と伊右衛門は不審そうな顔をした。このところ毎日工事場に出ているために、土工のように日焼けしている。

「一豊様がおえらいということに」

「ふん」

伊右衛門はわざと鼻でわらった。

「いまごろ気づいたか」

「ええ」

千代も笑っている。

「どういうところがえらいと思った」



「そうですね」

千代は言葉をさがした。

「鈍感なところ。——」

「なに？　鈍感な？」

と伊右衛門は妙な顔をしたが、千代にすればそうとしか言いようがない。利口者なら地相をみただけで、ちゃんと目スジが通ってこれはだめだという。ところが伊右衛門はそういうことがわからないから、ひとに「なんとかならないか」とききまわって案を一つずつこしらえては一つずつ実現してゆくのである。大げさにいえば馬鹿の一得というものであろう。

# 種崎浜

国中の一領具足の叛乱はやまない。
東部がおさまったかとおもえば、こんどは西部に叛乱がおこった。
「幡多郡中村の北のほうで、また一領具足どもがさわいでいるようだ」
と、ある日、伊右衛門は浮かぬ顔でいった。千代は伊右衛門の顔をみてやるのが気のどくになった。かれが土佐に入国していらい、一日として静かだった日がない。
「中村とは、遠いのですか」
「この浦戸から三十里ほど西の土地らしい。長曾我部以前に土佐の国司だった一条氏の居館のあった町だ」
伊右衛門入国いらい、中村千四百石は、祖父江新右衛門にあたえた。新右衛門は、討死した五藤吉兵衛とともに伊右衛門の最初からの郎党である。
「さぞ、新右衛門が難渋していることでございましょう」



と、千代は顔をくもらせた。新右衛門はもはや足腰もさだかでない老人で、あたらしい土地の領主になるにはむりな年齢だった。
伊右衛門はさっそく浦戸から鎮圧のための援兵を送った。十日ほどしてようやく静まり、大将の奥宮弥兵衛をとらえた、というしらせをえた。やがてその奥宮弥兵衛が、縄つきのままで浦戸へおくられてきた。浦戸で首をはねるためである。
「打首」
と伊右衛門は即座に裁決したが、家老たちが進み出、
「打首は軽きに失しまする。いまいちど中村へかえし、四万十川(しまんとがわ)の河原でハリツケにすれば土地の者への見せしめになりましょう」
といった。それもそうか、と伊右衛門はうなずき、されば言うがごとくハリツケにせよ、と命じた。
その日、千代は城の高殿から四方の景色をながめていたが、ふと目の下の山道を追われながらくだってゆく奥宮弥兵衛の姿をみた。
「あれは、なんです」
と千代が侍女にきくと、「中村でむほんをおこした一領具足の大将でございます。この浦戸で打首になるところでございましたがとりやめになり、あの者の故郷の中村へ追いかえされてハリツケになるそうでございます」
(悪いものを見た)

と、千代はおもった。

男は、縄をうたれつつも昂然と山をくだってゆく。べつに悪辣なつらがまえの男ではなく、どちらかといえば義に勇んだあげくのはてがこの姿になったのであろう。

その夜、

「中村の奥宮弥兵衛はハリツケになるのでございますか」

ときくと、伊右衛門は、「そなたはおなごゆえ国中の仕置には耳をふさぎ、目をつぶっていよ」

といった。

「でも、見てしまいましたもの」

「奥宮弥兵衛の姿をか」

「はい」

「これからは見ぬことだ。そのつどそなたに助命を嘆願されては国の仕置がなりたたなくなる」

「でも一領具足をはじめ長曾我部牢人はあわれでございます。いままで田を作り取りしていたのが、こんどからは年貢をおさめねばなりませぬ。もうそれだけでもあたらしい国主を歓迎する気にはなれませんでしょう」

「主家がほろびたのだ。やむをえぬ」

「あの者たちはやむをえぬ、とはおもっておらぬでありましょう。たれでも毎日二度か三度かは食べねばなりませぬ。たべられぬ、となればすてばちになってむほんをおこしましょう。長曾我部家への旧恩がどうのこうのというより、あの者たちがたべられるようにさえしてやれば、国中



はしぜんとしずまるかと思います」

「空論だな、千代のいうことは」

と、伊右衛門はいった。

「でしょうか」

「空論さ。長曾我部の旧臣に土地をあたえようと思っても、一寸の土地もないぞ。すべてわしの家来どもにあたえてしまった」

「だから、上方で家来をおつのりなさるより、せめて半分はこの土佐の牢人をお召しかかえになればよろしうございましたのに」

「かえらぬことを申すな」

伊右衛門が急に大きな声を出してどなった。

「大きなお声」

と、千代は肩をすぼめた。同時に、

(このひとは後悔している)

とおもった。だからこそ、自分の失敗を突かれて腹をたてたのだろう。

「もはやかえらぬことだ。これからをどうする、ということしかない」

「まだまだ叛乱はつづきますか」

「つづくだろう。こっちをたたけばむこうが首をもたげる。きりがない」

「みながたべられるようにしてあげればいいのです」
「またそういう空論をいう。かれらにあたえる土地はすこしもないのだ」
「でも、国中、開墾すればまだまだ土地がありそうではありませぬか」
「そう、それはやらねばならぬ」
「ではその開墾を長曾我部牢人にやらせればいかがです。ひらいただけの土地は永代作りどりにする、ということにすれば、みな励みも出ましょう」
「だから女だ。作りどりということは国主たるわしに一粒の年貢も入らぬということなのだぞ。年貢も入らぬことを奨励できるか」
「欲深じいさん」
「なんだ」
と、伊右衛門はこわい顔をした。
「千代、わしは天下の大大名だぞ」
「でも千代にとってはただの一豊様にすぎませぬ。でしょう?」
「それもそうだが」
「千代が申しますのは、開墾地の年貢などをけちけちとあてにしていては、これだけの大国をおさめる国主様にはなれませぬ、ということでございます」
「はたしてかれらがよろこぶか。開墾々々とひと口にいうが、これほどの難事はない。木を倒し根を掘り土をくだくだけで二年はかかる。道も自前でつけねばならぬ。住む家もたてねばならぬ。物が成るのは二年も三年もさきのことだ。そのあいだ、食わずに働くというわけにもいかぬ。口でいうようななまやさしいものではない」
「でも、さきに希望がありましょう。人々の暮らしに希望をもたせる、というのが国主の政治のかなめどころではありませぬか」
「それでどうなのだ」
「開墾がおわれば、ただの百姓でなく郷士にしてやるのです。一領具足たちはいままで姿は百姓とおなじでも自分は侍だという名誉がございました。一豊様ご入国以来、その名誉をさえとりあげておしまいになったのですから、あの者どもは窮するのあまり刀槍鉄砲をとって叛乱するしかしかたがなくなったのでございましょう」
「空論だな」
一領具足どもはそんななまやさしい手で鎮撫できるものではない、と伊右衛門はおもっていた。郷士などにすれば、かれらは公然と武器を備えることができ、その武器でなにをしでかすかわからない。
「空論さ」
と、伊右衛門はいった。
この千代の空論は、伊右衛門の死後、二代藩主忠義が野中兼山の意見を容れ、土佐山内家独特の制度として実施され、幕末におよんでいる。

伊右衛門は、つねに国中のどこかで起こっている一領具足の叛乱には手を焼いた。浦戸城から、毎日のように鎮圧の軍勢が出発したり帰ってきたりしたが、つゆどきのハエを手で追うようなもので、結局は徒労でしかない。

そのうち、江戸詰めの家士から使いがきて幕府の老中たちが、

「土佐はまだ治まらぬか」

と、うわさしているという。

(これはならぬ)

と、伊右衛門はおびえた。せっかくもらった土佐一国を、仕置不行届き、ということで召しあげられるかもしれぬ、とおもったのである。

ある日、家老どもをあつめ、密議した。

「根絶する手はないか」

と、みなにきいた。どの男も槍一筋で戦乱を生きぬいてきただけのことで、一国を治めるというほどの智恵も知識ももっていない。

「はて、かかるばあい、いかがでございましょう、御台所様のお考えをお聞きあそばしては」という者があった。

「きいた」

と、伊右衛門はいった。

「しかし、開墾をしろ、などと、五年も十年もさきにやっと物が成るような間遠いことばかりを



いう。いまの急場の役には立たぬ」

と重臣たちはうなずくばかりで、さしあたってのよい考えはない。

「ここ一両日中に、みな考えておいてもらいたい。このままでは改易になるかもしれぬ」

「もっともなことで」

と、重臣たちはひきさがった。かれらもせっかく伊右衛門の思わぬ土佐入国によっていい身になれたものの、改易となればもとの木阿弥にもどらねばならぬ。いずれにせよこの時代の武士は主従一蓮托生の共同運命のなかに生きている。

(むりなのだ)

と、千代は、その日、奥の一室でひとりの少年じみた若い禅僧と対座しながらおもった。

若い禅僧——というのは、かつての捨て児の拾である。千代が長浜時代、屋敷の門前ですてられていたのをひろい、わが子として育てた。それがのち千代と伊右衛門が帰依する京の妙心寺の南化国師について得度し、数年修行した。僧名は、湘南という。

千代は土佐に入国してから湘南とはなれているのがさびしくなり、妙心寺につかいをやって老師の南化国師にたのみ、湘南を手もとにひきとったのである。

まだ十六歳である。

一山の住持にするにはすこし若すぎるかもしれぬと思ったが、千代はおもいきって、

「お寺を建ててあげます」

と言い、伊右衛門にたのんだ。伊右衛門もよかろうと思い、しらべてみると城のひがしに吸江(きゅうこう)庵(あん)という禅寺がある。これがさびれて無住だったので築城と並行して再建工事をはじめているのである。山号寺号も、五台山吸江寺とあらため、寺領百三十石がすでに寄進されおわった。

余談ながら、湘南は、のち学僧として知られ、その門下から近世の大儒者山崎闇斎が出た。

「でしょう？」

と、千代はこの少年のにおいをのこしている養い子にだけは、なにごともいえた。

「なんでございますか」

「むりなのです」

「なにがむりなのでございます」

「殿様が、このように大きな国の国主におなりあそばすことは」

「さあ」

若い僧は、返答にこまった。

「せいぜい、掛川六万石がお似合いだったのかもしれませぬ」

若い禅僧は笑って、

「わたくしのような世外の者にはそのような御政道むきのことはわかりませぬ」

「殿様はね」

と、千代はぐちっぽい。



「この国の一領具足たちが力で手むかってくるのを、力で圧服なさるのでございますよ。力で圧服された者は、かならず恨みをのこしていつかは復讐するでしょう」

「でしょうね。しかし、いまの現実ではそれも仕方がないのではありますまいか」

と、湘南は年わかいくせにませたことをいう。千代はうらめしそうに、

「湘南どのも、一豊様とおなじ意見ですか」

「いいえ、お母様と同じ意見です。しかしすぐにはその御意見どおりにはゆきませぬ」

「湘南どの、土佐は毎日のようにどこかの郡(こおり)で領民の血が流れていますよ。わたくしにはながいあいだ、夢がありました。一豊様を一国一城のあるじにして、領民に仁慈のまつりごとをしていただくのだという。ずっとその夢を見つづけて、さて土佐に入りますと、このざまでした。国主が領民を討伐するということがあってよいものでしょうか」

「さあ」

「一豊様は、千代こそ知っていますけれど、武家であれほど情け深いひとはありませぬ。長浜のときも領民がなついておりましたし、掛川のときもそうでした。ところが土佐に封ぜられてからは、がらりとお人柄がお変りになったようです。おそらく、大国をおもちあそばす器量がなく、おあせりあそばして、本来のよい人柄が奥へひっこんでしまったのでしょう」

「さあ、どうでしょう」

湘南は、あいまいに微笑した。湘南は、このようにあらくれた国の統治の最初は武断主義であるべきだと思っている。手むかう者、煽動する者は容赦なく斬り殺して他の領民の見せしめにす

べきだろうと思っていた。戦慄させ、萎縮させてから、おもむろに善政にとりかかればよい、と思っている。

「ちかごろ、物の本を読んでおりましたら、寛猛自在という言葉がありましたが、政治というものはお母様の申されるような寛ばかりではかえって害があるのではありませぬか」

「湘南どの、なま意気なことを申しますね」

と、千代は怒ってみせた。いや、事実怒っている証拠に顔色が赤くなった。

「一領具足どもの暮らしが成り立つようにした上での猛であるべきです。痩せ牢人がなにをさわぐかといった調子での猛はいけませぬ。国に禍根をのこすばかりです。このような一豊さまにするために千代は苦労をかさねてきたのではありませぬ」

「お母様は、夢の多いお人柄であられる」

「一豊様が一国のあるじになっていただくことが、わたくしの夢でした。その夢はまさゆめになりました。しかしそのために領民がくるしんでいるとすれば、この夢はわたくしたち夫婦の我執にみちた立身欲だっただけのことになります」

千代は、伊右衛門のことよりも、自分への嫌悪になやんでいるらしい。

「そりゃ、立身欲もありましたけど」

と、千代は正直にいった。

「でも、それだけじゃない、と自分に言いきかせるところから、すこしはましな自分になってゆくわけでしょう?」



「そうだと思いますが」

「が、なんですか。がはこの場合、不必要でしょう?　ではありませぬか」

「あの、わたくしはまだ年がおさないため、よく答えられませぬ」

と、湘南は困じはてたような顔でいった。

また本山地方で三百人ばかりの叛乱がおこった、と伊右衛門がきいたとき、

「わしがゆく」

と、この男はいった。もはや徹底的に叛徒をたたきつけてかれらに思い知らすべきときがきていると、おもった。

「いやいや、あぶのうございます。おんみずからの御出馬はなりませぬ」と家老たちがとめたが、伊右衛門はきかなかった。このままいくさを家老にまかせて浦戸城にじっとしていることにたえられない。

「わしも腹にすえかねた」

と、伊右衛門はいった。

「それともわしがもはや頽齢にちかいゆえいくさができぬと申すのか」

「めっそうもござりませぬ」

と、家老たちはいった。なにしろ伊右衛門は歩卒の間より身をおこして大大名になった男だ。現役の武将としては、日本でも最古参のひとりであろう。

「されば人数をそろえよ。先鋒は野中玄蕃じゃ」といった。ちなみに玄蕃の養子が、有名な野中兼山である。

　伊右衛門は、いくさをするにあたっては用心ぶかい男だ。敵地の地理を十分にしらべ、間諜をはなって敵情をくわしくしらべ、攻撃方法を何度もねりなおしてからはじめて出発する。

　その夜、千代は、

「本山へ参られるそうでござりまするな」

　とたずねた。

「千代、とめるな」

「おとめなど致しませぬ。しかしお連れあそばすお人数は御当家の家中の者ばかりでございますか」

「おお、そうよ」

「このさい、国中の長曾我部牢人をかりあつめ、御陣の軒さきを貸し、手柄をたてた者はどんどんお召しかかえなされてはいかがでございましょう。きっとかれらはよろこぶにちがいありませぬ」

「国者をして国者を討たしめるのか。千代も人がわるいな」

「どうせ、政治など、人の善い者のできることではありますまい」

　と、千代はふくれた。人がわるい、などといわれては立つ瀬がない。

　牢人救済にもなるし、それに、叛乱をおこしている以外の者はこの陣に参加することによって



新国主に親しみを覚えるであろう。一石二鳥ではないか、と思うのである。

「そうしてみよう」

　と、伊右衛門は国中に布令をまわし、志願兵を募集した。するとおどろくほどの人数があつまってきて、ざっと二千人になった。

　それが、浦戸城の仮り小屋、寺、民家に分宿して出陣を待ちはじめた。伊右衛門はその人数の多さにおどろき、「千代、この人数が叛乱をおこしたらどうなる」といった。

「やむをえませぬ。そのときは一豊様も千代も討死するばかりでございます。しかしそのようなことをお怖れあそばしていてはなにもできぬではありませぬか」

「それもそうだな」

　と、伊右衛門は、二千人を幾とおりにも割って、各家老の手につけた。多くはのちに土佐郷士になった連中である。

　やがて伊右衛門は出発した。

　本山地方は、山岳地帯である。叛乱者はみな山々の要害にトリデをきずき、寄せ手をたくみに近よせては鉄砲をうちかけてくる。鉄砲は巧妙で、山を猿のようにかけまわっては狙撃し、そのつど寄せ手は何人となくたおれた。

　この本山叛乱の鎮圧に伊右衛門は半月かかった。敵を最後には滝山という一峰に追いつめ、その東の高地に千挺の鉄砲をならべ、夜も昼も射ちつづけに射たせ、ついに動く者は十数人という

ところまで確認してから、
「者ども、功名せよ」
と、斬りこませた。伊右衛門も敵陣へのりこみ、息のある者はことごとく斬らせた。
この叛乱がおさまってから、国中はやっと静かになった。伊右衛門は本山から凱旋して千代に、
「当分、しずかになる」
といった。
なるほど、数日はしずかだった。しかし数日たつと高岡郡、安芸郡にばらまいてある間諜たちがもどってきて、どうも不穏の形勢があると報告した。
（きりがない）
と伊右衛門はとほうに暮れる思いだった。
ある日、家老たちを一室にあつめ、
「以前、なにか妙案を考えておけと申しておいた。よい思いつきはないか」
と、きいた。
すかさず一人が進み出て、
「ござりまする」
といった。
「申せ」
「しかしこれは事が秘密を要しまする。この案をお取りあげくださるとも、あるいはお取りあげ



くださらずに相成っても、いずれにしても洩れては一大事でござりまする」
「ほう」
伊右衛門は身を乗り出した。
「どういうことだ」
「殿、おそれながら、この一座のかたがたに親兄弟といえども口外すべからず、というお言葉をくださりませ」
「念の入ったことだ。ではみなの者、きょうの軍議の内容はいっさい口外ならぬぞ」
「殿も、御台所様に申されませぬよう」
「千代にもか」
「はい。なぜならばこの案は御台所様ならきっと反対なされまする」
「千代が反対する？」
と言い、伊右衛門は事の重大さにそろそろ気づいたようである。
「どういうことだ」
「かような叛乱には煽動者というものがおりまする」
（あたり前だ）
と伊右衛門はおもった。
「その煽動者は、多くはその郷村々における武勇自慢の者でござります」
「そうであろうな」

「叛乱一揆をおこせば、大将の顔ぶれというものはほぼきまったもので、その者さえおらねば叛乱などはおこりませぬ」
「であろう」
「されば、その郷村々々のそのようなつわものをことごとく殺してしまえばいかがでございましょう」
「利口なことをいう」
伊右衛門は、拍子ぬけし、あざ笑った。まだ叛乱をおこしていない者を、叛乱をおこす可能性があるからといって殺すわけにはいかないではないか。そのようなことをすれば、伊右衛門は古代中国の桀王（けつおう）や紂王（ちゅうおう）なみの暴虐の君主として後世に悪名をのこす結果になろう。
「暴じゃな」
「しかし、それ以外にこの国を鎮撫する方法はござりますまい。ここ一年で土佐が治まればよし、治まらねば大公儀がだまっておりませぬぞ」
「それでわしも苦慮している」
「殿、ここがお覚悟のつけどころでござりまする。ご思案なされてもらちのあくことではござりませぬ」

提案者がその案を説明した。
「この国の一領具足どもはえらく角力（すもう）が好きでござりまする」



というのが、前置きである。なるほど土佐ほど角力のすきな国はない。この国の若者は、ふたりあつまると酒をのんでいるか、角力をとっているようであった。
武技の第一なのである。余談ながらこの風は幕末までつづいて、たとえば剣術よりも角力のほうが重んぜられたふうがあった。
さらに余談ながら、戦国の初頭から流行しはじめた兵法（剣術）という剣闘の技術は、この僻地にはほとんど入ってきていないといっていい。一領具足どもは戦場ではめったやたらと剣や槍をふりまわすが、べつに法というものがなかった。
平素の鍛練は、もっぱら角力である。郷村での男の強弱の順位は角力でできあがる。その角力の強者が、一領具足の叛乱のばあい、大将なり幹部になっている場合が多い。
「それで？」
「殿のおん名で国中に布令を出し、浦戸城下の浜で角力の大試合（おおよせ）をやり、その勝ち負けによって土佐一国の順位をつける、と申せば、在郷々々のつわものはこぞって参加するでありましょう」
「ふむ」
「かくてあつまってきたところを、鉄砲足軽を伏せておき、ことごとくうちとるのでございます」
伊右衛門はなまつばをのみこみ、だまった。やがて、
「そちは正気か」
といった。

「むごいの」
「左様、むごうござるが、もはやこの手しかござりますまい。これ以上、無策の日々をつづけておれば叛乱はつぎつぎとおこり、敵味方とも人死（ひとじに）がふえ、かえってそのほうがむごうござりまする」
「理屈じゃな」
と、伊右衛門はさすがにうなずきかねている。かれは若いころから戦場に出、半生を血なまぐさく生きてきたが、かといって戦場の格闘以外で人を殺したこともないし、領主としても刑はつねにゆるやかで領民を残忍な目にあわしたこともなかった。
「わしには出来ぬわい」
「殿がお下知をなさるのではござりませぬ。下知はわれわれがつかまつりまする」
と、別の家老が言い、他の者も口々に同じことをいった。というところをみれば、重臣たちのあいだですでにこの案件は協議されつくして、伊右衛門の採択をまつばかりになっているようであった。
「第一、そのような子供だましの手に一領具足どもが乗るか」
と、伊右衛門は、ふんぎりのつかぬ表情でいった。その程度のわなでは、山を走る動物でもかからぬであろう。人というのは、猪や鹿よりも智恵があるものだ、とつぶやくようにいった。
「なんの」
といったのは、深尾湯右衛門である。



「人というものが、猪や鹿よりも智恵があるとはかぎりませぬ。むしろ逆でござりましょう。猪や鹿はゆらい臆病で、わが身をまもることにかけては人も及ばぬ智恵がござりまする。人も、臆病な者ほど智恵が深うござる。しかし人にはけものにないものがござる」
「けものにないものといえば？」
「勇気でござる」
なるほど、勇気とは本能にそむくものであろう。みずからの鍛練や見栄で懸命に臆病をおさえ、勇を発揮する。
「されば勇ある者は智すくなし、と申しまする。おそらく一領具足の勇者どもは、この程度のわなでらくらくとかかりましょう」
「考えておこう」
と伊右衛門は浮かぬ顔で言い、家老たちをさがらせた。その夕、食欲もないままに酒を用意させ、児小姓どもの酌でのんだ。
が、酔うにつれて、児小姓の酌ではおもしろくなくなり、奥へ入った。奥でも酒と膳を用意させ、侍女たちに酌をさせた。
が、おもしろくない。
「膳部を千代の部屋にうつせ」
と命じ、よろりと立ちあがった。侍女らがわき下へ小さな肩を入れた。

「酔った。みな、わしをかついで千代の部屋につれてゆけ」
といった。わっと侍女たちが伊右衛門をかつぎあげた。女の力でも数がそろえばばかにはならない。伊右衛門は、あおむけざまにかるがるとかつぎあげられた。
「さあ、ゆけ」
と、伊右衛門はいった。
侍女たちは、えいや、えいや、えいや、とかけ声をかけながら進みはじめた。
長くもない廊下である。
千代の部屋までそのさわぎがつたわってきて、彼女をおどろかせた。すぐ膝を立て、ツッと小走りに走って廊下に出た。
伊右衛門が、みこしのようにかつがれてくる。この謹直な男にしては、かつてないほどの酔態である。
(どうなされたのかしら)
と、千代は廊下を走った。心配だったからではない。伊右衛門をかついでいる侍女たちのふざけ方があまりに騒々しく、それがいかにもおもしろそうだったからだ。千代は自分もかつがせてもらおうと思った。
えいや
千代はその群れにもぐりこむなり、彼女自身、
えいや



えいや
と音頭をとりながらかつぎはじめた。やがて千代の部屋の前までくると、
「このおみこし、どうするの？」
と、千代は侍女にきいた。
「御台所様のお部屋にかつぎこめ、と申されましてございまする」
「ああそうか。わたくしはお庭の池にでもほうりこむのかとおもった」
「まあ、お可哀そうに」
と侍女たちが笑いさざめいたが、当の伊右衛門はくそおもしろくもない表情で天井をみつめている。
「さあそれでは女神さまの御神殿へ」
と、侍女のひとりが黄色い声をはりあげ、方向をかえてどっと千代の部屋になだれこんだ。ふすまを三つあけた奥の一室までくると伊右衛門のからだはそろそろとおろされた。
「ずいぶん、よいご機嫌でございますね」
と千代がいったが、起きあがった伊右衛門はつるりと顔をなで、
「うん」
と、にがい顔でいっただけである。
「どうなされたのでございます」
「酒」

と、伊右衛門はいった。

千代はだまって杯を伊右衛門の手にもたせ、酒器をかたむけてトクトクと注いでやった。

ぐっ、と伊右衛門は飲みほし、

「千代も飲め」

といった。

「千代も酔え。どろどろに酔うまで飲め」

(おかしいな)

と思ったが、元来、酒がきらいではない千代は、さあそれでは豪勢に酔いましょう、といってたちまち四、五杯をかさねた。

伊右衛門はいよいよ酔い、あらぬことを口走りはじめたので、千代は侍女たちの手前、はずかしくなり、

「そなたたちは、さがりますように」

と命じた。

「御台所さま、おひとりでだいじょうぶでございましょうか」

と侍女の頭だつ者がいった。実のところ、伊右衛門よりもその御台所さまのほうがしたたかに酔ってしまっている。

「千代、おれはやる」



と、伊右衛門はほえた。千代はゆらりと上体を動かし、

「なにをでございますか?」

といった。

「一領具足をだ。わしはあの者どもに負けてはおらぬ。なんの、この山内対馬守の智勇のほどをみせてみごと勝ってやる」

「勝つなどと」

と、千代は目もとをわざとほそめた。

「申されてはなりませぬ。あの者たちは領民ではありませぬか。勝ち負けでいうなら、お領主様がお勝ちあそばすのが当然でございます。領民を相手に勝負などをなさってはなりませぬ」

「ではどうせよというのだ」

「可愛がっていつくしんでやればよろしうございますのに」

「千代はやはり女だ」

理想が好きで観念的である、という意味のことを伊右衛門はいうのであろう。

「女はだめだ」

「そうでございましょうね」

「だめさ」

「はいはい」

「男には智恵があるのさ。わなをつくってけもののようにかれらをわなに追いこみ、一網打尽に

してやる」
と、千代はおどろいた。
「わな？」
「わなはいけませぬ。まるでけものでも獲るように。相手は、人でございますよ」
「そう、人だ。鹿か猪であればどれだけおれはたすかるだろう。人だから始末がわるい。人はけものよりも兇暴で悪がしこいものだ。千代にはそれがまだわかっていない。人の世はきれいな絵空事のように思っている」
「そうでしょうか」
「すくなくともこの国の人間どもにはわなが要るのだ。残忍かもしれぬが、もはやそういうわなを設けて虐殺する以外に治めてゆく方法がない」
「人には子や孫がありまするぞ」
「けものにもある」
「しかしけものには言語がありませぬ。わなをつくって人を殺せばそのことが伝説になり子々孫孫にまで伝わるでしょう。一時はおさまっても、いずれか時がきたときにその伝説で育てられた子孫たちがきっと山内家に復讐をくわだてるでしょう。政事というのはあなた様ご一代きりのものでございませぬ。杉苗を大木にするように百年千年ののちまで考えるべきものです」
「ばかめ、百年千年とか申すが、こんにち、この一豊がほろびるか生き残るかまでに危機がせまっている」



「危機ではないではありませぬか」
「そなたには実状がわからぬのだ。ことしいっぱいでこの国の治安を確立せねばならぬ。でなければ大公儀はわしの封国をとりあげてしまうだろう。それがわからぬか」
「わかっております。しかし、かといって人をわなにかけて殺すことはないではありませぬか」
「もうよい」
伊右衛門はいらいらして手をふった。
「千代は利口なようでも所詮は女だ」
「ずるい」
「なにがだ」
「すぐそのように、女、女と申されて千代の口を封じさせようとなさる」
この夜っきりで、伊右衛門は「わな」のことについて千代にはなにもいわなくなった。千代はむしろ安堵した。あの夜、伊右衛門が異常だったのは、酒がそうさせたのだろうと思っていたし、
（そのようなことができるお人ではない）
ともたかをくくっていた。
が、千代の知らぬうちに、伊右衛門とその重臣団のあいだでの秘密計画はすすんでいたのである。
すでに国中、津々浦々に布令がいきわたりつつあった。国中の角力の勝者をきめるゆえ、在郷

在郷で勝ちぬきたる勝者をきめ、その勝者たちは来月五日に種崎の浜にあつまるべし、ということである。

この布令はたちまち土佐七郡の話題になった。どの郷でもその種崎大角力の選手をよりぬくために角力興行がおこなわれた。

計画は、うまく進んだ。

立案者のひとり家老深尾湯右衛門は、

「いかがでございます」

と、伊右衛門にむかい、やや得意げにいった。伊右衛門もくびをかしげ、

「そのようだな」

とつぶやいた。このように単純なわなに人間ともあろうものがひっかかってくるというのが、むしろふしぎだった。

「男は勇者になりたいものでござりまする。とくにその者が勇者であればあるほど、左様なものでござりまするよ」

「左様なものかな」

「まず、殿は高見からごらんあそばしていますように。それがしがうまくとりはからいまする」

と、深尾湯右衛門はいった。

やがて、直轄領や家老以下の知行地からの報告がまとまって千人ほどの「勇者」がすでにえらばれた、といってきた。



千人は多すぎる、と深尾湯右衛門はおもい、

「さらに郷中で勝ちぬかせ、二、三十人にまでしぼるように」

と下僚に命じた。

その計画は、千代には知らされていない。だからたまに城外へ出て角力の現場をみたりするときも、

「土佐の角力はまるで喧嘩のような」

とおもしろくそれを見ているのみであった。

このころの土佐の角力は、押し、張り手というのがやたらに多く、巧緻なわざというものはない。

びしゃっ

といきなり相手をなぐりつけ、ひるむすきに、押して押して押しまくるという角力風景が多いのである。

なんと殺伐な、とおもうのだが、男の筋肉がはずみきったすがたというのは、見ていてわるい光景ではない。

ある夜、なにげなく、

「ちかごろはどの村でも角力で大変でございますね」

と伊右衛門にいったものである。伊右衛門は、そのようだな、ととぼけてみせた。

「きっと合戦がなくなったので、一領具足のあらくれどもは力のもってゆき場所がないからだろ

う」
「そうにちがいありません」
千代はむしろうれしそうにいった。あたらしい支配者からみればよろこぶべき現象だった。
「一豊様のご奨励でございますね」
「まあそうだ」
「たれの智恵でございます」
え？　と伊右衛門は千代の表情をぬすみ見たが、どうやら深い意味はなさそうだと安堵し、
「深尾湯右衛門らの智恵さ」
といった。
「よろしうございましたこと。どうやらこの国にも安らぎがおとずれてきたようでございます」
「そうだな」
伊右衛門は、元気のない声でうなずいた。
さらに厳選、ということで国中大いに沸き、ついに七郡の代表選士は七十余人にまでしぼられた。
場所は、予定どおり種崎浜である。
当日になった。
「きょうはなにかあるのですか」



と、千代は浦戸城の奥で、その朝、侍女のひとりにきいた。城から見おろすと、はるか種崎の浜に幔幕がはりめぐらされ、人がしきりと往来しているようなのである。
「さあ、なにがあるのでございましょう」
と、侍女も知らなかった。
家老たちの配慮で、いっさい奥の者には知らされていないのである。
伊右衛門がおれば伊右衛門にききたいとおもったが、あいにくきのうから、高知へ築城指揮に出かけていて不在だった。
そのうち陽が高くなり、やがて太鼓の音が浦々にひびきはじめた。
「角力の興行ではございませぬか」
と侍女のひとりがいった。
千代はなるほど、とおもった。七郡から選士をえらんで最強の者をきめる、というのはきょうなのか、と気づいた。
(一豊殿はそのことは申されなんだな)
というのがやや不審だったが、問いただすべき当の伊右衛門がそばにいない。
(なぜ、わたくしにだまっていたのだろう)
と、千代はそのことに、多少の不安をもった。見物にゆこうか、と思ったりしたが、それこそ伊右衛門のゆるしをえねばならない。第一、伊右衛門が臨席しない席に、千代のみが出ることはできまい。

（すると、稽古だろうか）

とおもいなおしたりした。

そのころ、城内の一室で、家老深尾湯右衛門は具足、陣羽織に身をかためて、さまざまな下知をくだしている。

伝令が、種崎浜とのあいだを何度も往復していた。

「もう、だいぶあつまったか」

「十七、八人はあつまっておりましょう。それぞれ浜のよき場所に陣どり、家の幔幕をはりめぐらし、試合前の稽古をしているようでござりまする」

「気づいてはおらぬな」

「そのようでござりまする」

「他愛もない連中だ」

深尾湯右衛門は、ほっとし、こわばった顔をすこしだけゆるめた。やがて浜の人数はおいおいにふえ、その旨が刻々深尾湯右衛門のもとに報告された。

「早う、御行司を差遣わされよ、とやかましく申しておりまする」

という旨が報告されたのは、朝も八時ごろである。

「待たせておけ」

と湯右衛門は言い、鉄砲組の十人の組頭をよび、よいか、ぬかるでないぞ、出発せよ、と命じた。かれらは無言でうなずいた。



城門の内側には、槍組の足軽二百人ばかりが、行司役の吉沢左兵衛とともにいる。

それらが隊伍を組んで城山をおりはじめたのは、朝も九時前であった。

浜では、人数がそろった。

みな、六尺ふんどし一本の大はだかで、真っ黒な肌を陽に焼かせている。

「おそいのう」

と、行司の遅参にじれて不平を言う者もあったが、大部分はおとなしく待っていた。もともと時間などはない国で、このまま、あすまで待たされても別段の不平も言いそうにない連中が多かった。

浜のまわりに、草がしげっている。

やがてその草のあいだに鉄砲足軽が出没しはじめたが、かれら選士たちはひとりも気づく者がいなかった。

浜に異変がおこったのは、朝も九時をすぎたころである。

浜のまわりの丘、林、草むらに五人、十人と鉄砲足軽があらわれ、それらが木蔭や山ひだを這いすすみつつ浜を包囲しはじめた。

七十余人の一領具足たちは、稽古をする者、足を左右かわるがわるに高く揚げて四股をふむ者、弁当をつかう者など、さまざまな動作をしつつ浜に群れていたが、いずれも衣服大小をつけず、すっぱだかであるということで共通していた。

「火縄のにおいがする」
　と、かれらのひとりが言い、それがきっかけでかれらはまわりの景色に注意しはじめ、やがて見えかくれする足軽の姿に気づいた。
「われわれを撃とうとするのではないか」
　と、何人かが叫んだが、まさか、と言う者が多い。
「まさか、このめでたい日に左様なことはすまい。行って、たしかめてくる」
　とかしら立つひとりが、まわし姿のまま丘にのぼろうとした。丘の中腹に草むらがある。
　その草がかすかにそよぎ、一条の煙をたてたかとおもうと、轟然と火を吐き、その男は腹をうちぬかれてころがり落ちた。
「すわ、はかられたぞ」
　と、浜の七十余人はさわぎ立て、四方に走り、大小をとりにゆこうとしたが、そのときにはまわりの風景がいっせいに白い硝煙をあげ、火を噴き、浦が裂けるかとおもうほどの轟音がつぎつぎとひびき、浜の砂はたちまち血で染められた。
　最初の一斉射撃で四、五十人が斃れた。
　つぎの射撃で十数人が斃れ、残る者はいっせいに波うちぎわに走り、海を越えて対岸の浜へ泳ぎわたろうとした。
　その対岸の浜から、四、五十艘の小舟が、足軽を満載してあらわれ、波間にただよう一領具足を船上からつぎつぎに射ちとめた。



時間にすればほんの十分たらずのあいだのできごとであった。虐殺はすべて無言でおこなわれた。
　虐殺の仕上げは、槍組の足軽によっておこなわれた。かれらは現場に駆けこむや、死骸と重傷者の区別なく突き刺してまわり、たんねんに殺した。
　すべてが死体になりおわると、浜の一ヵ所にあつめられ、首をおとされた。
　その首は、浦戸にはこばれた。
　浦戸には、すでにおびただしい数の梟首台（きょうしゅだい）がつくられている。その台の上に、七十いくつの首がさらされた。
　すべて作業は迅速に機能的にはこばれた。
　浦戸に罪状をかいた高札が立てられた。
　罪状は、謀叛の罪である。「謀叛をはかり庶人のわざわいをなし候につき死罪」という意味の文章が書かれ、いちいち、村名と姓名がしるされた。なるほどその名のほとんどはかねて新国主に対し不穏の態度をとり浦戸城に登録された注意人物であったが、そうでない者もあった。付きそいの子供までが殺されていた。
　千代がこの惨事を知ったのは、銃声がきこえて一時間ほど経ってからである。
　銃声がきこえたとき、
「何事ですか」
と侍女を走らせて表の間に詰めている家老の深尾湯右衛門にききにやらせたが、湯右衛門は千

代の横槍が出ることをおそれ、

「鉄砲猟をしておるのでございましょう」

と返事をした。

が、猟にすれば鉄砲の数が多すぎた。ついに侍女を現場に走らせた。侍女が走りついたとき、首のない死体が散乱していて、なにもかも事がおわったあとだった。

侍女が、千代に報告した。

千代は、気をうしなった。

千代の意識は容易に回復しなかった。奥は大さわぎになった。医者がよばれた。手当のすえ千代は意識をとりもどしたが、口をきかなかった。

——狂われた。

といううわさが立ったほどであった。たれがどう申しあげようとも、御台所様はじっと臥床したまま、返事をしないのである。

(これが、すごろくでいえばアガリだったのか)と千代は、胸中、くりかえしくりかえしそのことをおもった。

結婚以来、いわば千代は人生を一場のゲームのように思い、夫を立身させることを楽しんだ。夫の立身そのものが楽しかったのではなく、夫を立身させるその工夫や張りを楽しみとしてきた。それは十分におもしろかったし、しかも成功した。



(が、その成功とはこれでであったか)

とおもうのである。

伊右衛門は、千代の作品といっていい。千代以外の女性を妻にすれば伊右衛門は一国のあるじどころか、小城のぬしにもならなかったであろう。

伊右衛門は単に千代に作られたおかげで、その素質、力量以上の地位を得た。その地位を得たとたんに、千代は単に御台所様となった。

山内家は、ぼう大な組織になりすぎ、千代と伊右衛門がきりまわしていたむかしのようにはいかなくなった。

家老だけでも七人もいる。それらが議決執行機関になり、山内家は組織で動きはじめた。国政家政は、「表」と称するそういう組織の手で処理され、千代は「奥」と称する国主の家庭の主宰者だけの存在になった。山内家は千代がつくったものだが、もはや千代の手から離れて動き出し、千代は無用の存在になっている。

種崎事件について千代が、なんの相談もうけなかったのはなによりの証拠であった。山内家に関するこれほどの大事件で、千代があずかり知らなかったことがかつてあったであろうか。なかった。こんどがはじめてである。事件が勃発し、銃声がきこえ、その音に千代はおどろき、侍女を家老のもとに走らせ、

「あれは何事ですか」

ときにやらせたときも、家老は「猟でござりまする」とうそを教えた。山内家をつくりあげ

た千代に対し、なんということであろう。

「女は政治にかまうな」

と、家老ごときがいったのと同然である。その山内家を二十四万石に仕立てあげたのはたれであるか、と千代は叫びたかった。

が、それはよい。

千代は山内家がこうも巨大になった以上、出しゃばりたくなかった。

問題は、こんどの事件である。そういう天道にもないことが国主山内一豊の名によっておこなわれた。

家老どもはそれが政治だと心得ている。そういう陋劣(ろうれつ)で残忍でしかも人間の歴史のつづくかぎりわすれられることのない手段をつかってまで二十四万石の安全を保障せねばならぬものであろうか。

政治とは多岐(たき)なものだ、と千代は知っている。さまざまな手段がある。土佐の不服士民を鎮撫するのにもっと方法があろう。それを信じられぬほどのわるい手段でかれらはおこなおうとした。

無能なのである。

伊右衛門もその家老たちも。

だから千代はおもった。なんのために自分は営々としてこの「作品」をつくりあげてきたのか、と。



高知城の築城現場からかえる途中、伊右衛門は、

「御台所さまがご気鬱のご様子でござりまする」という報告をうけた。

なにぶん夫婦のあいだのことだから、

「理由はなんだ」

とはまさか家来に問うこともならず、千代の気鬱の理由を馬上であれこれと考えていた。

(種崎の一件を、千代は知ったな)

どうやらそう思わざるをえない。そうであるとすれば——と伊右衛門はわきの下に冷汗の出る思いがした。

種崎の虐殺を恥じたわけではない。あれはあれで仕方がなかったと思っている。最良の方法ではなかったにしろ、しかし土佐のような他国人に不寛容な国人を統治するばあい、あの程度の弾圧は避くべからざる政治手段であろうと思っていた。

(千代にはわからぬことだ)

それはそれでよい。

問題は、千代をあざむいたことだった。

かつて伊右衛門と千代の歴史になかったことである。若いころから大小となく千代に相談し、とくに関ヶ原前夜の山内家の舵(かじ)は千代によって決定されてきた。

ところがいまは、千代はまったく除外されているといっていい。千代に相談せぬばかりか、こんどの事件などは千代の手前をつくろい、千代をだまして決行した。

(千代にわるい)

と、気のよわい伊右衛門はおもっている。

(千代は、憤っているだろう)

と思うと、正直なところ薄気味わるくもあり、浦戸城に帰る気がしなくなった。

が、行列は城門に入った。

伊右衛門は表の書院に入ると家老の深尾湯右衛門をよび、種崎事件の報告をうけた。

「首尾は上乗でござりまする。あれで悪謀をくわだてる者は根こそぎにほろんだでございましょう」

と、深尾湯右衛門はいった。

「国中への影響はどうだ。事件にふんがいしてまたまた叛乱をおこそうとするうごきはないか」

「ございませぬ。どの村もぴたりと静まりかえっておりまする」

「まことか」

「まことでござりまする。叛乱には指揮者が必要でございます。その指導者が死に絶えた以上、手も足も出ぬのでございましょう」

「それは重畳だ」

と、伊右衛門は深尾湯右衛門の労をねぎらってから、急に小声で、

「奥はどうしている」

ときいた。が、深尾湯右衛門は表役人だから千代の機嫌まではわからない。



「さあ、よくは存じませぬが」

と、これも小声で答えた。

伊右衛門は奥に入り、そこで奥を取りしまっている春日野という老女をよび、千代の機嫌をたずねた。

春日野は、ずるい。

「殿様おんみずから、おたずねあそばすほうがよろしうございましょう」

といって、答えなかった。

やむなく伊右衛門は廊下へ出、ゆるゆると渡って千代の部屋に入った。

「千代、ただいま帰ったぞ」

と、声をかけながら、侍女がふすまをあけるのを待った。

侍女が、ふすまをあけた。

香のにおいがした。

千代は上座からくだり、部屋の片すみで上体を伏せ、しずかに頭をさげている。

「からだが、わるかったそうだな」

「いいえ、いっこうに」

その夜は、千代の部屋でとまった。

伊右衛門のみるところ、千代はひどく無口になっていたが、機嫌がわるそうでもない。

（さほどでもないな）

と、心の片すみでほっと安堵した。ただ千代の表情に、いつもの明るさがうしなわれている。まつげを伏せたときなど、泣いているのではないか、と思われるほどに濃いかげができた。

食事をおわり、膳部がさげられたあと、伊右衛門は思いきって、

「種崎の件、きいたか」

と、きいた。

千代は、はい、と声をたてずにうなずき、目をうつろにした。

「仕方がなかったのだ」

と伊右衛門はいった。

「やむをえなかった。思いきってやってみたところ、結果はよい。あれで国中が戦慄し、国主の権の重さを思い知ったようだ。千代、考えてもみよ。叛乱と討伐をくりかえしていれば人死(ひとじに)はきりもなく出る。種崎で一網打尽にしたためにこれで流血はなくなるのだ」

伊右衛門は、そのことをくりかえしくりかえししゃべった。

千代はしまいには、

「おなじことばっかり」

と、笑ってしまったほどであった。

「千代がなっとくせぬからだ」

「なっとくしています」



「おお、なっとくしてくれているのか」

「ええ、一豊様は馬鹿でいらっしゃるということだけは」

と、小さな声でいった。

伊右衛門はあきれた。

「わしがばかだということをなっとくしたのか」

「仕方がございませんでしょう?　これほどの大国の国主におなりあそばす御器量がなかったのだ、と千代もあきらめました」

「ば、ばかな」

「一豊様のご家老衆もそうでございます。せいぜい掛川六万石の所帯をきりもりするだけの連中が、にわかに大国の運営をせねばならなくなったのですから、領民がさからえばもう突く斬るの方法しか考えられないのでございましょう」

「千代、口が過ぎるぞ」

「されば千代をお殺しあそばしますか」

「これ、千代」

「千代がさからえば千代を殺す、それがあたらしい山内家のやりかたでございましょう。一豊様、どうぞ」

と、千代は婉然(にっこり)とわらった。

「千代、なにをいう」

「深尾湯右衛門らにもそう申されませ。湯右衛門らの妻女がさからえば鉄砲で殺せ、子が口ごたえすればそれも殺せ、と。それが山内家の家風であると」
「妻子が殺せるか」
「領民もおなじでございましょう。国をおさめるのは家をおさめると同じ精神だということを古聖賢は申しております。妻子を殺すに忍びなければ領民を殺すこともおやめなさるべきでした」
「千代、もういうな」
伊右衛門は、泣きそうな顔になった。千代が目をそむけたくなるほど無能な表情だった。
「申しませぬ。ただ、わたくしども夫婦の半生の努力が、結局は土佐の領民の命を奪う結果にしかならなかったのか、とおもうと、なんのためにきょうまで生きつづけてきたのやら、悲しかったのでございます。しかしもう申しませぬ。申しても詮ないことでございます」
「おれが馬鹿で無能だからか」
「早く申しますと、左様なことになります」
と、千代は苦笑した。



# あとがき

この長い物語も、そろそろおわりにちかづいている。
このあと、千代と伊右衛門の夫婦のうえにさほどの変化もなく日月がすぎた。
変化といえば、慶長八年の初秋に竣工した高知城のことであろう。
竣工した、といっても、三ノ丸はまだ依然として掘鑿工事や道路普請がつづいており、ぜんぶができたわけではない。しかし城郭の主要部分ともいうべき本丸と二ノ丸はみごとにできあがった。
伊右衛門の入城は、慶長八年八月二十一日におこなわれた。
入城行列に参加した人数はざっと三千人、みなびびしく礼装して浦戸から高知までのあいだを練った。
伊右衛門は馬上、長えぼし、大紋のすがたで馬を打たせた。千代は金蒔絵をほどこした女乗物でゆく。

城下に入って、潮江川に白堊（はくあ）の影をおとす天守閣を見たとき、
（ご亭主どのも、この大城のぬしになられたか）と、さすがに感慨がふかかった。
入城の日、城内で賀宴がはられた。本丸の大広間だけでなく、二ノ丸のあちこちに紅白のまんまくが張りめぐらされ、武士たちは下されものの酒に酔った。
日没後、宴は果てた。伊右衛門は奥にひきとり、千代とともに休息した。
「本日は、お城普請はやばやと出来（しゅったい）し、おめでたきかぎりに存じまする」
と、千代は折り目をつけて丁寧にあいさつをした。伊右衛門もすでに平装に着かえているが、膝をただし、
「ともどもに祝着（しゅうちゃく）なことでござる」
と、答礼した。
そのあと膝をくずし、台所役人に命じてきょうの酒宴の残りものを持って来させ、
「千代、ただいまよりそなたと水入らずで直会（なおらい）の夜宴を張ろう」
と、杯をあげた。
千代も今夜は心ゆくまで酔ってみたいとおもった。
「千代、大望がはたせたな」
と、伊右衛門はいった。
「なにごともそなたのおかげだ」
「うれしいことを申されまする。一豊様のご武勇、ご才覚、ご運があったればこそでございます」



「そうだ、と言いたいが、わしには左様なものはあまりなかったようだ」
「ご謙遜を」
と、千代はからかうような目で伊右衛門をみた。いや本当だ、と伊右衛門は鼻を鳴らし、にがっぽく笑った。
「しかし一豊様はお律義なことでは日本一でござりましたな」
「どういうことだ」
「婚礼の夜に言いかわしましたこと」
「ああ、あれか」
伊右衛門は、ゆっくりと手をあげて酒にぬれた口もとをぬぐった。
「なるほど、あれはまもったな」
千代のほかに女を近づけぬ、ということである。ただひとり、織田家の将校だったころに甲賀うまれの女とあやまちをおかしたことがある。しかしそのようなことはことさらにここで白状することもないであろう。
そのほか、ついに侍女にも手をつけず、妾も置かなかった。このような例は、日本中の大名小名のなかで、まず伊右衛門ひとりであろう。しかも千代にあとつぎがうまれぬ、という条件下で、伊右衛門は愚直なほど千代との約束をまもってきた。
「なるほど、それは偉業かもしれぬな」

と、伊右衛門は、あまりうれしくもない顔で、ボソリと答えた。

高知城の本丸と二ノ丸ができあがったあとふたりには、なお仕事がのこっている。

養嗣子忠義の結婚であった。

忠義は、国松の元服名である。江戸屋敷で成長し、すでに数えて十二歳になっている。

「忠義に嫁をめとらねばならぬ」

と、伊右衛門がいいだしたのは、本丸竣工の直後である。

ふつうならばまだまだという年齢だが、養父の伊右衛門がすでに五十代を過ぎようとしていた。早く縁組をきめておかねば、伊右衛門自身がどうなるかわからない。

「千代はどう思う」

と、この水入らずの夜宴のときも、伊右衛門がいったのである。

「千代とわしとでつくった二十四万石だ、一代で取りつぶしの目にあってはかなわぬ」

(ひととは強欲なものだ)

と、千代はぼんやり考えた。一代できずいた身代は一代かぎりでほろぼせばよいのに、晩年になればいよいよそれを永世にのこそうという気持がつよく動くようであった。とくに大名稼業というのはそうであった。家がほろべば、家臣は禄をうしなって路頭にまよう。この稼業に関するかぎり家をつづかさねば、伊右衛門の創業は成功したといえないのである。

そのため伊右衛門は、江戸にいる重臣たちに命じて、年ごろの姫をもつ大名家をしきりと物色



させていたが、なかなかころあいの家がない。

「そうですね」

と、千代は考えるふりをした。実のところ千代にはすでに考えがあったのだが、なぜかその案を口に出す気持がおこらなかった。

が、いまは酔いに乗ってそれを言ってみようとおもった。

「もともと、この山内家二十四万石というのは、いわばころがりこんだ僥倖(ぎょうこう)で、下普請のよいかげんな建物のようなものでございます」

「なるほど」

と伊右衛門はうなずいたが、あまりうれしそうな顔ではない。伊右衛門の器量からいえばひろいもののような二十四万石だと千代はいうのである。伊右衛門自身、心の片すみでそう思っているだけに、これには苦笑している以外ない。

「大名の家には四種類あります。まず徳川将軍家の御家門の家。これは大名になるだけの十分な理由がございましょう。家で申せば、下普請も堅固で、材木の木ぐちも結構なものでございます。少々な風にもたおれませぬ」

「ふむ、それで?」

「ついで、徳川家の創業をたすけた譜代功臣の家。これも、右と同様でございましょう」

「三番目は?」

「古い名家でございます。東国の佐竹氏、薩摩の島津氏などは関ヶ原では西軍に与しましたが、

それらの家が源頼朝以来数百年の伝統があるため公儀でもその取りつぶしを惜しみ、寛大な処置をとられました。ひとつには地生えの大名ゆえ、いざ公儀が攻略するとなると領国の山川草木までふるい立って抗戦するゆえ、それをわずらわしいとして温存なされたのでございましょう」

「四番目は？」

「肥後の加藤家、芸州の福島家のように豊臣以来の出来星大名ながら、当主が英雄豪傑の評判をとっている家でございます」

「わが家は、どうだ」

「そのどれにも属しませぬ」

と、千代は笑いだした。伊右衛門もつい吊りこまれて笑い、「なるほど、天下にわが山内家ほど根の薄い家はないな」といった。

「されば、この縁組は、自儘になさるよりも、いっそ公儀に願い出、公儀にとりきめてもらうほうが、多少の根が生えるようでよろしいのではありますまいか」

「そこまでせねばならぬか」

と、伊右衛門はさすがに不快な顔をした。養子の嫁を、公儀にすがってさがして貰う、なんともみえすいた、はなもちならぬ公儀への甘ったれであり、おべっかではないか。

千代も、言いだしたものの、われながらこの案が不快であった。しかしすでに二十四万石を得てしまっている。維持せねばならなかった。それを維持するには、一個の人間としての自尊心を売



りはらう度胸が必要であった。

「ご不満ですか」

と、千代は、すの壺を傾けて鼻をつまみひと息にのみこんだあとのような複雑な顔をした。不快や不満にかけては伊右衛門におとらない。が、それを懸命にこらえているのである。こらえ性もなくぬけぬけと、

——そこまでせねばならぬか。

と言う伊右衛門の無責任さに、腹が立った。

「大名なのです」

と、千代は小さくいった。溜め息が出た。

「ただの武士ならば、意地も張りも自儘もゆるされましょう。しかし大名におなりあそばした以上、忍ばねばならぬことがただびとよりも多うございます」

多少とも誇りのある人間ならば、当節の大名稼業ほどつらいものはない。

肥後の加藤清正は、自尊心のつよすぎることで、その半生、ひとと争ってさまざまな事件をおこしてきた。しかしいまは、徳川家の機嫌をとるために品川に壮麗な江戸屋敷をつくり、

——清正はすでに野心はもたぬ。本来なら軍事費として貯えておかねばならぬ国費をこのような造営物に惜しげもなくつかっている。

というところを見せた。また名古屋城築城の手つだいを命ぜられたとき、おなじくお手伝いを命ぜられた福島正則が、

——こうお手伝いをつぎつぎと命ぜられては国費がもたぬ。このたびはことわろうと思う。

とこぼすと、清正は、

「家を保とうと思うならばだまって従うことだ」

とさとした。世は秩序の時代に入っている。戦乱のころなら武勇ひとつで自立も出来、自尊心を守ることもできるが、秩序立った時代に入れば、大名の一つや二つは、江戸の高級官僚の口ひとつでつぶされてしまうのである。

「もし山内家をつづかせたいとおぼしめしならば、左様になされますように」

と、千代も清正のようなことをいった。

「おれはあまかったのかな」

「さあ、どうでございましょう。しかし人間としてのほこりや自儘をまもろうというおつもりならば、いまただちにでも国境いをとざし、城の堀を深くし、塀を高くあげ、天下に宣戦を布告する、というお覚悟をおきめなさるべきだと思います」

そんなやりとりがあって、忠義の嫁さがしの方針がきまった。伊右衛門は江戸詰めの家老に飛脚を出し、

「公儀にお世話を願いあげるように」

と命じた。

この伊右衛門の願いを受けた江戸幕府の官僚たちは、山内家の可愛らしさに感じ入り、さっそく候補者をさがした。



徳川家の一族である松平隠岐守（おきのかみ）定勝に一女があり、阿姫という。

それがよかろうということになってその旨を家康に言上すると、

「わしの養女にせい」

といった。家康としても、外様大名を婚姻政策によって徳川家との縁を濃くすることが、徳川中心の体制を確立する上でもっとも重要であった。

阿姫はまだ十歳である。

阿姫は十二歳になった。

慶長十年の十月、忠義との婚儀を江戸で取りおこなうことになったが、この年の九月二十一日、国もとの高知城本丸で伊右衛門が倒れた。

場所は、書院である。

ひどく冷える朝で、夜明け前から霧が立ちこめ、このため城内は夜が明けてからも燭をともさねばならなかった。

その前夜、伊右衛門はいつものように千代の寝所でやすんだが、朝、目ざめがいつもよりおそかった。

「どうなされました」

と、すでに身じまいを終えていた千代が伊右衛門の枕もとにすわると、

「いや、どうもない」

と、ゆっくり身をおこした。千代をふりかえって微笑した顔が、少年のように紅かった。

「お熱があるのでございますか」

と、にじりよってひたいに掌をあててみたが、さほどでもなかった。

「頭が、すこし痛いな」

「お風邪を召されたのでございましょう。きょうはおふせりなされませ」

と、すぐ侍女をよび、典医をよぶように命じた。典医がきた。

「お風邪でござりまするな」

と、診断した。

が、伊右衛門はいまから表書院に出て家老たちを引見せねばならなかった。阿姫との婚礼のことにつき江戸屋敷詰めの乾十左衛門が戻ってきているのである。その報告をきき、婚儀の支度などについて家老たちと相談せねばならなかった。

「あすにおのばしあそばしたら？」

と千代はいったが、伊右衛門は、いやすでに今朝会うと申し伝えてある、起きる、といってきかなかった。自分の家来に対してさえ、伊右衛門は律義だった。それだけが取り柄といっていい殿様なのである。

伊右衛門は、表書院に出た。

すでに家老たちが集まっており、伊右衛門の着座を待って評定がはじめられた。伊右衛門はおだやかに評定を聴いていたが、やがて顔に険ができた。瞳が、上に移動しはじめ、遠目からは白



くみえた。家老たちはなおその異変に気づかず、評定をつづけた。かれらがようやく気づいたのは、伊右衛門が小さくうめいて、その場にうつぶせてからである。

「うっ」

小姓が背後から伊右衛門を抱き、家老たちもむらがって、そのまわりをかこんだ。

典医がきた。

「お抱き申しあげて、御奥へ」

と、典医は病人の移動を命じた。これが伊右衛門の病状を悪化させた。

奥に運ばれたときは、伊右衛門はすでに意識がなかった。

昏睡している。

千代は、はた目にも見ぐるしいほどに取りみだした。

「なおりますか」

と、典医にむかって、何度も叫んだ。しかし典医にも即答はできなかった。

「きょういっぱい、お脈がござりますれば、あるいは」

と、意味もないことをいった。

霧が晴れはじめていた。

伊右衛門の脈が絶えたのは、その日の正午である。

典医は伊右衛門の手首をにぎっていたが、やがてはなし、千代にむかって平伏した。

「ただいま、おかくれあそばされましてござりまする」

千代は伊右衛門の顔をのぞきこみ、すぐ顔をおおい、声をあげて泣きはじめた。千代は遺骸を抱いた。ゆり動かそうとした。まるで卑賤の農婦のような、身も世もない慟哭のしかたであった。

（わたくしどもの長い一生が終わった）

と、千代は哭きながら、思った。

伊右衛門は天文十五年のうまれだから、その最後の年齢はかぞえて六十一になる。千代は五十歳で、寡婦になった。

伊右衛門が息をひきとったあと、千代は城内の仏間にこもり、髪を切った。

そのまま、仏間が、千代の部屋になった。

伊右衛門の遺骸は真如寺で火葬され、日輪山に葬られた。戒名は、大通院殿心峯宗伝。千代はこの日から見性院という法名にかわった。

伊右衛門の死はすぐ江戸に報ぜられ、ただちに山内家の家督は忠義がついだ。

その忠義が、江戸から行列を練って初のお国入りをしたのは、翌年の春である。

千代は、城内大広間で対面した。

対面をしながら、その大広間のすみずみを千代は、はじめて見るような目でながめた。家老たちがいる。が、その家老たちはすでに伊右衛門の家老ではなく、忠義の家老であった。千代にはかれらが別人のようにみえた。

（時勢がかわった）



とおもわざるをえない。

この土佐を去ろうと決意したのは、このときであった。伊右衛門のいない土佐には、なんの未練もない。

千代は、この年若い二世藩主に通りいっぺんな訓戒をあたえたあと、

「対馬守殿に、無心があるのです」

といった。

「なんなりともおおせくださりますように」

と、忠義はいった。

千代は、京に住みたい、いそぎ京に屋敷をつくってくれますように、といった。

忠義はおどろいてとめたが、千代は微笑してゆっくりとかぶりを振り、

「もう、わたくしの仕事はおわったのです」

といった。これからは京の春秋をたのしみ、唐織などを手に入れて好きな小袖でもつくって余生をおくりたい、といった。

結局、千代のいうとおりになった。

伊右衛門の死後二年目の慶長十一年、千代は伊右衛門とともに数年を送った土佐を去り京に移っている。

京の桑原町に新邸ができた。千代の退隠生活がはじまった。

二世忠義は、伊右衛門とちがい大酒家で、その性格も南国の王にふさわしい剛腹な男として成

長した。あるとき、京の二条城で将軍の宴にはべったあと、帰路、日ざかりでひどく暑かった。忠義は大肌ぬぎになり、乗物の上にまたがって市中を練って帰った。沿道の市民はその放胆な行儀にあきれたが、笑えば斬られることをおそれて、ひたすらに土下座をした。

千代は、この忠義が三月に一度は自分に手紙を送ることを命じた。あるとき、それがとぎれたとき、つぎのような叱責の手紙をかいた。

「京や伏見のべつな方には、ずいぶんお使者が見えているようですが、わたくしの屋敷には去年の七月以来、飛脚ひとりおよこしにならぬのは、なにかお気に召さぬことでもおありですか。とにかく、決して粗略にしたのではない、というお言葉さえきけば、わたくしもこれから先、どれほど生きるかわかりませんが、すえたのもしく満足です」

こういう叱責をおくるあたり、千代には、土佐二十四万石は自分がつくったのだというほこりが、厳としてあったのであろう。

千代は、元和三年十二月四日、伊右衛門と同年の六十一歳で、他界した。

「ずいぶんと、おもしろく生きてきました。しかし、すこし疲れたようです」

と、小さく言い、その言葉を最後に、目を閉じた。そのまぶたはついにひらかなかった。

雪がはげしく降る夕だったらしい。



# 解説

永井路子

「功名が辻」は、司馬さんの書いた長編小説のうち、珍しく女性を主人公にした作品だ。では、どうして女性を書く気になったのか——などということを、正面きって作者に聞くのはヤボというものである。

それに、そんな聞き方をして、御本人が、まともに本音（ほんね）を吐（は）くことはまずない。それが作家というものだ。もちろんウソをつこうというほどのはっきりした意識はないにしても、そのあたりのことは、かえって自分では言えないものだし、また聞きてとか、そのときの雰囲気で、答のニュアンスも違ってくる。そんなとき、スパッと一言で言ってくれるのは第三者である批評家だ。むしろ作家自身ではっきり言うような人がいたら、それは作家としてはおそろしくキメの荒い人ではないだろうか……。

などと考えながら、実は、私はこの原稿を書くにあたって、そのヤボをあえてやってみた。大阪の司馬邸へ電話をかけたのだ。ついでに言っておくと、司馬さんは私にとって大先輩である。以前司馬さんと寺内大吉さんがはじめた「近代説話」という同人誌があって、中途から仲間入りさせてもらった。ただそれだけの御縁で、考えてみれば、以来数回しかお話したことはないのだ

が、大海は細流を選ばず式に、寛容に迎えてくれる司馬さんのことだから、こっちは何だか特別親しい大先輩のような気がしてしまう。そこで失礼をもかえりみず、電話をかけた、という次第なのである。

司馬さんは折よく在宅しておられた。

「そうやなあ」

ヤボな電話かけてきよったわ、と思われたかもしれないが、それでもかなりの時間を割いて、「功名が辻」の周辺を語って下さった。もちろん、それは予想にたがわず、ズバリ一言ではなかった。いや、むしろ、ほわほわとしたあれこれが司馬さんらしくて、たいへん楽しかったのだが、今ここでそれをくりかえすのは、ますますヤボというものであろう。いささか解説めいてまとめるために、私自身が、その中から、この作品について再確認したことを書かせていただく。

司馬さんの心を揺すぶったのは、主人公、山内一豊夫人、千代の戦国時代の人間としての生きざまのおもしろさであったようだ。女性を書くからといって、特別これまでの作品の系譜と異るものではない。そこに流れているものは、当時の人間のおもしろさに対する、司馬さん独自の好奇心である。

戦国時代には、それまで歴史の表面にはかつて登場しなかったような人間が次から次へと出て来る。司馬さんは、それらの人々を、「土民型」と規定している。このあたりが司馬さんの発想のおもしろさであろう。たとえば男なら秀吉をはじめとして、加藤清正、福島正則。今までの上流階級のしきたりとか教養とは全く無縁の所から登場して来る、明るくたくましい人間たちを司



馬さんはこう呼ぶわけだ。これを女に求めるなら、秀吉の正室、おねねとか、前田利家の妻のおまつがこれに当る。彼女たちは、お市の方とか家康の正室、築山（つきやま）殿などとは全く別の土壌から生い育った。そして、山内千代も、やや出自（しゅつじ）は異るにせよ、この「土民型」「農民型」に属するおもしろさを持つ、と司馬さんは言う。

この捉え方は、たいへんユニークである。だいたい小説書きにとって、それぞれの人間に対する興味などということは言わずもがなのことであって、それがあるからこそ小説を書くのである。問題はその先で、どんな発想で、どんな人間の彫り方、のみの使い方をするかということだ。ここで一群の女性を「土民型」と規定したところに、名彫り師たる司馬さんの起点がある。

この期の女性の話をするとき、司馬さんはよく、小身時代のおねね、おまつを引合いに出す。そのころ、二人の家は隣どうしだった。お互を隔てるいかめしい塀のようなものもなくて、ただ、うこぎの垣を境にして、よくおしゃべりをしていたらしい。そのころ庶民は、うこぎの芽をつんで茶のかわりに飲んでいたというから、垣そのものも、全く実質本位のものだったわけだ。

そんなことを話す時の司馬さんの口調は、全く屈託がない。語り口が何とも絶妙なのである。おねねとおまつが隣どうしに住んでいたこと自体は、特ダネでも何でもなく、以前から知られていることなのだが、司馬さんは、それを、

「うん、いま僕があそこを通ったら、二人が立話しとったわ」

とでもいうふうに語るのだ。背後から、井戸端会議――いや垣端会議に熱中している二人の、健康な笑い声が響いて来るような感じがする。「戦国時代の女性」とか、やれ、高台院（おねね）

やら芳春院（おまつ）などという、いかめしい肩書きから解放された、なま身のおんながここにいる。聞いているほうは、

――おや、この二人は、そんなに新鮮な、おもしろい人間だったのか。

と眼をこすりたくなる。

司馬さんの描く人間は、みな、こんなふうに肩書きから解放されて、のびのびと歩きはじめる。それは「功名が辻」におけるヒロイン、千代の場合も同様である。

もっとも、彼女の場合は、おねねやおまつとはいささか出自も違うし、背負わされている肩書きも違う。だから、司馬さんは、彼女には、又彼女なりの照明のあてかたをしているようだ。

*

さて、いままで主人公を「千代」として私は書いて来た。司馬さんの小説にもそう書いている。が、彼女の名前は、「おまつ」だったという説もある。もちろん司馬さんは、それを承知の上で、「千代」を取られた。どうでもいいような事だが、これについて、

「おまつではどうにもならんので」

と司馬さんは言われた。いわゆる「土民型」といっても、地べたに吸いついた農婦型ではなく、そこにいささかの知性のひらめきのある女性を描こうとした司馬さんの用意は、こんなところにも現われているのであろう。

そういえば彼女は、近江の生れということになっている。骨太な尾張女であるおねね、おまつ



とはいささか違う。都に近いせいもあって、近江人はどこか垢ぬけた利発さを持つ。千代は多分に近江人的な軽快な知性の持主であったようだ。

彼女の両親については、たしかな事はわからない。父は若宮友興といい、浅井家に仕えていたが、千代がまだ幼いころに戦死した。千代はその後、母とともに流浪の生活を送り、伯父にあたる美濃の不破氏に身をよせた。この伯父が織田信長に仕えていたので、同じ家中の山内一豊と結ばれることになったという。

一方の山内家は美濃の小豪族で、信長とは対立関係にある岩倉の織田氏に仕えていたが、信長に攻められて主家はほろび、一豊の父も戦死した。以後しばらく流浪の生活を続けた後に、一豊は織田信長に仕えたのである。

いわば同じく戦災孤児的な運命に巻きこまれた二人である。秀吉とおねねのような階層からみれば、やや程度は高いが、それなりの苦労もつきまとって成長して来た二人が、結婚するところから小説は、はじめられる。

だから二人の新生活への出発は、財産もなければ、しっかりした親もいない若者の――いわば、いつの時代にもどこにでもいるような、その意味では現代にもありそうな新婚生活である。ただ違うのは、彼らが常に戦いに隣りあわせていたことであろう。

一豊についても、司馬さんは、やはり「土民型」と考えておられるらしい。この「土民型」の反対は「狩猟型」で、信長のように、あたりかまわず鉄砲をぶっ放して鮮かに疾駆してゆく男がこの典型である。これに比べれば、一豊の生き方は、まことに地味で、「土民型」と呼ぶにふさ

わしいかもしれない。けれども、同じ土民型といっても、ただ力づくで鍬をふりあげ、木の根を掘りおこしてゆくようなタイプではない。文中で、司馬さんは、秀吉の口を借りて、こんなふうに一豊を評している。

「大豪の士でも、戦場にのぞんで雑兵首ひとつとれぬことがある。ところが山内伊右衛門（一豊）は、百姓が田を耕してゆくようなたしかな働きをする。その働きには大功がなくても、あれはあれで尋常なものではない」

ただ、こうした人間は、戦国乱世には、ともすれば霞んでしまう。それをどう浮上させるか、そこに司馬さんは千代の知恵を調味料のようにふりかける。

戦国の男のならいとして伊右衛門は、男が男であることを表現するには功名しかない、と思っている。それを知って千代はしきりと夫を励ます。

「そうでございますとも、あなたはご運のいい方でございますもの」

そのころ一豊は信長軍の中の秀吉の部隊に属している。といっても秀吉はまだこのとき、さほど頭角をあらわしているわけではない。先輩の柴田勝家、丹羽長秀といった有力部将がたくさんいる。むしろ、新興の小勢力にすぎない。が、千代は、夫がその配下に入った以上、それこそ願ってもない幸運だというふうに言い、家来たちにも、夫の前でそう言わせる。そう思わせることによって、夫の気持に張りができるからである。そうした千代の心づかいによって、一豊は、せいいっぱい働き、まるで暗示にかけられたように、運を開いてゆく。

こういう描き方をした場合、悪くすると、当の女主人公は、ひどく小利口な、いやな女になってしまう。それを、司馬さんは、独自のやわらかな筆で、ちっとも悪感情を起させないように描きあげている。いつぞや新聞の企画で、この千代について対談したとき、

「ぼくがあの作品を書こうと思ったのは、むしろ、千代という人が、好きじゃなかったからでね。あんなかしこそうな女、嫌な奴だと思っていた。が、書いているうちに、たいへんおもしろくなった。第一、一豊という夫が、すっかりいかれてしまっている。とすれば、いかれさすだけの何かがあったのだろうと、まあ、そういう興味が出て来てね」

と言われたことがある。

これも司馬さん独自の表現で、そのまま額面どおりにうけとる事ではないかもしれないが、ここに、司馬さんらしい、主人公に対するふくらみのある視線のあて方があると思う。司馬さんの小説を読むときにいつも感じることだが、作品の背後から、

「うん、あれはおもしろい奴ちゃ」

そう言っている司馬さんの肉声が必ず聞えて来る。関西人らしい、なめらかなテノールの、あの声が、である。そこに司馬さん独自の世界がある、と私は思っている。

平安朝の女流作家の紫式部と清少納言の作品を比較してよく言われることに、紫式部のは「あはれ」、清少納言のは「をかし」の文学だという批評がある。が、この問題は、単に平安女流のことだけに終らず、その後も日本の文学の流れの中に、姿を変え、形を変えながらもずっと続いていることではないだろうか。そして、司馬さんの小説は、いわばこの「をかし」の系譜を引継いだものではないか、と私は思う。もちろん「あはれ」がいいとか「をかし」がいいとかきめる

ことはできない。それは、書き手の資質の問題というよりほかはないことだからだ。ただ「をかし」の系譜の作者は、作中人物といっしょに号泣したり、わめいたりはしない。ああいびられましたの、こう意地悪されましたのと愚痴もこぼさない。おそらく司馬さんの作品を読んで、わんわん泣いたという読者は、一人もいないのではないか。

が、これは決して司馬さんの作品にとって、不名誉でも何でもないことは言うまでもない。司馬さんの作品を読んで与えられる感動は、おのずから別のところにある。そして、この種の作品の書き手として、そういう作品のありかたを多くの人に知らしめた人として、司馬さんは貴重な存在だと思う。私もじつは、もの書きとしては、より「をかし」に魅(ひ)かれるせいもあって、司馬さんのこの視点に大変関心を持っている。ただ「近代説話」の先輩というだけでなく、より多くの敬愛を感じるのはこのためかもしれない。もっとも歴史ものを書くということじたいが、そういうことをぬきにしては考えられない事なのだが、じつは、この「をかし」の文学は日本ではいちばんひよわで、育ちにくかった。歴史小説の分野でさえ「アアカワイソウニ、カワイソウニ」でなくては通用しなかったのであり、そこに司馬さんは、別の視点で一石を投じた。といえるのではないだろうか。よく司馬さんの作品を賞賛して、現代社会にも通用する感覚などという言い方がされているが、おそらく司馬さんにとっては、お門ちがいの評価なのではないかと思う。性急に現代社会と結びつけて解釈すると底が浅くなってしまう。また司馬史観を持ちあげすぎるのもどうだろうか。たしかに歴史小説を書いていて、「史観」などといわれると悪い気分はしないものだが、考えてみれば、それは歴史小説のイロハである。それがなくては、歴史小説にもならないわけで、要は、そこから、いかに作品の花を咲かせるかであって、司馬さんの作品についていえば、独自の「をかし」の世界をこそ、評価すべきだと思うのだが……。



*

じつは、先にふれた対談の折、千代について、当然話題になったのが、例の名馬購入事件だった。これは、戦前の日本では、教科書にも載っていた。

流浪の生活の長かった山内一豊は、織田信長に仕えてからも、なかなか経済的な余裕がなかった。ところへ、ある日、安土城下に馬市がたった。そこで彼は今まで見たこともないような名馬に出会(でく)わせた。きけば奥州南部の産だという。南部は昔から、名馬の産地として有名なところだが、その値黄金十枚と聞いて、彼は肝(きも)をつぶす。これでは到底買えないと思って家に帰ると、千代は夫の思案顔に気がつき、理由をたずねる。そして、事情を聞くと、鏡の裏にかくしてあった黄金十枚を取出し、夫の前に並べた。

「これで是非お買い下さい。これは嫁ぎますとき、父が夫の大事の折にまいらせよ、と言ってくれたものです」

と言った。一豊は喜んでこれで名馬を買ったところ、間もなく都で馬揃(うまぞろえ)があり、この名馬が信長の目にとまった。貧しい中でも武士のたしなみを忘れぬ心掛けが賞され、これを機に一豊は出世のいとぐちをつかんだ、というのである。

この話は江戸時代の「藩翰譜(はんかんぷ)」「鳩巣小説(きゅうそう)」「常山紀談(じょうざん)」などに載っている。この話のおかげで、

千代は貞淑な妻の見本ということになるのである。

　が、じつをいうと、この話は疑問点が多い。以下は山内氏についてくわしい高知大学教授、山本大（たけし）氏の「山内一豊」の考証に負うところが多いのだが、この時期を信長の安土時代、それも馬揃に近いころということにすると、天正九年前後のこととなり、そのころはすでに一豊は二千石をもらっている。わざわざ千代のへそくりをあてにしないでもいいのではないか、という気もしてくる。

　また、千代が嫁ぐときすでに父は死んでいるから、父が手ずから千代に与えたというのもおかしい。それどころか戦災孤児同然の千代が、当時としてはかなりの資産である黄金十両もの持参金を持ってくることがあるだろうか。

　おもしろいことに当の山内家には、この名馬を買う話は伝わっていないそうである。これは私が直接山内家の子孫の方から聞いた話だからたしかであろう。これは別に貧乏を恥じてのことではない。山内家は貧しくマナ板を買わずに枡（ます）を裏返して使ったといわれ、その枡は家宝として、一豊を祀る藤並神社におさめられていたという。もっともこれは戦災で焼失してしまったということだが。

　いろいろ考えてみると、どうもこの話はつじつまがあわないのだ。いろいろ話すうち、

「この話は作り話かもしれませんね」

「うんそうかもしれん」

と司馬さんと私は大笑いした。



　もっとも司馬さんの「功名が辻」には、この黄金十枚のエピソードはちゃんと使っている。が、この事は司馬さんの小説の価値を傷つけるものでは決してない。小説と歴史は違うのだ。歴史書ならこれを全く無視するか、あるいは、こういう点で疑わしい、と書けばいいわけだが、小説は虚構を逆手にとって、新しい花を咲かせてゆく。ひとつひとつは虚構でも、そのつみかさねの中に、息づいている人間像が作られてゆくこともある。これに限らず、「功名が辻」の中では、むしろ、司馬さんは、大胆に虚構をふまえて話をすすめて行っているところがあり、それがこの作品をおもしろくしているともいえるのだ。

　たとえば、名馬の件で、千代が黄金十枚を出す。これは父ではなく伯父の不破氏から貰ったということになっている。と、一豊はすぐにはそれに飛びつかない。むしろ、

「なんと可愛気のないやつだ」

とどなってしまうのだ。

「われら二人は年中貧乏に堪えて来たのに、お前だけはこっそり黄金を秘めかくし、わしにも知らせなんだ」

　なんと情の強（こわ）いおなごよ。お前はそういう女だったのか……。

　じじつ彼がそう言ったかどうかはともかくとして、これは夫婦の間の呼吸としては、まことにリアリティがある。このエピソードが真実かどうか知らないころから私がいちばん抵抗を感じたのも、そこだからだ。いくら夫の大事につかえと言われたからといって、結婚以来何年間も、夫に内緒で大金をかくしているとは……。しかも、その日常は貧乏の連続だというのに。幸い夫が

馬を買うと言ったからいいようなものの、もしその事がなかったら、この女は、いつまでこの大金をかかえこんでいるつもりだったのか……。

情のこわい女という言葉はまさに名言だ。しかもそれを聞いた千代に、司馬さんはぼろりと涙をこぼさせている。

「伊右衛門が突いたような女であることを、自分がいちばんよく知っている。（中略）自分が男なら、そういうさかしらぶった複雑な構造の女房など、もちたくない」

そこで、その印象をぬぐうべく、千代はぼろりと涙をこぼすのだ。

「泣くにかぎるわ。理屈をいわないで」

すると便利なもので、あとからあとから涙がでてきて、わけもなく悲しくなって来た。

司馬さんは、ここでみごとに「悲しいから泣くのではない。泣くから悲しくなるのである」という心理学者の説を応用している。

千代の涙を見て伊右衛門はあわてる。夫婦の危機はこれで回避される。しかも名馬購入は、平凡な彼の印象を一変させた。山内一豊はなかなかなものだ――と人々は彼を見直す。かんじんなのはここである。

「千代は、馬などよりも、その『うわさ』を黄金十枚で買ったといっていい。馬は死ぬ。うわさは死なないのである」

このあたりに、司馬さんの躍如たる面目を感じるのは、白状すると、同じ素材を使って、私自身が全く別の仕立てで短編を書いているからでもある。私は、もちろんこのエピソードを全く信



じてはいない。が、もの書きは、「あれはうそでございますよ」ということについて、幾通りの言い方でもできるものなので、私は私なりの言い方をしたわけである。ここで自分の駄作について披露するのは遠慮するが、私はこのエピソードを通じて、むしろ山内一豊の方に興味を持った。この噂がひろまるについては、むしろ彼の演出もあったのではないかと――。これも司馬さんと話したことだが、千代の周辺をさぐっていって、司馬さんが千代をおもしろいと思ったのと反対に、むしろ私は夫の一豊という男がおもしろくなったのである。あの戦国乱世に織田、豊臣、徳川に仕え、終りを全うした家は、山内とか細川とか、数えるほどしかいない。これは山内一豊が、いわゆる槍ひと筋の武功型の武将でなかったことが幸したのではないかと思う。ちょっと見には、華かな武者働きが戦国武将的でおもしろいが、むしろ、地味な外交、政略などの総合力によらなければ、命は保てない。腕っぷしの強いだけの武将が次々脱落するのはこのためだ。秀吉や家康は、戦陣の駆引もうまかったが、彼らが天下をとったのは、むしろ外交、政略のたくみさによるところが多い。一豊にいたっては、武功の方は極めてお粗末だ。朝倉攻めに、敵方の武将三須崎勘右衛門の首をとった事ぐらいであろうか。それだけに外交、政略の才はかなり評価されていいと思う。

私はこの人物に、小型の家康を感じている。がまん強さ、息の長さ――。かつての同僚に次々追いこされても黙々と地道に生き、遂に戦国から徳川三百年を生き通す基礎を作るのである。この彼に賢婦千代の伝説がまつわりつくということは、ある意味では理由のないことではない、という気がしている。

それはそれとして、司馬さんの名馬伝説の料理の仕方は、やはり楽しい。性急に伝説を否定するのではなくて、おおどかに受入れながら、それをたくみに自己のペースに巻きこんでしまう。
それにつけて思い出すのは、司馬さんが無類の聞き上手だということだ。座談のうまいことは天下一品だが、そういう人の中には、えてして相手のいうことを聞きいれない御仁がいる。が、司馬さんは違う。
「ほう、ほう、おお、そうか」
あの眼鏡の底の大きな眼を見開いて、感にたえたように言う。しゃべる方は、だから、つまらないことを言っても、自分がひどくりっぱなことでも言ったような錯覚に陥り、ついついいい気持になる。それも、ぺらぺらとした合槌(あいづち)上手でなく、いかにも好奇心をそそられたように言ってくれるのがうれしいのだ。その聞き上手の司馬さんは名馬伝説でも大きく肯(うなず)いている感じである。
ついでに話し上手の司馬さんの素顔も、この作品の中にちらちらしている。たとえば、名馬事件についても、司馬さんは、人々が感心したのは名馬を買ったからではなく「黄金十枚」に衝撃をうけたのだという。なぜなら、そのころ、人々は黄金に対して、夢のようなあこがれを持っていたから……。

＊

そういう語りくちは、この作品の随所にある。ときには千代を離れてその方に力が入っている所があるが、読者に、



――そうだ、ここではどうしてもこの話を聞かねば気がすまないな。
という思いを起させる。この作品は昭和三十八年十月から四十年一月にかけて、地方紙数紙に連載されたものだという。土佐については造詣の深い司馬さんが、その藩祖夫人を描く筆には、ゆとりがある。それだけに、聞き上手、話し上手の司馬さんの素顔が最もよくのぞける作品の一つではないだろうか。

文春文庫

# 功名が辻(四)

定価はカバーに表示してあります

1976年4月25日　第1刷
2001年6月15日　第48刷

著　者　司馬遼太郎

発行者　白川浩司
発行所　株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102-8008
TEL 03・3265・1211
文藝春秋ホームページ　http://www.bunshun.co.jp
文春ウェブ文庫　http://www.bunshunplaza.com



印刷・凸版印刷　製本・加藤製本
Printed in Japan
ISBN4-16-710520-9

（　）内は解説者

司馬遼太郎
## 翔ぶが如く（全十冊）
明治新政府にはその発足時からさまざまな危機が内在外在していた。征韓論から西南戦争に至るまでの日本をダイナミックに捉えた大長篇小説。NHK大河ドラマ原作。（平川祐弘）
し-1-39

司馬遼太郎
## 木曜島の夜会
オーストラリア北端の木曜島で、明治初期から白蝶貝採集に従事する日本人ダイバーたちがいた。彼らの哀歓を描いた表題作他「有隣は悪形にて」「大楽源太郎の生死」「小室某覚書」収録。
し-1-49

司馬遼太郎
## 歴史を考える
司馬遼太郎対談集
日本人をつらぬく原理とは何か。千数百年におよぶわが国の内政・外交をふまえながら、三人の識者、萩原延壽、山崎正和、綱淵謙錠各氏とともに、日本の未来を模索し推理する対談集。
し-1-50

司馬遼太郎・陳舜臣
## 対談　中国を考える
日本と密接な関係を保ちつづけてきた中国を的確に理解しているだろうか。両国の歴史に造詣の深い両大家が、長い過去をふまえながら思索した滋味あふれる中国論。
し-1-51

司馬遼太郎
## ロシアについて　北方の原形
日本とロシアが出合ってから二百年ばかり、この間不幸な誤解を積み重ねた。ロシアについて深い関心を持ち続けてきた著者が、歴史を踏まえて、未来を模索した秀逸なロシア論。
し-1-58

司馬遼太郎
## 手掘り日本史
私の書斎には友人たちがいっぱいいる——史料の中から数々の人物を現代に甦らせたベストセラー作家が、独自の史観と発想の核心について語り下ろした白眉のエッセイ。（江藤文夫）
し-1-59

文春文庫
司馬遼太郎の本

（　）内は解説者

司馬遼太郎
## この国のかたち（全六冊）
長年の間、日本の歴史からテーマを掘り起こし、香り高く豊かな作品群を書き続けてきた著者が、この国の成り立ちについて、独自の史観と明快な論理で解きあかした注目の評論。
し-1-60

司馬遼太郎
## 八人との対話
山本七平、大江健三郎、安岡章太郎、丸谷才一、永井路子、立花隆、西澤潤一、A・デーケンといった各界の錚々たる人びとと文化、教育、戦争、歴史等々を語りあう奥深い内容の対談集。
し-1-63

司馬遼太郎
## 最後の将軍　徳川慶喜〈新装版〉
すぐれた行動力と明晰な頭脳を持ち、敵味方から怖れと期待を一身に集めながら、ついに自ら幕府を葬り去らなければならなかった最後の将軍徳川慶喜の悲劇の一生。（向井敏）
し-1-65

井上靖・司馬遼太郎
## 西域をゆく
少年の頃からの憧れの地へ同行した二大作家が、興奮も覚めやらぬままに語った、それぞれの「西域」。東洋の古い歴史から民族、そしてその運命へと熱論は続く。（平山郁夫）
し-1-66

司馬遼太郎
## 竜馬がゆく〈新装版〉（全八冊）
土佐の郷士の次男坊に生まれながら、ついには維新回天の立役者となった坂本竜馬の奇跡の生涯を、激動期に生きた多数の青春群像とともに大きなスケールで描く永遠の青春小説。
し-1-67

司馬遼太郎
## 歴史と風土
「関ヶ原の戦い」と「清教徒革命」の相似点、『竜馬がゆく』執筆に到るいきさつなど、司馬さんの肉声が聞こえてくるような談話集。全集第一期の月報のために語られたものを中心に収録。
し-1-75

## 文春文庫

司馬遼太郎の本

（　）内は解説者

### 十一番目の志士（上下）
司馬遼太郎

天堂晋助は長州人にはめずらしい剣のスーパーマン。高杉晋作は、旅の道すがら見た彼の剣技に惚れこみ、刺客として活用する。型破りの剣客の魅力ほとばしる長篇。（奈良本辰也）

し-1-2

### 世に棲む日日（全四冊）
司馬遼太郎

幕末、ある時点から長州藩は突如倒幕へと暴走した。その原点に立つ吉田松陰と、師の思想を行動化したその弟子高杉晋作を中心に変革期の人物群を生き生きと描き出す。

し-1-4

### 酔って候
司馬遼太郎

土佐の山内容堂を描く「酔って候」、薩摩の島津久光の「きつね馬」、宇和島の伊達宗城の「伊達の黒船」、鍋島閑叟の「肥前の妖怪」と、四人の大名を材料に幕末を探る。

し-1-8

### 功名が辻（全四冊）
司馬遼太郎

戦国時代、戦闘も世渡りもからきし下手な夫・山内一豊を、三代の覇者交代の間を巧みに泳がせて、ついには土佐の太守に仕立て上げたその夫人のさわやかな内助ぶり。（永井路子）

し-1-17

### 故郷忘じがたく候
司馬遼太郎

秀吉の朝鮮侵攻のおり、薩摩に連れてこられた陶工たちが、帰化しても姓をあらためず、故国の神をまつりながら生きつづけて来た姿を描く表題作に、「斬殺」「胡桃に酒」を収録。

し-1-21

### 歴史を紀行する
司馬遼太郎

風土を考えずに歴史も現在も理解しがたい場合がある。高知、会津若松、佐賀、京都、鹿児島、大阪、盛岡など十二の土地を選んで、その風土と歴史の交差部分を見なおした紀行。

し-1-22

## 文春文庫

司馬遼太郎の本

### 幕末
司馬遼太郎

歴史はときに血を欲する。若い命をたぎらせて凶刃をふるった者も、それによって非業の死をとげた者も、ともに歴史的遺産だ。幕末に活躍した暗殺者たちの、いわば列伝である。

し-1-23

### 夏草の賦（上下）
司馬遼太郎

戦国時代に四国の覇者となった長曾我部元親。ぬかりなく布石し、攻めるべき時に攻めて成功した深慮遠謀ぶりと、政治に生きる人間としての人生を、妻との交流を通して描いた長篇。

し-1-24

### 義経（上下）
司馬遼太郎

牛若丸としての少年時代から、義経となって華やかに歴史に登場したこの武将は、軍事的な天才ではあったが、あわれなほどに政治感覚がなかったため、ついに悲劇的な最期に至った。

し-1-26

### 日本人を考える
司馬遼太郎対談集

梅棹忠夫、犬養道子、梅原猛、向坊隆、高坂正堯、辻悟、陳舜臣、富士正晴、桑原武夫、貝塚茂樹、山口瞳、今西錦司の十二氏を相手に、日本と日本人について興味深い話は尽きない。

し-1-36

### 殉死
司馬遼太郎

戦前は神様のような存在だった乃木将軍は、無能ゆえに日露戦争で多くの部下を死なせたが、数々の栄職をもって晩年を飾られた。明治天皇に殉死した彼の人間性を解明した問題作。

し-1-37

### 余話として
司馬遼太郎

アメリカの剣客、策士と暗号、武士と言葉、幻術、ある会津人のこと、『太平記』とその影響、日本的権力についてなど、歴史小説の大家がおりにふれて披露した興味深い、歴史こぼれ話。

し-1-38

## 文春文庫・司馬遼太郎の歴史小説

### 夏草の賦　(上)(下)

戦国期の四国の覇者・長曾我部元親の深謀遠慮ぶりと政治に生きた人生を、妻との交流を通して描いた長篇。

### 義経　(上)(下)

華やかに歴史に登場した義経は軍事的天才であったが政治的感覚が全くなかったため、悲劇的最期を遂げる。

### 坂の上の雲　(全八冊)

歌人正岡子規と軍人の秋山好古・真之兄弟を中心に、維新を経て近代国家をめざした明治を描く大河小説。

### 殉死

輝ける英雄として称えられ、多くの栄誉を受けた乃木将軍。明治帝に殉死した彼の人間性を解明した問題作。

### 翔ぶが如く　(全十冊)

征韓論から西南戦争に至るまで、新生日本を根底からゆさぶった激動の時代をダイナミックに捉えた大長篇。

### 木曜島の夜会

オーストラリア大陸北端の木曜島で、白蝶貝採集に従事した男たちの哀歓と軌跡。ほかに短篇三作を収録。

### 菜の花の沖　(全六冊)

江戸後期、日露関係のはざまで数奇な運命をたどった北海の快男児・高田屋嘉兵衛を描いた雄大なロマン。